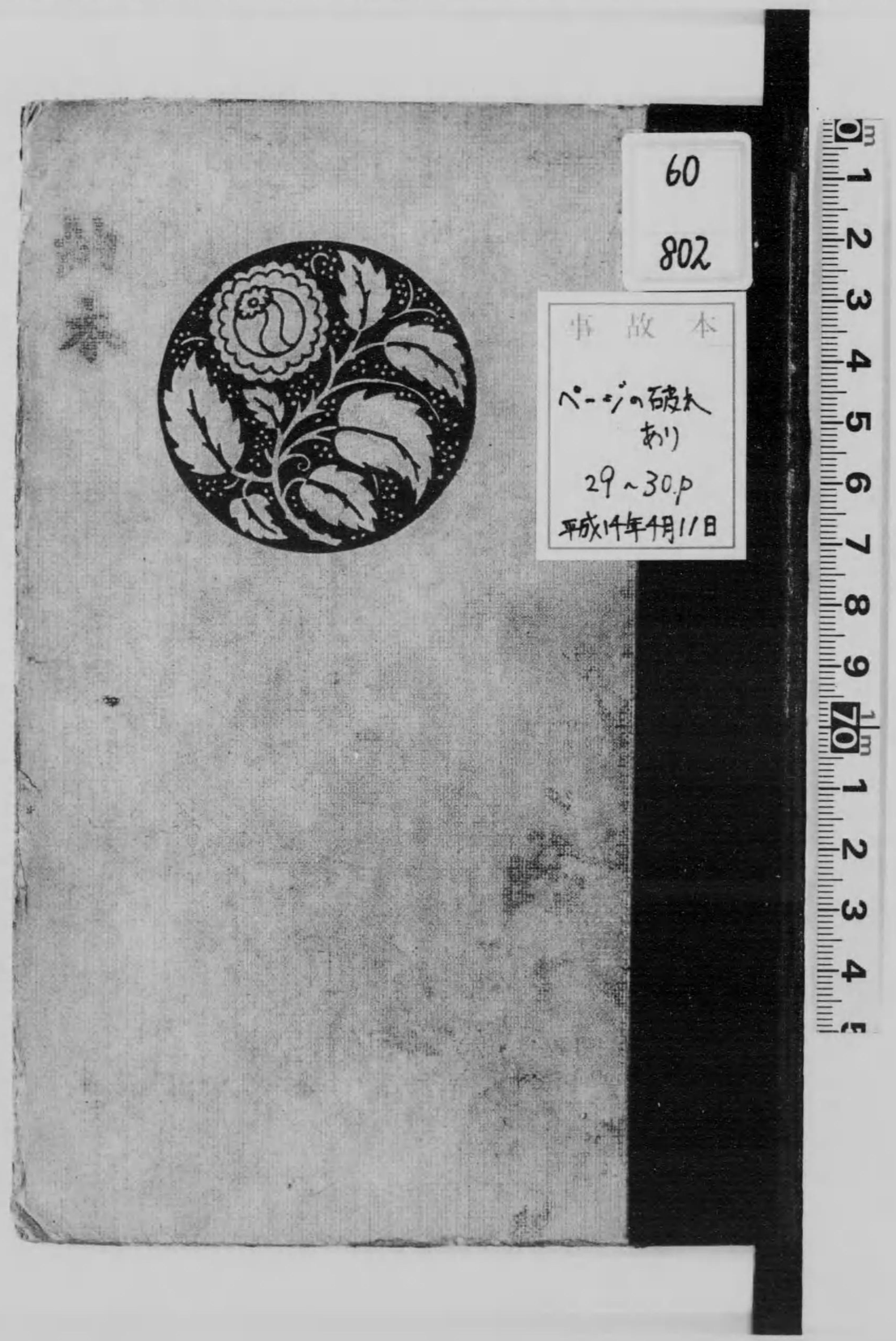


60
802
事故本
ページの破れ
あり
29～30p
平成14年4月11日

始

納本

婦人衛生

醫學博士 原田 隆著

家庭醫學講話 第一編

東京 博文館藏版

大正 14. 9. 10 内交

60-802

家庭醫學講話刊行に就きて

紅に萠え出づる庭前の花、亭々たる巨木、皆之れ大地より生れたるものにあらずして何ぞや、人の此の世にあつて天地不窮の大業を遂ぐるも、先人未知の發明をなすも、皆之れ人の肉神より生れるものなり、西哲の Mens sana in Corpore sano とは實に人を欺かざるの金言なり、宜なり人競ふて衛生の道を明かにせんと焦慮す、茲を以て吾等同人相集まりて、日常家庭にありて、知らざるべからざる凡百の衛生の道を各々專門的に、極めて適正に解説して、座右に資せんとす、幸に微衷を達するを得ば、幸甚之れに過ぎざるなり。

序

凡そ人類自己生存の要旨は、修養と活動とにあり、而して其の目的を達するの捷徑は、健全なる身體を得るにあり、就中婦人にありては、生殖器の生理、衛生より急なるはなし、然れども世人誤て之れを說くを以て猥褻なりとし、甚だしきは初等學校の生理、衛生の教科書に於ても之を省略せり。

一方子女の性慾的教育に關し、殆んど些の知見なき世の母は、單に已れの幼時より經過せし傳說的觀察により、其子女を教養せんとす、又危ひ哉、實に彼等の腦底を充す所のものは、古代印度、支那等の傳說にして、日月星辰等により疾病を占はんとするが如き迷信的口碑に過ぎず。

然れども、今や世人の迷夢漸く覺醒の機運に際會し、其子女のため最善の衛生に注目し、婦人又爭つて自己の衛生を重んぜんとす、此れ予が禿筆を呵して一小冊子となし、世に公にする所以なり。

余先きに婦人衛生を著はして世に問ふや、幸ひに讀者の賞讃を得たり、然れども今にして之れを見る、世の進運に際して改訂すべきの又多し、且つ更に平易に祖述するは益ゝ本書の目的に適する所なり、茲に殆んど雪態を留めざるまで改訂し、家庭醫學講話第一講として刊行する所以なり。

大正十四年八月

浪華の寓居にて　著者識

目次

第一章　婦人生殖器の解剖……一

骨盤—骨盤の區別—薦骨と尾骶骨—骨盤の徑線—第二次的性徴　婦人の腦髓—生殖器—乳房　外陰部—膣—白帶下の醫學的觀察—會陰—膀胱及尿道—直腸—直腸の障害—子宮—子宮の腹膜—靱帶—輸卵管—卵巣—卵子の成熟—排卵の機能—生殖器の血液循環—生殖器淋巴管系—生殖器の神經

第二章　婦人の生理……四四

婦人生存期の區劃—胎兒の生殖器發育の狀態—小兒期の變化—發育期に於ける生殖器の變化—月經の異名—月經の迷信—月經とは何ぞや—月經說—オツト—氏月經曲線—月經時の解剖的變化—月經型—月經血の性狀—月經時に於ける局所的及全身症狀—月經の初潮—更年期出血と其全身症狀—老年期

第三章　婦人生殖器の衛生……六六

婦人生殖器衛生の必要―小兒期の衛生―佝僂病―初生兒乳腺炎―外陰部及膣炎　外陰部及膣炎の看護―性教育法―發育時の衛生―清潔―入浴及身體摩擦―手淫―體操及び遊戯―常習性便秘―發育時の睡眠・少女修學時間―發育期及破爪期に於ける身體發育の狀態―發育期學校教育の注意―衣服―衛生を實行するに就きての二大缺點―月經來潮時の教訓―月經時の衛生―月經帶―月經時不注意により起る障害―月經時の運動―月經時の勞働保護法―婦人の職業問題―月經の早期或は晩期の來潮―代償性月經―無月經及其原因―無月經の處置―月經痛―神經性月經痛―器械的月經痛　炎性月經痛―月經痛の處置―月經過多―其原因―其處置―婦人の不妊―不具疾患―疾患なき不妊―不妊の話―絶對的不妊症と比較的不妊症―不妊の原因―印度、アラビヤ支那の所説―近時の所説―卵の發育不能―精虫と卵との觸接障害―受胎した卵が孵化―得ざる場合―産兒制限―産兒制限とは何んぞや―我國の生産率―死亡率―人口增加率―人口の密度―我國未開墾地　マルザス論―新マルザス論―醫學上より新マルザス主義を實行する疾患―結核―惡阻―腎臟病―心臟病―神經精神病―惡性貧血―癲病―黴毒―血友病―脚氣―骨盤の狹窄―後屈子宮の嵌頓―生殖力―母親と妊娠の關係―更年期の衛生―妄想妊娠―更年期に於ける脂肪過多症―脂肪除去法

第四章　婦人病一般の豫防及養生……二四

婦人病直接の原因―若年の勞働過度―春機發動期の過勞　産褥時の勞働―子宮異常なるものゝ産褥時の注意―有害の生活法―交接より來る傳染病―生殖器結核―婦人の神經病―交感神經系―脊髓神經系―腦神經系―梅毒―淋病―尿道、膀胱加答兒　喇叭管炎―卵巣炎―骨盤腹膜炎―子宮周圍蜂窩織炎―手術を要すべき婦人病―手術の意義―手術界の功績者―消毒と無毒―ゼンメルワイス―クヒター―麻醉藥―クロロホルム―エーテル―局所麻醉―腰髓麻醉―子宮内膜炎―原因―症狀―診斷―手術―子宮後屈―原因―移動性と癒着性―手術―子宮、膣脱、會陰破裂―原因―手術―子宮癌腫―子宮癌の三種類―原因―徵候―療法療法の撰擇―手術―エツキス光線―ラヂウム照射―子宮筋腫―徵候―手術とエツキス光線―筋腫と妊娠―卵巣囊腫―徵候―妊娠と卵巣囊腫―手術―脱落症狀

第五章　妊娠の生理……二三

妊娠とは何ぞや―精糸―妊娠後子宮粘膜の變化―卵膜及胎盤の構成―胎盤―臍帶―羊水―數胎妊娠―妊娠持續日數―胎兒の成長―妊娠のために起る母體の變化―妊娠子宮の膨大―膣の變化―妊娠線―外陰部の變化―乳房の變化―妊娠徵候及び障害―妊娠の診斷―妊娠時の養生―家屋―衣服　飲食物―便通―尿―運動―清潔―乳房―交接―精神の安慰―睡眠―胎教と遺傳及遺傳病

第六章　妊娠時の疾患……二八四
ツハリの意義—惡阻—浮腫—靜脈瘤—妊娠腎臟炎—結核—心臟病—妊娠時の合併症—脚氣—梅毒—慣習性流產早產の原因—卵の疾病—葡萄狀鬼胎—惡性脉絡膜腫瘍—器械的妊娠中絕—血樣鬼胎—流產の經過—流產の障害—早產の經過—流產、早產の攝生—子宮外妊娠—喇叭管妊娠—原因—經過—徵候—喇叭管妊娠と月經との關係—手當—手術—子癇　徵候—手當

第七章　分娩の生理……三〇九
分娩とは何ぞや—分娩の原因—娩出力及產道—陣痛　腹壓—骨盤及軟部の分娩抵抗力—分娩機能—胎兒の位置—胎兒の姿勢—胎向—頭蓋位と骨盤端位と何れがよきや—前驅陣痛—分娩經過—開口期—娩出期—後產期—分娩經過の時間—初生兒狀態—分娩時の養生

第八章　分娩時の攝生……三二七
分娩時一週前の注意—分娩前の入浴—分娩開始時の注意—器具及び手指の消毒—產婦の消毒—內診の制限—護謨手袋—後產期の心得—後產期の注意—臍漏性結膜炎及其豫防—臍帶斷續の處置—初生兒の取扱

第九章　分娩困難及障害豫防の衛生……三四〇
分娩困難　陣痛異常　微弱陣痛—陣痛微弱の豫防—後產期に於ける陣痛微弱—過強陣痛痙攣性陣痛—產婦の處置—軟部產道より來る分娩異常—プロホーニツク食餌法—過大及狹窄骨盤—狹窄骨盤の原因及其種類—狹窄骨盤を起す疾病—狹窄骨盤を有するもの、衛生

第十章　產褥生理……三五九
產褥期間—子宮の復故作用及後陣痛—惡露—子宮口及び膣等の復故作用—乳汁分泌—授乳婦の營養—正規產褥經過—褥婦の脉博—褥婦の發汗—排尿困難—カテーテルによる膀胱加答兒—食慾—口渴—便通—精神與奮

第十一章　產褥時の衛生……三七一
靜養—褥婦の早期離床—早期離床の利害—褥婦の寢室—體溫測定—食餌—授乳時の食餌及乳房の養生—刺戟性食物—產褥時に於ける下劑—產褥時に於ける生殖器の處置—腹壁の處置—離床後の注意—產褥熱—我國產褥熱の初め—產褥熱の罹病率—產褥熱豫防の殊勳者—產褥熱の病原菌—病原菌侵入の機會—消毒—病症概念—看護法

第十二章　授乳時の養生……三九六
授乳の母子に對し必要なる理―授乳を禁止すべき疾患―婦人授乳率―自然營養と不自然營養の乳兒發育に對する影響―乳腺の發育不全―母乳の代用品―人乳と牛乳との差―初生兒に哺乳せしむる時期―マクリの害―授乳回數―授乳間の休養―授乳時間―乳兒の啼泣―早產兒の授乳―溫保―授乳方法―乳房の消毒―乳嘴の裂傷―乳腺炎―牛乳稀釋法―離乳の時期―乳婦の姙娠

目次終

家庭醫學講話

婦人衞生

醫學博士　原田隆著

第一章　婦人生殖器の解剖

凡そ人の健康體なりや、又は病體なりやを解するには、先づ其構造及び作用を知るを以て第一義となければならぬ、而して本書は主として、婦人に特有なる衞生及其他を說述するものであるから、從つて先づこれに關係ずる部位の解剖的構造、位置及び其等の作用を述べなければならぬ。

生殖臓器　子宮、膣、卵巣、喇叭管を云ふ

下腹臓器　腸、膀胱等を云ふ

腔管　四方より圍まれた内腔を云ふ

腰椎　腰部の脊椎

骨盤

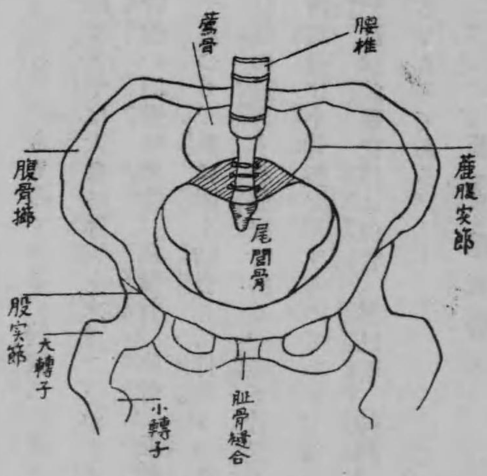
骨盤とは軀幹の最下端にあつて、下肢此の所に發し、婦人にあつては生殖臓器及び下腹臓器を包含保護するものである、而して骨盤は元來兩側の髖骨、薦骨、尾骶骨など相合して一條の腔管を形成せるものであつて、各骨の形狀の異なるに從ひ、其腔管内の各部に廣狹の差を來たすのは無論のことである、且つ婦人起立する時、骨盤は眞上方に面せずして、少しく傾斜して居るのであつて、卽ちこの時薦骨は後上方に位し、腰椎は其上方に、尾骶骨其下方にあるのである、而して骨盤傾斜の度は個人々々で差違のあるものである。

骨盤を形狀せる骨の中、髖骨とは、骨盤の左右にあるもので、其前壁及び側壁となり、後方では薦骨に接し、前方では左右の髖骨は互に相接して恥骨縫合を作つて居るのである。この髖骨も元來は腸骨、座骨、恥骨よりなつて、小兒期には、軟骨で僅かに連結しておつたものが、春期發動期乃ち十四、五歲に至り癒着して一個の骨となつたものである、而して上の三骨の湊合しておる處は、恰かも上腿骨と髖骨

髀臼　關節面の白の如く凹める所

との接合せる所であつて一の關節面を作つて居る、こゝを髀臼と云ふのである。

第一圖



骨盤の區別

骨盤を區別して大骨盤及び小骨盤とするのである、大骨盤とは、骨盤の上半口の大なる部であつて前方に向ひ、其後壁は第四、第五の腰椎、其側壁は腸骨、其前壁は腹壁の下部より圍まれ、其形は凡そ漏斗形をなしておるので、上方は廣く下方は狹くなつておる、只前方腹壁のみは前方に伸張し得るにより、從て姙娠後半期ともなれば、子宮の膨大するに伴ひ前方に膨隆

することが出來るのである、大骨盤内は妊娠でない時は腸管によりてのみ充滿せられておるが、妊娠して第四ヶ月頃となれば、膨大せる子宮は小骨盤より出でゝ大骨盤に上昇するものである、膀胱も亦尿が充盈するときは大骨盤に昇り、ために分娩時などでは大なる障害を來すことがある。

小骨盤の四壁は薦骨、尾骶骨、座骨、耻骨、腸骨及び座骨薦骨靱帶より圍まれた管腔であつて、互に固く結合して伸縮することの出來ないものであつて、分娩の際成熟胎兒の通過する道程である、從て骨盤中最も必要の所である、故に單に骨盤と言へば直ちに小骨盤を指すものである、實に小骨盤中には婦人生殖器、膀胱、尿道、直腸及び此等に伴ふ血管、淋巴管、神經、筋肉、腹膜、結締織等皆此の内に含蓄せらるゝものである。

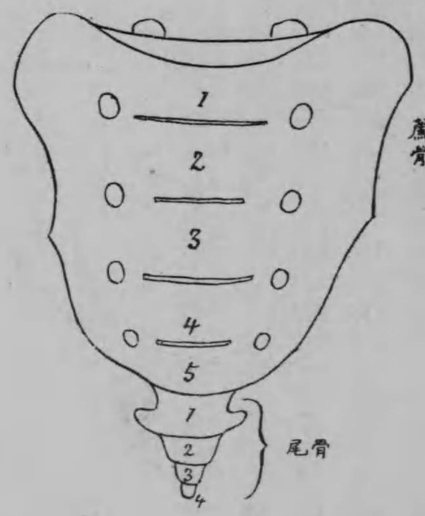
靱帶　白き光澤を有する強きもので一骨より他骨に互り連續するもの

結締織　纖維樣の組織なり體内の諸器を連繫し又は空所を充たすもの

薦骨、尾骶骨

薦骨は骨盤後壁をなせる一の大なる骨であつて、元來小兒の時には五個の椎骨よりなれるもので、後に癒着して一個の骨となつておるものである、故に其前面に見る四條の低き横線と其共端にある四對の孔とは、嘗て五個の骨よりなつてゐた殘痕を示すものである、

第二圖

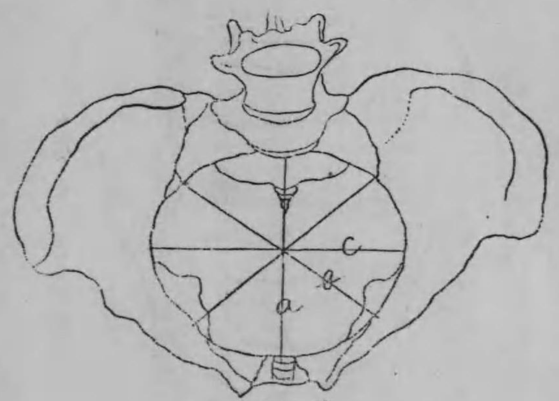


胛骨の突出せる所

薦骨全體の骨は粗三角形であつて、其上端の廣大なる所は第五腰椎に接して關節を作り、前方に突出してゐる、此れを薦骨胛と名づく、薦骨の下端は狹まくて尖り、直に尾骶骨に連つてゐる、薦骨内の空洞中には脊髓の下端下降し來れるものである。

尾骶骨は又四個の小骨よりなつてゐて、其形狀は略薦骨に類似してゐる、上端の大なる部は薦骨の尖端と連絡し、其關節は運動性を有し、分娩の際には後方に向つて移動することを得るものである。

第三圖



骨盤の徑線

およそ骨盤各部の廣狹が、分娩機轉に對して、重大なる關係を有することは無論のことである、然るに生體にあつて直接に小骨盤の廣狹を知るの方法はない、故に假りに大骨盤の廣狹を計つて、以て小骨盤の廣狹を知るの標準とするのである、その目的のため種々の徑線を設けて比較することになつてゐる、

徑線（さしわたし）

乃ち左右腸骨の前上棘の横徑距離、兩側腸骨櫛の横徑距離、第五腰椎棘狀突起の尖端より耻骨縫合上縁に至る直徑距離、一側の腸骨後上棘より他側の腸骨前上棘に至る斜徑距離などこれである。

前上棘（前方、且つ上方の尖端）

腸骨櫛（腸骨の上端櫛狀の部）

骨盤の高低及び廣狹は男女によつて差異のあるもので、女子の骨盤は男子の骨盤に比し、其高さ低くして且つ廣きものである、されど骨盤は獨り男女によりて差あるのみならず、又人種によりても其形狀を異にするものであつて、例へば歐洲人の骨盤が其の高さ低く、骨盤入口楕圓形なるに反し、黑人のそれは圓形なるが如きである。

第二次的性徵

男子と女子との差は獨り骨盤及び生殖器のみに止まらず、解剖的構造に於ても大なる差異のあるもので、「ダーヴキン」は之れを稱して第二次的性徵と言ふのである、卽ち乳腺の發育及身長、體重に於ける差異の外「シャフハウゼン」により發見せられた上中門齒に於て、又皮膚の透明なる點に於て、其他皮膚の色素濃厚なる

點に於て、脂肪の沈着豐富なる點に於て、全身の形容豐圓にして男子の如き骨骼、筋肉系統の著しく發達せるに反對なるが如き、音聲、毛髮等に於て、一々兩者の差異を證明することを得るもので、就中皮下脂肪の發育如何は婦人の第二次的性徵に大なる關係あるもので、實に形容豐圓の度其宜しきに適ふたる時吾人は之れを稱して婦人美と言ふのである、之れに反し身體羸瘦するときは遂に婦人の形容を惡化することあるもので、殊にホッテントット人及びオーストラリア人等に於ては他の人種では未だ尙一般に靑春の氣焰ゆるの時代に、既に著しく脂肪少なきが如きは其美を殺ぐこと大なるものである、之れに反し又婦人の全身脂肪の沈着過大なるときも亦形容甚た惡化することあるもので、時として又或る人種では婦人の身體中、所々に脂肪の集積せるを見ることさへあるのである。

婦人の腦髓

其他婦人の腦髓が男子のそれと異なり、生理的に痴鈍なりと論ずる「ビショプ」などもあつたが、男子の腦髓が婦人のそれに比し小なりと言ふが如き（前者は平均千三百七十五瓦、後者は千二百五十瓦）、腦の周圍も女子は男子のものより二乃至三仙米小さい、或は腦の中央部（筋肉運動の中樞）が男は女に比し廻轉の幅も廣く溝も深ひと言ふが如き、之れに反し腦の後部、（感覺、感情、情緒などの中樞）は女子が男子に比し能く發達せりと言ふが如きは、尙未た今日の學術程度に於て男女智能の優劣を斷定すること能はざるもので、先づ男女腦髓では大した特別なる差異なしと見るべきである。

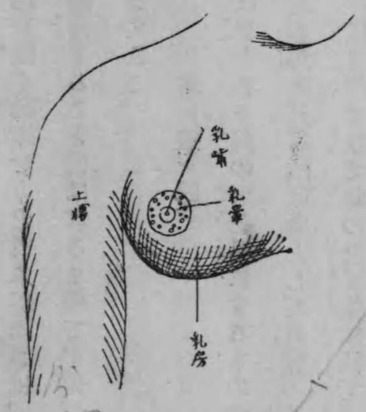
生殖器

生殖器は男女各々其の形を異にするもので、從つて又其機能を異にするものである、けれども共に其目的は主として人類の蕃殖を司どる機關で、交接、授胎、姙娠、分娩、授乳等は總て此の女子生殖器で司どらるゝものである、而して之れを分ちて內生殖器及び外生殖器とにし、前者は骨盤內に潛在せるものを云ひ、後者は骨盤外に露出するものを言ふのである、而して外生殖器を又別ちて二つとする

乳房

であつて、一は乳房にして、他の一は外陰部これである。

第四圖



乳房は胸廓の前面にあつて、一雙の半球形をなしておるもので、婦人漸く長じて十四、五歳乃ち破瓜期となれば、忽ち發育して大きくなるものである。初姙婦であると經產婦であるとにより其形を異にするもので、前者は强く前方に凸隆すれど、經產婦は多く懸垂してゐる、兩乳房間の凹陷せる所を名けて乳間溝と云ひ、

欠

陰核は小陰唇前端二葉の間にある圓形の隆起體を云ふのであつて、こゝには多くの血管や、神經を有する爲め、之れに觸るれば勃起するのである、乃ち交接時には勃起して陰莖を押壓する作用がある。

尿道口は陰核の下方約二仙米の所にあり、尿の出づる所である。

膣

膣口は尿道の下方乃ち膣腔の入口である、處女にありては多くは輪狀をなした小指頭大の小孔を有する菲薄な處女膜で閉鎖せられてゐる。

膣は膣口より子宮に達するまでの膜管であつて、通常其前壁と後壁とは互に相密接して居るのである、其の長さ後壁は七仙米、前壁は五、五仙米あつて、膣の內面には無數の横に走る皺襞ありて甚だ伸縮し易き樣になつて居る、膣の最も廣き部は其最上方の部であつて、此れを膣穹窿と云ふのである、此の部の中央に子宮の下端乃ち子宮膣部が垂下し來たつて、爲めに膣穹窿を前後左右に分けてゐる、而して膣の前壁には尿道及膀胱があり、後壁には直腸が相隣接してゐる。

皺襞
粘膜のしわ

欠

腟壁は筋層及び粘膜層よりなり、この部の粘膜は寧ろ外皮に類似してゐる。

腟分泌物（俗に所謂白帶下）は主として腟粘膜細胞の脱落したものと、血管を滲透し來れる白血球及組織液とよりなれるものであつて、生理的に自家防禦の偉大なる作用を有するものである。

白帶下の醫學的價値

新聞の廣告などを見ておると（こしけ）專門の藥などと言つて、頭から（こしけ）の恐るべき徵候であること一、二にして足らない、例へば子宮癌のときに表るゝ肉漿樣の白帶下、それは確かに恐るべきものゝ一つであるに違ひない、之れは子宮癌が殆んど不治の病とせられて居るからである、又子宮頸管加答兒や、子宮內膜炎乃至は子宮口周圍が靡爛せる時などにも、所謂白帶下がある、又淋毒に罹るときには著しく白帶下が增加して患者苦痛の種子となるのである、然し病的白帶下と云ふことは白帶下の色が白くなく著しく黃色を呈するとか、綠色に變ずるとか、或は白帶下の粘液性が强いとか、或はサラサラしておるとか、白帶下の量が增すとか、若しくは其の量が少しづゝ絕へず漏れるとか、周圍の粘膜又は皮膚腐蝕力の有無などゝ色々のことを考慮してゞなければ。これは健康であり、彼れは病的であるなどと斷定する譯に行かないのである、ト言ふのは元來白帶下と言ふものは婦人にはなくてならない必要のものであるからで、漸く娩出した許りの初生兒より老年の媼さんに至るまで必ず白帶下はあるものです、ナゼなれば子宮內膜には生理的に分泌物を出す腺、殊に子宮頸管には粘着力の强い分泌物を出す腺があり、腟壁にも（これは反對の說を懷く學者もあるが）腺があるので、其等の腺よりは多少に關はらず、絕えず分泌物があるとせなければならぬ、殊に腟口より外陰部に存する色々の腺、例へばバルトリン腺だとか、皮脂腺だとか隨分澤山分泌物を出す腺があつて、總て此等のものゝ混合したものを總稱して俗に白帶下と言ふて居るのである、故に白帶下は健全な中年期までの婦人には是非なくてはならないもので、白帶下の存在するか杞憂するは恰も口中に唾液の存在するを以て病氣なりと杞憂するにも等しき愚見である、

まことに口中には顎下腺や舌下腺、耳下腺などの分泌腺があり、絶えず唾液を分泌して居るのである、誰れか唾液の口中に存在するを以て病氣なりとするものがあるか。

故に「シュルッエ」氏はタンポン檢査をなして二十四時間タンポンを膣内に挿入してこれに附着せる白帶下を檢し健康なりや、病的なりや、若し病的のものであれば何れの部位の病氣なりやを決定したのである、若し分泌物のみを以て檢査せんとすればこれも一つの方法であるに違ひない。

上述の如く白帶下は誰れにでも、婦人であれば必ず存在するものであり、殊に自家防禦の作用あると言はゞ、誰れとて自然の妙機に驚きの眼を開かないものがありませう。

も一度私は生理的白帶下の性狀につきてお話をする順序になつて居る、凡そ膣管の下三分の一は酸性反應を呈してをり、其れ以上はアルカリ性だと言ふてをる、然し實際檢査するときは、膣内にある白帶下は殆んど總て酸性である、勿論子宮内膜腺から分泌する分泌物が、アルカリ性でなければならないのは無論であり、實際アルカリ性であるのであるが、然し膣内にあること久しきに渉るときは殆んど酸性である、例令生れた許りの初生兒の膣内にある分泌物所謂白帶下も、酸性である、この酸性なることが實に必要なる事であつて、後述せんとする自家防禦卽ち外部より來る諸々の細菌を絶滅せんとする威力を有するものである、然らばこの膣分泌物＝白帶下＝中にある酸性のものは何かと言ふに乳酸であつて、卽ち膣内に多數に棲息する膣桿菌の產生物であるのである、およそ斯くの如き膣分泌液中に細菌を絶滅せんとする力卽ち殺菌作用のあることに注意した最初の人は「デーデルライン」と言ふ獨逸の醫學者で、西曆千八百九十二年氏の著書中に此れが記載してあるのである、其の後色々の學者の研究もあつたが、未だ正鵠に解決を下したる人なく、其の儘となつてをつたのである、私は十餘年前略ぼ此れが研鑽を遂げたのであつて、以下殺菌作用が人により、時によりドンナに違つて行くか、殺菌作用の本體は何物であるかに就きて極く簡單にお話をしたいと思ふのである。

膣分泌物卽ち白帶下に殺菌作用あるを證明した試驗に面白い事實がある、卽ち「デーデルライン」は膣桿菌を培養して、乳酸の產生量多大なるとき葡萄狀球菌を試驗管內に入れて其の結果を見た所が暫くして見まするときには、少しも病原菌の存在を認むることが出來なかつた、換言すれば膣分泌液に殺菌作用あるを確めた試驗になつて居るのである、所が「メンゲ」や「クレニッヒ」に至つては更に一歩を進めて直接人體の膣內に綠膿桿菌と云ふ黴菌や又は病原菌として恐るべき力を有する連鎖狀球菌乃至は葡萄狀球菌を送入して、此等の黴菌の消滅したのを確認したのである、此等の試驗は中々恐るべきもので、若し膣分泌液にして、殺菌力がなかつたならば、實に憂ふべき結果を來すもので、人體への直接試驗は數次試驗管內にて無害なることを確めて後行ふべきものである。

上述の如き膣分泌物の殺菌作用あることは明かになつたが、然らば其の作用は何の爲であるか、膣分泌物の酸性なるがためなりと稱する學者もある、けれども、又中性或はアルカリ性反應を呈する膣分泌物にも殺菌作用存在す、之れに反し膣分泌物を稀薄にするときは其作用減弱するは勿論の事である、殊に高熱を與ふるときは著しく其の力を削減せらるゝは何のためであるか、これ諸學者の研鑽に從事し、且つ私も此れを研究した所以である。

今膣分泌液―白帶下―を種々の人、それは初生兒より老年に至るまでの各年代のもの、又は姙娠せるものと、せざるもの、病氣に罹れるものと、否らざる種々の人の分泌液の有する殺菌作用の强弱を檢するとき、そこに大なる差を生じて、自然防禦の妙諦を覺るを得るのである、何故さう言ふかと申すと、姙娠により婦人が抵抗力最も弱き時期、殊に恐るべき產褥熱に侵され易き姙娠末期には、その殺菌作用最も强激であるのであつて、然して初生兒時代や、幼時には無論、殺菌作用は弱く、又た產後の所謂產褥期となれば、サシモ姙娠前に强烈なりし殺菌作用は再び低減するに至るものである、彼れ是れ考ふる時は自然の妙機は實に驚嘆に値するものである。

今私が姙娠各月にて膣分泌液の殺菌作用の差を比較試驗した結果で見ると、姙

妊三ヶ月のものゝ分泌液にて六時間後には試驗に供した細菌は三十七分の一より二分の一の間に減少し、妊娠六ヶ月のものでは三十分の一より七分の一の間で減少し

妊娠八ヶ月以上のものにて檢査したるものによるときは六時間を經過したるものには些しも細菌を認むることを得ませぬでした。

多くの反覆した上の實驗により妊娠各月の腟分泌液の殺菌力は妊娠月數の進むに從ひ漸次昂進するものであつて、分娩前には最强度に達するもので、換言すれば生理的に最も殺菌作用の偉大なるを欲する時期には又自然の偉力により殺菌作用も强くなるものである事を知るのである。

然らば殺菌作用と云ふものは、如何なる細菌にも同樣の强さで滅菌するものなりや否やと云ふに、產褥熱の最も多くの原因となる連鎖狀球菌や、葡萄狀球菌乃至は大腸桿菌にはことごとく同じ威力を揮ふもので、これ實驗の結果明に知ることを得たのである。

更に腟分泌液の殺菌作用の原因とせらるゝ乳酸は、ドノ位液中に含有せらるゝものであるかと申すと、之れは寧ろ素人には面白ろき興味を以て見らるゝ所でありませう、實際色々の人より得たる分泌液を集めて能く攪拌し、其の濃度を定量した所によりますと、割合に多量の乳酸を得ましたので、自らも驚いて居る樣な次第であります、人によると〇、四％と稱したものもありますが、私の研究した所では〇、九％でありました、胃の中にある鹽酸量は通常〇、四％と申しますが、其れに比較すると大分多量の乳酸を含有して居る事になつて居ります、勿論此の際乳酸の外の或る酸例へば鹽酸であるとか、揮發性脂肪酸だとか、體內に生じ易き他の酸の存在を調査しましたが、乳酸より他のものは見付からなかつたのでありました。

所で妊娠月數の進むに從つて殺菌作用は强くなる事實がありまして、此の場合殺菌作用の大部分は乳酸であるとすれば、必ず乳酸も亦妊娠月數の累加するに從つて、其の量を增加せざるべからざるは理の當然である、所が實驗の示す所では乳酸の量は妊娠月數には全く無關係であつて、常に同一量を示指するのである、此れが乳

酸が殺菌作用の唯一の原因にあらざる事の判明した最大の事實であります。

茲を以て先づ第一に酸性腟液とこれに炭酸曹達液又は苛性加里液を加へて中和若しくはアルカリ性としたものと、更に酸性腟液と中和腟液と攝氏五十六度に熱した四種の腟液を取揃へ、各殺菌作用の強弱を檢査した所以である、所が其の結果は腟分泌液の殺菌作用は其の中に含有せらるゝ乳酸を中和する時には著しく減少せらるゝものであるが、然し中和せる腟分泌液も殺菌作用を有するもので、殊に中和腟液とこの攝氏五十六度に熱した中性腟液とを比較するときは、後者は前者に比し著しく其の殺菌力の減弱せるを見るのである、これによりて考ふるときはドーシテも腟液の殺菌作用は乳酸の他に尙殺菌物質として攝氏五十六度に熱するときは破壞せらるゝもの及びこの溫度以上にも耐ふる或る物質の存することを疑はざるべからざる破目に立ち至つたのである。

果然乳酸の腟液と同一濃度を有する化學的純粹乳酸液が有する殺菌力と、姙娠十ヶ月の腟分泌液のそれとを比較するときには、そこに大なる逕庭があるのである、

卽ち腟液と同一濃度にある乳酸液の殺菌作用は未だ完全なるものでなく、姙娠十ヶ月の腟液の旺盛なる殺菌力の九分の一乃至は十八分の一であり、到底比較すべからざるものであることを知つたのである。

更に化學的乳酸液の檢査のみを以て滿足せず、多くの人の腟液を集め、各其の乳酸の濃度を定めて、其の殺菌力の多寡を檢覆するときに、又上の如き結果を得るのであつて、卽ち同量の乳酸を含有する腟分泌液たりとも、其の殺菌方は常に相同じからざるのみならず、却て姙娠月數の累加によりてのみ、其の殺菌作用の增大するを知るのである。

然らば乳酸の他に、何が腟分泌液殺菌作用の原因をなせるものなりや、これ續いて起る問題である。

茲を以て話は少しく面倒となつて免疫學上の問題となり、素人には何の趣味もなくなりますので、細小の事は述べませぬが、兎に角その殺菌作用を有するものは攝氏五十六度の熱度により著しく減殺せらるゝものであるが、又例令中和せる腟液

でも攝氏五十六度で破壞せられない物質も存在することを認むるのであります。

而して攝氏五十六度の熱度により破壞せらるゝものはチターゼと稱するものであり、上の熱度に影響せらるゝ事なきものはロイキンである、しかも兩者共に白血球の產生物である、宜なるかな試みに膣液を顯微鏡上にて檢するとき、そこには多數の白血球を見るのである、且つ姙娠するときには白血球は姙娠月數を累ぬるに從ひて增加し、殺菌作用も亦姙娠月數を經過するに從ひ、强大なるを思はゞ、兩者の間全く何等の關係なしと斷言し得ぐさや、否兩者の間に隱密相通ずる因果律の存在するを認めなければならないのである。

斯くの如き見解よりして膣液の中に存する白血球より果して殺菌性の白血球產生物換言すればチターゼ、ロイキン增大するや否を試みんとて、採取した膣液を二分し、一は零度以下攝氏十五度に三時間氷結せしめ、白血球中に含有する殺菌性物質を遊離せしめ、他方氷結せしめないものと、其の殺菌力を比較するに、前者は後者より遙に殺菌力の大なるを知るのである。

かくの如き色々の試驗の結果により吾人の知る所は、およそ白帶下と稱するものには健全なるものと、病的のものとあり、白帶下なる名の下に慄然たるを要するものにあらず、寧ろ健全なる膣分泌液には婦人の自己防禦として必要なる多大なる殺菌力あるを知るのである。

しかも膣分泌物の殺菌作用は姙娠月數を累加するに從ひ增加し、分娩前に至りて極大に達するのである。

膣分泌液中に有する殺菌性物質は乳酸其の大部をなせども、其の他白血球の產生物又大いに其の力を專にするものであることを知る。』

膣の生理的作用は交接に營爲せらるゝ外月經流出の道程をなし、兼て分娩時には所謂產道となるものである。

會陰

會陰とは外生殖器の後部より肛門に至るまでの間を云ふのであつて、此れにより膣壁を支持し、又子宮を正位置に保つものである、會陰は外部より數ふる時は外皮、

皮下脂肪組織、彈力腱膜、筋肉等より構成せられてゐるもので、甚だ伸張し易きものである、從つて分娩時には著しく伸張して、胎兒の兒頭娩出に際し必要なる作用をなすものであるが、若し分娩時其伸張過度に達した時には、遂に會陰は破裂するもので、其度大なる時には隣接の膣又は直腸をも共に破裂することがある。

婦人の疾病中比較的多數に存するは泌尿臓器に關するものである、これらの臓器には腎臓、輸尿管、膀胱、尿道などがあるが、而しこれ等の中、生殖器と密接の關係を有するものは尿道及び膀胱である。

膀胱及び尿道

膀胱は恥骨の直後、子宮の前面にあり、兩側の腎臓より輸尿管を經過し來れる尿を貯溜する臓器である、其空虛である時は膀胱は小骨盤内に潜在するけれども、尿が漸次充滿するときには高く下腹部までも上昇するものである、殊に常に膀胱内に尿を貯溜する癖のあるものは、從つて子宮を壓して位置の異常例へば子宮後屈を起さしむることがある、又分娩時手術をなした等のため、創傷を作つて膀胱膣瘻と

て膀胱と膣との間に瘻管を作り、尿は常に膣より漏出することがある、膀胱炎は屢々吾人の遭逢するものであつて、多くは下方より病原菌の侵入するに因つて起るものである、膀胱は其下方は漏斗の如く、膀胱頸は狹小となつて尿道に移行する。

尿道は通常鉛筆大のもので、膀胱より出でゝ子宮膣部の前で恥骨縫合の後方を通過し、少しく彎曲して恥骨弓頂の所で尿道口を開いて居る。

直腸

直腸は腸管の末端であつて薦骨と子宮との間に位し、大腸に初まり薦骨の凹面の中央に沿ふて下り、尾骶骨の尖端の前方に開口してゐる、こゝを肛門と言ふ、其の周圍には括約筋があつて、且つ甚だしく血管に富んでゐる。

子宮を蔽へる腹膜は、其の後壁より後腟壁の上部に達し、遂に直腸の前壁に達するもので、從つてこゝには一の大なる腹膜窩を形成する、之れをヅウグラス氏窩と云ひ、屢々婦人生殖器疾患と共に侵襲せらるゝものである。

直腸の障害

分娩時會陰及び膣の大裂傷を起した時は、直腸も亦共に侵されて瘻管を形成する事がある、又後膣壁下垂する時は前直腸壁も亦共に下垂せられ、時として小囊を作ることがある、およそ直腸の血管は著しき集叢をなすが爲め、容易に欝血を起して痔核を作る事がある、其他又子宮の後方に位置の異常を來せる時、又は腫瘍、ヅウグラス窩に血腫、膿腫等を有せるものは、直腸管を壓迫し、爲めに屢々頑固な便秘を來すことがある、又膣及び直腸は共に密接するが爲め、兩者の疾患は互に蔓延することがある、例へば膣に傳染性帶下ある時は、帶下は會陰を超へて肛門を侵すことさへあるが如きは其一例である、又之れに反し膣直腸瘻ある時は、產褥中屢々病原菌が直腸より膣内に侵入し、遂に膣に炎衝を起し、或は產褥熱の原因となることがある。

血腫
血のかたまり
膿腫
膿のかたまり
炎衝
カタル性變化

子宮

子宮は膀胱及び直腸の間に狹まり、小骨盤の中央に其位置を占めて居る、古人曰く婦人の婦人たる所以只之れあるがためなりと、實に子宮は受胎した卵子を攝取し、其成長を司どるもので、卽ち胎盤（後產）により母體及び胎兒の新陳代謝を行ひ、分娩の際には子宮の收縮により、胎兒を體外に排出せしむるものである。

子宮は、常に四週每に反覆潮來し、同時に其粘膜も亦一週來る。

し、前方に傾欹し、且つ稍曲により變化するものであ從つて幅も三、五乃至五

腟穹隆
腟の最上部天蓋なせる所

部は腟穹隆に突出してゐる、此の部を子宮腟部と云ひ、少しく前後に扁平で滑澤である。

子宮頸は子宮の下方で狹小なる部を言ふのであつて、其一

宮は少しく大で、圓みを帶びるものである。

子宮の前面は平滑であるが、後面は稍々凸隆してゐる、子宮を分ちて通常三部とす、子宮頸部、子宮體、子宮底これ等である。

第七圖

ある、處女では其下端の中央に、殆んど圓形なるか、又は楕圓形の孔がある、これを子宮外口と言ふのである、實に腟より子宮腟に貫通する關門であつて、之れによりて分れたる前後の分裂部を前唇又は後唇と言ひ、子宮外口を通じて子宮腟に至るの道程は甚だしく狹窄せる管狀をなす、此れを子宮頸管と名く、其將に子宮腟に近接せる部を子宮内口と言ふ、但し單に子宮口と稱する

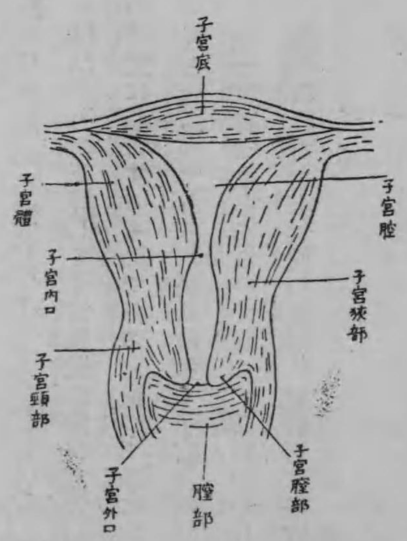
ときは一般に子宮外口を指示するものである。

子宮體は底及び頸の間になる部を言ふのであつて、其内腔は子宮腔と云ふ、子宮腔は三角形をなし、其基底は子宮底に向ひ、尖端は子宮内口の部である、基底の兩角には各て一の小孔があつて、兩側の輸卵管に移行してゐる。

子宮は元來三層よりなり、一腹膜層、二筋層、三腺を有する粘膜これである、子宮の内面は第三層粘膜で被包せられ、常時には前後の兩壁が互に相接し、僅に豆粒を容るゝに過ぎざるが、月經時には粘膜は充血し、腫脹して、遂に一部の粘膜は破壞せられて、血液を漏洩し、體外に排出することゝなるのである。

子宮内面を被ふ粘膜の中には多數の腺を有し、其細胞には氈毛を頂てゐる、之れあるが爲め、子宮腔内に於て上方より下方に向つて、一の流れを作つてゐる、此れは輸卵管より卵子を子宮腔内に送るに便せる生理的妙機であつて、男子生殖器より送入せられた精蟲は、自己運動によつて、流れに反抗してさへ子宮腔内に來り得るものである、健全な子宮粘膜腺より出づる分泌液は、稀薄にして硝子樣アルカリ

第八圖



性を呈してゐる、從つて粘膜は粘液のため多少濕潤せる狀態となつてゐる、若し子宮腔内に多量の粘液なるときは病的狀態だとしなければならぬ。

子宮頸管の粘膜は著しく皺襞となつてゐて其腺は幅廣く、且つ分岐すること多きものである、而して其分泌液は濃厚粘稠なる粘液である。

子宮底と稱する部は、子宮の最上部で、子宮腟より見るときは一の頂格をなせるが如き觀がある。

子宮の腹膜

子宮を被ふ腹膜は膀胱の後壁に起り、子宮體前壁の內子宮口部に進み、一旦上昇して子宮底を覆ひ、再び下降して子宮後壁を沿ひ、遂に腟の後壁上部に達した時、轉じて直腸の前壁に移行するものである、從つて玆に大なる腹膜窩を形成す、此れをヴヴグラス窩と云ふのである、斯くの如く子宮の前後を被包する腹膜は、子宮の兩側では合して一の廣靱帶となるのである、其靱帶中には多くの血管及び神經とを藏めて居る、廣靱帶は更に小骨盤の兩側に固着し、子宮の位置を保持する用をなしてゐる。

靱帶

凡そ子宮の位置を適當に保たしむる用を務むるものは、主として左右の廣靱帶で、其他子宮頸は腟の上端及び膀胱に密着し、又子宮頸部の後方よりは薦骨に向つて走る索狀體の腹膜皺襞がある、此れを子宮薦骨靱帶と云ひ、又子宮を保持する用に加はれるものである。

索狀體ひもの如きもの

圓靱帶は子宮の左右にあつて、筋組織より成れる長さ十二乃至十五仙迷の圓形の兩條である、子宮と輸卵管と相接せる部分より起り、斜に前方に走り、廣靱帶の間を匍行し、鼠蹊管を通過して陰阜に終れるものである、圓靱帶を實驗的に收縮せしむる時は將に子宮を前方に牽引する作用なり、從つて病的に子宮後屈する時は圓靱帶を牽引して、正位に復せしむることを得るもので、之れを「アレキサンダー、アダム」氏手術と言ひ、專ら行はるゝ方法である、斯く圓靱帶の伸展し又は弛緩するは、多くは子宮位置の異常より來るもので、或は全身疾患（例之結核症）の結果、或は下腹部に於ける炎性疾患の轉歸として來るものである、其他子宮の位置は移動性强きものなるため膀胱或は直腹の充盈により一時的に其位置々變化し得るものである。

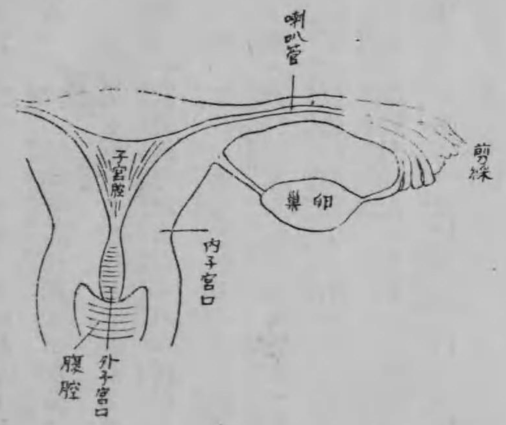
鼠蹊管　鼠蹊部の所で、腹腔の內外を通ずる管

輸卵管

輸卵管は又其形により喇叭管とも云ひ、長さ十仙迷に渉る小なる索狀のものである、初め子宮角に起り、水平に廣靭帶の上緣を走り、遂に卵巢の前方で腹腔内に開口してゐる、其の作用は名の如く卵子を兩卵巢より子宮腔内に移送するの用をなすものである。

輸卵管の腹腔に開口せる部は總房狀をなしてゐる、其の部を特に稱して剪綵と云ひ、其の中の一房は直接卵巢に密着してゐる、子宮に近く大きくして壜狀をなせる部を壜狀部と云ひ、子宮に接して小なる部を峽部と稱するのである。

第九圖



總房狀ふさの形

輸卵管は一腹膜層、二筋肉層、三多數の皺襞を有する粘膜層の三層よりなつてゐる、而して粘膜層の上皮細胞は氈毛を頂き、輸卵管の方向に振動してゐる、殊剪綵部の細胞に於てはソーである、玆を以て毛細流を起してゐて、卵巢より出づる卵子を輸卵管内に喚び寄せる作用を有してゐる。

子宮上角
子宮底の兩側

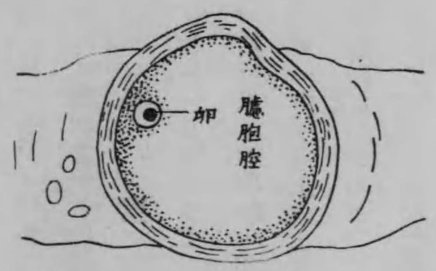
卵巢

卵巢は左右各一個宛あつて、其形扁平なる長圓形をなし、恰も梅實大の大さを有してゐる、其位置は輸卵管の後下方で、子宮の兩側に位し、廣靭帶後葉の間に占據してゐる、又一方子宮上角より輸卵管の後方に走る卵巢靭帶あつて、子宮底と結び付きて卵巢を固定してゐる。

卵巢を分ちて組織學的に二種とするを得、一は髓層と云ひ、他は皮層と云ふのである、皮層内には數多の大小不同の小胞があり、其小なるものを濾胞と云ひ、大にして成熟せるものをグラーフ氏胞と言ふのであつて、此等のものゝ中には各一個の卵子を有するのである、卵子の大さは成熟せるものにありても、僅かに二密迷を

算する位であるから、辛ふじて肉眼を以て認め得る位である、而して發育し得べき原卵は「ワルダイエル」による時は、初生兒の兩卵巣中には略一〇〇〇〇〇ありと言ふ事である、而し此原卵は大抵成熟期に達するまでの間に六乃至七〇〇〇〇は頽廢し終るもので、差引三〇〇〇〇乃至四〇〇〇〇の卵子は全生殖時期に使用し得らるべき數である、されども事實一年に十三個の卵を要するに過ぎないのであつて（一月經に一個の卵子排出せらるゝものとすれば、四週に反覆する月經は一ヶ年十三回で、從つて之れに要する卵子は十三ヶである）生殖期間を卅年とする時は、之れに要する卵子は粗

第十圖

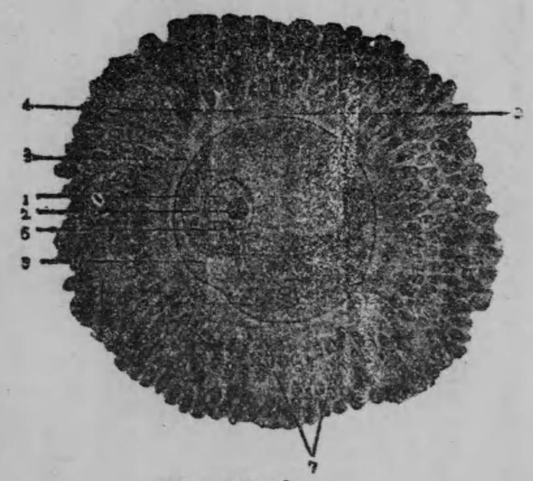


五百個である、從つて其所に殘留する卵子は使用せられざる儘體内に貯蓄せらるゝものである、斯くの如く卵子の使用せらるゝ關係より推察して「ワルダイエル」は平均一夫婦間には四乃至五人の兒童を發育せしむるに充分であると云つてゐる。

成熟せる卵は粗ぼ小砂粒大で、白色を呈し、僅に肉眼を以て認識し得ること前述の如し、而して之れを顯微鏡下に見る時は第十一圖に見るが如く、先づ其の外層には放射線狀冠あり、其の被蓋細胞は二乃至三列に放射線狀に排列してゐる、此等細胞の内層に密接して澄明で卵を包圍せる一層がある、此れを透明層と云ふ、其の内部に當り卵黄存す、卵黄の中心部は食料となり、周圍のものは造構の要に供せらるるものである、卵の中心より一方に偏して胚胞あり、其中央に胚點を存す。

卵子の成熟するに從ひ、又グラーフ氏濾胞も成熟す、卽ち其の内部に著しく液體貯溜し、爲めにグラーフ氏濾胞は皮層の表面に強く突出するに至るもので、斯くの如くしてグラーフ氏濾胞の壁は液體の增加するに從ひ益々菲薄となり、遂に濾胞は破裂して、其の裂口を通じて卵子は液體と共に腹腔内に排出せらるゝもので、之れを排卵の機能と云ふ。

第十一圖



る丶一現象であれど、又月經なく排卵の機能のみを見ることもある。

排卵の機能

おそよ排卵の機能はグラーフ氏膿胞の成熟、破壞、次ぎに來る成熟卵の排出と言ふ順序で、成熟せる婦人では四週毎に反覆し來るものである、普通は月經と隨伴し來る一作用で、兩々相伴ふて來る因果律によりて表はグラーフ氏膿胞より排出せられた卵子は、夫れ丈けでは自ら發育し得べきものでない、輸卵管剪綵に捕へられ、其毛細流動に從ひて輸卵管内に入り、尋ぎて受胎した時初めて子宮内にて發育し得るものである。

卵巣の内分泌作用

破裂したグラーフ氏胞の殘痕は組織の增殖により僞黄體となり、遂に再び瘢痕となつて所謂白體となるものである、されど若し姙娠する時は黄體は著しく大となり、姙娠第三乃至第四ヶ月に至り最大となり、再び漸次萎縮し、産褥期に至つて初めて消失するものである、此れを眞黄體と云ふ、近時「フレンケル」等は上述の僞及び眞黄體は共に所謂内分泌を司どる腺であるとし、中々重大視せらるゝものとなつた、卽ち黄體より或作用を有するホルモンと稱する物質を血液内に分泌し、該ホルモンが體内を循環した結果、月經の來潮となり、或は卵子を子宮粘膜内に發育せしむるを得るものなりと、故に卵巣は獨り卵を作り、成熟せしめ、排出せしむる作用を有するのみならず、又卵を子宮内に發育せしむる作用を有するものと解せ

ねばならぬ。

若し婦人の年老ゐて更年期となるや、卵巣は萎縮して原形の三分の一乃至貳分の一となるものなり。

生殖器の血液循環

酸素の多量を含有する子宮動脈は生殖器血液循環を司どる最重要のもので、下腹動脈より發し、子脈動脈となり、遂に膣、輸卵管、及び卵巣に分岐するものである、而して此等の動脈は毛細管に細岐し、組織の間を流るゝの際、多量の炭酸瓦斯を攝取して靜脈血となり、靜脈管に集められて下腹大靜脈に還流するものである、而してこれらの靜脈は又子宮の側方で集叢を作り、子宮動脈を圍繞するのみならず、内外生殖器並に膀胱及び直腸等の靜脈叢と相連絡してゐる、從つて生殖器部位に於ける障害は延いて痔靜脈を腫脹せしむるが如きは、吾人の屢々目擊する實例であつて、姙娠時などには殊に著しく目立つものである。

生殖器の淋巴管系

生殖器の淋巴管は、細小且つ多數に分岐せる毛細管を纏絡し、遂に貯水池の如き作用ある下腹淋巴腺中に開口するもので、上述の淋巴腺は、獨り内外の生殖器の淋巴管と相互に連絡せるのみならず、凡ての他の下腹臓器と相輸合してゐる、故に生殖器に侵入した病原菌が、獨り生殖器近傍に止まらず、遠隔せる他の臓器を侵すことあるも、皆これがためである。

生殖器の神經

生殖器神經は主として第三及び第四薦骨神經より出で、一は交感神經殊に子宮神經叢より司どらるゝもので、子宮の神經叢は近接臓器殊に膀胱、直腸、腹膜等の神經と相連絡してゐる、從つて此等の臓器に發生する疼痛は、又近接臓器の神經系に傳達するものである。

第二章　婦人の生理

婦人は其小兒期に於ては殆んど男子に異なることなきも、發育期よりは所謂婦人の特色を現はすに至るもので、更に老年期となれば再び男子の如くなるものである、されば婦人の生存期を區劃して次の五期に別つことを得るのである。

生存期の區劃

一、小兒期
二、發育期
三、生殖器成熟期
四、更年期
五、老年期

小兒期は今説明を要せず了解すべし、第二期は吾國では先づ十二歳乃至十五歳の間で、此期間の女子は、實に男子を凌駕する勢ひで發育するもので、かくして第三期となるものである、第三期の女子は婦人の最美最盛時代とも稱すべきもので、生殖器は漸く其生理的機能を初め、能く女子の天職を盡し得るものである、第四期乃ち更年期となれば、生理的機能は再び不規則となり、遂に生殖器は漸次老境に移行するもので、即ち此の機能の全消失が老年期である。

胎兒の生殖器發育の狀態

婦人生殖器の發育は極めて早く、已に胎芽の第五乃至第六週頃に發生する生殖腺（後に謂ふ卵巢）及び其の兩側にあるミューレル管―輸卵管、子宮、膣等が此管の兩側壁の輸合若しくは消失によりて成生す――が第一の基礎となるものである、而して第十週乃至第十一週に至り初めて外生殖器の形成をなせど、外部より確かに男女兩性を識別し得るは、妊娠第十六週である、しかして第五ヶ月の末期となれば生殖器は略其形を完成し、即ち其時代の生殖器を見るに、處女膜は厚く、膣は皺壁に富み、子宮頸部は比較的長く（約二仙迷）且つ厚く、子宮體は却つて小にし

て僅かに一仙迷大をなしてをる、輸卵管を見るに、交互相癒合せざるミューレル氏管の外上端より形成せられ、ために初生兒及小兒期に至るまで、著しく強く屈曲してゐる、卵巣は小さく、只僅少なるグラーフ氏膿胞を含有するに過ぎぬ。

小兒期の變化

小兒期に於て、生殖器が如何なる發育をなすやを見るに、只停止の狀態にありと言ふに過ぎぬ、何等胎兒の成熟せるものと差を認めぬ。

發育期の變化

然るに發育期（我國では十二歳乃至十五歳）となれば、身體の各部は著しく發育し、生殖器の機關も完成に近づき、今日まで單に身體發育にのみ用ひられた養素は、茲に生殖器發育にも轉用せられ得るに至り、從つて從來不要視せられておつた生殖器に新生命を與ふる事となり、爲めに少女は外觀上よりも容易に認知し得べき成熟した婦人となるものである、卽ち乳腺は腫大し、皮下脂肪の沈着により、全身の形客は豐圓となり、外生殖器や腋下には毛髮を發生し、聲色俄に變じ、精神一變し、興奮し易く、情調濃かとなるものである。

この時殊に著しく發育するものは生殖器にして、卽ち子宮の上部は强靱となり、且つ筋肉に富む樣になり、長軸に向つて長さを增す樣になる、而して子宮底は上方に、且つ子宮附屬器の兩側間に彎曲するに至る、又子宮腟及び輸卵管粘膜の被蓋細胞は氈毛を以て蔽はるゝに至るのである、氈毛の作用とは、これにより起る氈毛流動により、輸卵管の剪綵より子宮口の方向に移送せらるゝ卵子に必要なるものであつて、此の微妙の氈毛作用も月經の消失卽ち更年期となれば又消滅するものである。

時として前述の身體の變化なく何等の前徵なくして、月華開くことあり、此の場合には却て少女は外觀上兒態を失はざることがある。

月經の異名

月經は我國に於ても古來種々なる名稱があつて、經水、不淨、月やく、月のもの、めぐり、月のさはり、べに、そらめ、手桶番、お客などの異名がある、月經とは如何なる意義あるやと言へば和訓栞に月役の義なりと解し、婦女月信の俗稱だとして

ある。

月經の迷信

一寸考へれば月經は實に不思議に月々出づるものであるから、色々の迷信が伴つて居るもので、例へば越中の或地方では女子の胸中に小蛇が入りて血池に栖み、それから毎月出づる血が月經であると云ひ、ボリビヤ蠻族では月經は蛇の仕業なりと考へ、娘の經時には母親が我子を傷けたものだと信じ、手當り次第蛇を探り廻ると傳へらる、又ボート、リンコルン種族では月經は蜥蜴が男女の間を遠ける爲の仕業なりと解し、ポルトガル人は蜥蜴に嚙まれるためと信じてゐる、經時の皇女は太陽の光にふれるときは遂に蜥蜴になるなどは矢張同じ迷信である、兎に角月經を蛇や蜥蜴などに結び就けて解釋しておるものが多い。

我國で女人往生和讃と云ふものがある、左の好き文句がある。

抑も女人の苦しみは　五障の山も高ければ
高野の海も深くして　高野の如き山々も
一足にても登りえず　身の浮雲に誘はれて
月の障りとなる時は　苦しや七日の攻ぞかし
さすれば穢れの品々も　塵に交はり火にくばり
淨き川にて洗ふては　水神火神をけがすなり
其の流をば汲みあて、　神や佛に奉り
其の罪卽ち身に報い　血の池地獄へ落るなり
堅横共に望み見ば　八萬四千由旬なり
血の池の中に落入りて　日々苦しみ受くるとき
毛髮は浮草身は沈み　浮つ沈みつする中に
其の血を呑むこと限りなく　悲しさいはん方もなし
如何に月經に對し理解なきかが解る、婦人月經時に神籬祭壇に近よらしめなかつたのも、月經を以て不淨なりとの考へからで、明珠光を晦まし、寶鏡影をくもらすなどの類である。

月經とは何ぞ

然れども月經の本義はかくの如き忌むべきものでないのであつて、女子にとつては必要缺くべからざる生理的經過である、この事は後述により明にする。

兎に角月經は多く廿八日の間隔を以て反覆來潮するもので、稀れに發育時期に於ては月經が數ヶ月も停止して、無月經となることがある、又或は月經の强度も種々變化することがあるけれども、これは發育時に固有の事で一概に言ふ事は出來ぬ事である、凡そ月經の初潮時又は更年期に於ける消失時には屢々種々の多くの症狀を發するものであるが、而し又何等症狀なきものもある、これ等は個人々々によりて異なるものである、月經時の出血の狀態は恰も後產剝離時の出血と同一なるもので、常に子宮內より體外に排出せらるゝものである、若し此の狀態に反するものある時は盡く病的性狀のものと解せねばならぬ、且つ健康なる婦人では月經は一定した る時日に來潮し、一定の時日持續し、消失するや再び二十八日の週期を以て反覆せなければならぬ、而して人類の斯くの如き週期的に月經の來潮する說明は、(哺乳動物で排卵時卽ち交尾期に生殖器より出血することあれど、大なる間隔にて來り屢々一年一回位である、例へば猿や猫に見るが如きものである、)古來饒多の檢究及假說を有すれど、尙未だ充分なりと言ふを得ない。

紀元前已に「ヒポクラテス」は月經を以て全身の淸淨機能だとし、卽ちこれによりて體內の有害物質は排出せらるゝものなりと說明しておつたのである、且つ曰く妊娠中には月經なく、爲めに停滯せる月經血は過剩の體力となつて、兒體の造成に與るものである、又產褥時及授乳中無月經なるは、惡露及び乳汁分泌が有毒物質の排出を代償するためなりと言つておる、故に若しこの機能障害せらるゝ時は生活上必要なる內臟を侵し、例へば產褥熱の原因となることありと說いておつたのである。

然るに星代り、年移るに從ひ、卵巢內の組織を明にするに及び漸く其趣きを異にするに至つた、卽ち西曆一千六百七十三年「グラーフ」により卵巢の濾胞が發見せられ、次ぎて西曆一千八百二十七年「ベール」は濾胞內の卵子を發見するに至つ

たのである、而して「ピショップ」及び「フリューゲル」に至り排卵機能と月經とが或る時間的關係を有すること、及び交互に之れが原因的關係を有することを唱道し、やがて此〻假説は今日の月經説を誘出したのである。

月經説

今其の代表的のもの、一、二を説けば第一「フリューゲル」の説であつて、即ち成熟し且つ成長したる「グラーフ」臚胞は漸次これを圍繞する卵巣内の神經叢を壓迫し、爲めに常に之れに一定の刺戟を與へて居る、然るに該刺戟は脊髓に傳達し、そこに集積してゐるのである、而して該刺戟が一定の時期、即ち二十八日を經過し、一定の强度に達するときは、脊髓より下腹臟器の血管に分布する神經傳達により、生殖器に著大なる充血を來さしめ、子宮粘膜の出血＝所謂月經＝を潮來せしむと、他方之れと同時にグラーフ臚胞の成熟、完成、破裂を來さしめ、所謂排卵の機能を完成せしむるものなりと説いて居る。

他の一の月經説は現今專ら行はるゝ内分泌の説である、「フリューゲル」の説は假令月經の生理的意義を多少とも説明し、且つ「ストラスマン」などの實驗的檢索により、尙僅かに餘脉を保つと雖も、近時其の説は「ハルバン」の反駁に逢ひ、加之「フレンケル」などの有名なる實驗により後説の確實の度は益々高めらるゝに至つたのである、即ち排卵後生じた黄體内に存する「ルティン」と稱するホルモンが血管及び淋巴管内に採取せられ、これにより生殖器の充血を起し、從て子宮粘膜の週期的出血＝月經＝を來すものなりと云ふ説である、實に人類若しくは動物にて多數の研究者の一致する所は、月經は直接卵巣機能に關係するもので、卵巣なくして月經の存在することはなきものである、換言すれば排卵の機能は又月經に關係を有するものである、而して排卵の機能と月經潮來の日とは同日にあらず、多少の時日の差異あるもので、「フレンケル」其の他一派のもの〻研究によるときは、排卵の機能は月經前十日乃至十四日なりと言つてゐる。

前述の如く卵巣存在せざるとき、換言すれば卵巣が先天的に缺除せる時、又は卵巣の疾患、或は手術により卵巣を切除し去つた時、若しくは更年期となつて卵巣の

重複姙娠　姙娠せる上に更に姙娠すること

肺容量　肺臓内にある空氣の分量

腱反射反應　例へば膝蓋腱反射反應の如きを云ふ

機能を消失した時には排卵の機能も、月經も共に無きものであるが、然れども健全なる狀態の時にも亦月經なきことがある、例へば姙娠中又は授乳期中の如きである、されどこれらの時も排卵の機能も、月經もなきものでなく、授乳期のときには月經出血はなけれど、排卵の機能は明かに存するもので、これあればこそ授乳期中尙姙娠し得ることあるのである、人によれば姙娠中でさへ排卵の機能の存在するを云爲するものさへある、其の證に重復姙娠の存在することを唱へて居る、この以外乃ち姙娠又は授乳中にあらざる成熟せる婦人で、月經なきときは總て病的狀態のものなりと認めてよろしい。

オットー氏月經曲線

月經は決して局所的變化に止まるものでなく、實に婦人の全身機能に對して、又週期的變化を與ふるものである、換言すれば全身機能は一ヶ月中に浮きつ、沈みつ、若しくは潮の滿ちては干るが如き變化を來すものである、卽ちその變化は一の曲線で表はすことを得るもので、脈搏、體溫、血壓、筋力、肺容量、腱反射反應、窒素

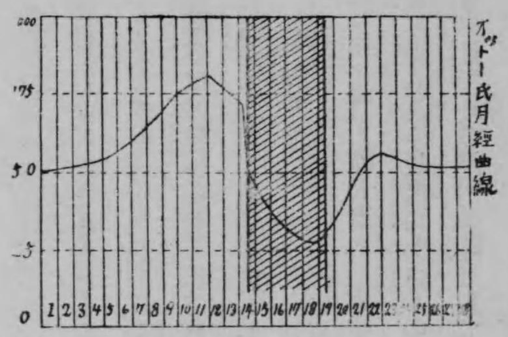
血壓　流れる血液の壓

筋力　例へば筋の握力の如し

窒素排泄　蛋尿中に出づる窒素の量

被蓋細胞　粘膜を破ふ細胞

第十二圖



排泄等盡く此の曲線と一致して上下するもので、此れをオットー氏曲線と云ふ、實に全身エネルギーの最高點は月經前三、四日間で、月經直前より進轉直下し、月經中最低位となり、月經終止するときは再び漸次舊態に復するものである。

月經時の解剖的變化

月經時の解剖的變化は、月經に前驅し、又はこれを準備する內生殖器の著しき充血に初まるもので、其出血は子宮體の粘膜よりし、子宮頸部及び膣の粘膜よりは粘液のみを出ずのである、卽ち血球が月經直前に著しく擴張せる毛細管內に侵入し來り、粘膜內に漲溢し粘膜を破潰するのである、從つて一方又粘膜の氈毛被蓋細胞及

其の部の腺は擧上せられ、子宮腔内に溢出し來る血液と共に排除せらるゝものである、故に吾人が月經血中に赤血球及び白血球、子宮腔及び膣の粘膜細胞及び被蓋細胞、礫狀細胞を見るも之れが爲めである、月經血排泄のため、所々破潰せられた粘膜及び被蓋細胞は月經終息後直ちに再び新生し、次ぎに來る月經前には再び腫脹して同一の作業を繰り返すものである。

輸卵管粘膜は月經時に於ては、一般に子宮粘膜と共に充血するを常とすれど、粘膜より出血することは稀れなることゝされてゐる、（喇叭管月經と稱する事もあれど）。

月經型

月經型は各人全く規則正しきものでない、二十八日の間隔にて周期的に潮來するもの最も多數であるが、又時として三十日、二十七日、二十一日などの間隔のものもあり、月經の持續日數でも、二日より少なからず、八日より多からざるを健常のものとすれど、三日位の持續のもの最も多し、出血の具合は通常漸次增量の狀態で

血液非凝固素
血液を凝固させない酵素

進み、第二日若しくは第三日に至り最高點に達するもの多く、その以後には漸次減少する、出血量は各人著しく不同ではあるが通常九十瓦乃至二百四十瓦を上下するのである、又月經型は人種により著しき差があり、白人は黑人より一概に出血すること多く、又氣候や周圍の環境上多少の差があつて、南方のもの又は市民は、北方のもの又は田舍のものより多く出血するものである。

月經の性狀

月經血の性狀は血液に粘液を混じたもので、粘液は月經の前後に多く、月經の最高潮には殆んど血液のみである、月經血は其の他の身體部位よりする出血と異なつて凝固することはない、これ恐らく月經血に混入する子宮粘膜より出づる血液非凝固素のためなるべし、こゝを以て若し月經血凝固するとき乃ち小なる血塊を混じて出血する時は、之れ明かに疾病のためなりと認めて可なるもので、少なくとも月經血過多なるためか、又は急激に出血したため、血液凝固を妨ぐる粘液の混入を充分ならしめざるためである。

月經時に於ける局所的及全身的症狀

月經は多くは局所及び全身症狀を伴ふもので、局所的障害をも伴はざるものは極めて僅少なるものである。

局所的障害としては下腹臟器に充血を起すため、月經直前及び其の初めに下腹部不快の感、重荷の感を起し、或は牽引の感、灼熱の感を訴ふるものである、而して其等の雜感は月經第二日に極めて强きこと一般であつて、稀れに全持續間それらの苦惱を訴ふるものがある、又時として急速に多量の出血ある際には薦骨部に陣痛樣疼痛を起すことがある、此の時は痛みは下肢に發散するものである、これ等の陣痛樣疼痛は血液充盈により、子宮腔の伸張及び腔內容を排出せんとする子宮筋肉の收縮により起るものである、歐語 Menstruation とは Unwohlsein 不愉快を意味するは誠に故あることである。

月經時の一般症狀としては興奮狀態にありと云ふ一語を以て盡すことが出來る、最も其の强度は個人により甚だしき差異あるもので、所謂知識階級の人々は一般狀態の障害なきもの、又は勞働者よりも甚だ强度なるが常である、勞働者などは假令月經時に大した攝養をなさずとも一般に障害は輕微である、之れ上流社會の人は一般に神經質なることが通有であつて、月經時に體力上のみならず、精神的にも情操的にも違和の影響を與ふるに由るものである、一般症狀を列擧すれば精神的及び肉體的に甚だ疲勞し易く、且つ移動する熱感、頭痛、殊に偏頭痛、胃部壓迫の感、食慾不進、時として惡心及び嘔吐を起すことがある、蓋し胃症狀を起す所以は月經時には胃酸の減少するに由るものである。

月經時遠隔せる臟器で、殊に關係を有するものは乳腺であつて、卽ち乳腺は少しく腫脹し且つ過敏となり、其他聲帶も亦腫脹し、歌謠は素より談話するにも疲勞し易く音力減少して、爲めに聲調亂るゝこと多きもので、從つて月經時には聲色を業とするものは深く注意せなければならぬ、其他又時として甲狀腺も腫脹するもので、これは獨り月經時に限らず、妊娠時にも亦見る徵候である、凡そ甲狀腺と卵巢とは密接の關係あるもので、此他內分泌腺中卵巢と關係あるものは、腦下垂體及び副腎

移動する熱感
アチコチと熱き感じが移る
偏頭痛
頭部半分の痛み
聲帶
臟器の出る
甲狀腺
喉ぶえの上にある腺
腦下垂體
腦の中にある腺
副腎
腎臟の上部にある小さい腺

眼瞼麥粒腫　眼瞼に生ずる小さき腫物

等である。

月經時に來る腸障害としては殊に下痢し易きことである、時として又月經時唾液の增加することがある、その他皮膚では汗腺及び皮脂腺の分泌が增加し、殊に皮脂腺では、獨り生殖部位のみならず、發育時期の少女にありては、顏面に瘡の形となりて生ずることがある、月經と眼との關係にありては視野の狹小、視力及び色力の疲勞し易きことなどこれに屬するものである、人によりては月經時眼瞼麥粒腫を生ずることもあり、又皮膚の或る部位に限り週期的に皮膚に發疹を生ずることがある。

鼻腔も亦月經時には出血し易く、且つ鼻腔粘膜殊に下甲介前端の粘膜は强く腫脹するのである、嘗て「フリース」は月經時に腫脹せる鼻腔粘膜部位乃ち氏の生殖點と稱する部にコカインを塗布して、月經時の猛烈なる下腹痛を停止し、進んで其部を强く腐蝕せしめて治癒せしめたと云ふことである。

又月經時には常に齒痛を起すものがある、又耳下腺の腫脹を呈することがある。

斯くの如く述べ來りて考ふる時は、實に月經とは不興なる一語にて盡し得べく、實に成熟せる健康婦人には四週毎に、此の不興なる氣分を反覆し來るもので、婦人の肉體的及び精神的作用に大なる變化を來すものである、故に月經時に關しては深甚なる注意を要するものである。

月經の初潮

月經の初めて來潮する年代は各國を通じて先づ九歲より十八歲の間とする、而し詳しく言へば月經初潮の關係は第一氣候に關係し、第二人種の差、第三社會的位置及び生活法、第四體格の差により異なるものである、卽ち氣候暑熱を加ふるに從ひ月經の來潮すること益々早く、例へば亞弗利加の黑人は十歲、印度人は十二歲を以て初まり、之れに反しエスキモー人は二十五、六歲で初潮する、溫帶地方では十四歲より十五歲の間に來るもの最も多く、我日本にては平均十四年八ヶ月を通常月經初潮年齡とするのである、遺傳の關係も亦他の精神的肉體的特異性を有するが如く、月經初潮に於ても該家族には其關係著しく、母子共に初潮時期に遲速なき例は甚

だ多く見るもので、例へば印度土人は十二歳乃至十三歳で月經の初潮を來すを常とすれど、英人の子孫では假令印度に居住すとも、英本國にあるものと等しく十五歳乃至十六歳を以て初潮するものである、又上流社會の婦人は一般に勞働社會のものに比し、約二年早く初潮するものである、これは後者にありては日々の生活難が常に發育を阻止せんとするがためである、これに反し營養佳良のもの、その他富者の姉妹にして精神の早期に興奮刺戟せらるゝものは早く月經の來潮することは想像することが出來る、殊に劇場、舞踏場等に屢々出入するもの、又は花柳社會のものは神經の刺戟强くために早期に初潮するものである、妄想や小説の耽讀も亦處女をして性慾の觀念を起さしめ、惡影響を來すものである、乃ち斯くの如き刺戟長く續くときは、遂に小骨盤の臟器に充血を起し、以て子宮及び卵巣の作用を早發せしむるものである。

月經が極めて稀れに一歳の幼兒に他の早熟徵候と共に來ることがある、されどこれと似て初生兒で、出産後五、六日に至り子宮出血を來すものあれど、これは普通の月經と異なるものである。

月經閉止

更年期(第四期變化)の初發は種々の原因で異なるもので、我國では平均四十五歳を通例とすれど、南方熱帶地方例へば印度人は已に三十歳で來り、亞刺比亞人は二十歳にして早く月經閉止するものがある、月經の閉止せんとするや、其經過は各人によりて甚だ差があるけれども、急速に閉止することは極めて稀れなることで、通常四十歳位より漸次貧弱となり、長日月の間で四十八歳乃至五十歳に終るものである、又時として一回又は數回甚大にして、且つ長時日連續する出血後、又は長き間隔後僅少なる出血で終に閉止することがある、けれども人々の常に注意を怠るべからざることは更年期出血と子宮の惡性腫瘍卽ち癌腫とを混同すべからざることである。

更年期出血と其全身症狀

更年期及び其前後には、婦人の多くは一般全身狀態の侵さるゝこと强きもので、

悉くこの更年期複雑症狀に惱まさるゝものである、卽ち頭痛、眩暈、心鼓動、失神、睡眠不足、精神憂鬱、流るゝが如き熱感、發汗、皮膚疾患、關節痛等を起すもので、蓋し此等の症狀は卵巢黃體の分泌產物が血液中に入らざるがため起るものである、此等の脫落症狀は更年期にあらざる婦人にても、手術により兩卵巢を除去したものにも見るものである。

老年期

月經閉止する時は生殖器は漸次萎縮し所以老年期となる、かくの如くなる時は婦人生殖器の疾患に對する素因も亦從て減少するもので、例へば子宮筋腫は石灰沈着を來し、或は萎縮して自然治癒に傾き、其の他成熟時期に於て種々の著しき障害を起す子宮後屈症も遂に意義なきに至るが如きその例である、然れども之れに反し惡性腫瘍例へば癌腫の如きものは却つて此の期に發生すること多く、月經終止後再び子宮出血を起した時には、成るべく速に醫師の診察を受くる事を忘れてはならぬ。

月經閉止の遲延は多くは疾患のためなること多く、例へば筋腫、ポリープ或は卵巢疾患、慢性內膜炎等のためである。

第三章　婦人生殖器の衛生

生殖器の衛生を以て單に成熟期に止まるものと思はゞ、之れ大なる誤解であつて已に小兒時期に於て注意せなければならぬ、況んや發育期に於て、或は破瓜期に於ては尙更らの事である、およそ人の世に生きんとするには修養と活動とを忘れてはならぬ、而して其の目的を達せんには Sena mens in corpere seno「健全なる精神は健全なる身體に宿る」の要締を得るに在る。

婦人生殖器衛生の必要

悲しい哉、世人の迷夢猶未だ醒むることなく、殊に子女の性慾的教育に關し、殆んど智見なき多くの世の母は、單に己れの幼時より經過せし傳說的觀察によつて、其子女を教育せんとしてゐる、又危うからずやと言はなければならぬ、實に彼等の腦底を充たす所のものは古代印度や支那より傳來せる所說及び藥品であつて、只或は日月星辰により疾患を占はんとするが如き迷信的口碑に過ぎないのである、然れども今や世人は漸く覺醒の機運に際會せんとし、其子女のために善良なる空氣、光線、清潔、滋養、運動等に注目せんとしてゐるのである、然れども此等衛生的原則も亦特別なる婦人生殖器に對しては、又之れに適正ならしめなければならぬのは勿論である。

小兒期の衛生

小兒の一般衛生を說くに當り、先づ余は二三の疾病につき述ぶるを便宜とする、これ小兒時期に發病し、後來發育期及び成熟期に至るまで、常に障害を與ふるからである、就中少女に特別なる疾患は佝僂病である。

佝僂病

佝僂病は小兒時代に最も多き疾患であつて、本邦には從來甚だ稀有なりとせられておつたものであるが、近年逐次其數を增加してゐる、本病は遺傳性又は先天性のものだと稱するものが有る位で、其發病は多くは生後九ケ月乃至二十四ケ月に起

骨の生ずるは先づ軟骨に石灰が沈着して化骨となるによる

るもので、從て此の時代に本病豫防の攝養が必要なる所以である、本病の特異なるは骨骼が軟かで、石灰の沈着すること遲きに過ぐる點である、卽ち化骨不充分にして遲延するため、骨骼基質は遂に屈曲するもので、例へば下肢の管骨、脊椎殊に吾人の興味多きは骨盤の侵さるゝ點である、從て佝僂病は最も屢々狹窄骨盤の原因となり、ために分娩の際には大なる障害を起すのである。

斯くの如きを以て本病の發生を防止せんと努力するは吾人婦人科醫のみにあらざれども、本病の原因猶未だ明かならず、されど第一に營養狀態に注意し、兼ねて本病の成立に關係深き空氣及住居に顧慮するは其豫防に對し大なる利益あるものである、卽ち空氣の流通能く、日光の透徹に注意するにあるのである、而して若し本病の第一徵候たる頭蓋骨の不充分なる化骨狀態、頭蓋顱門の著しき廣濶なること、上下肢關節又は肋軟骨端の隆起等を認めなば、直に醫診を受け、且つ營養狀態を佳良ならしめなければならぬ、無論これらの患兒は早く歩行せしめ、又は永く直立せしめてはならぬ、これ骨の屈曲を起す恐れがあるからである。

初生兒の乳腺炎

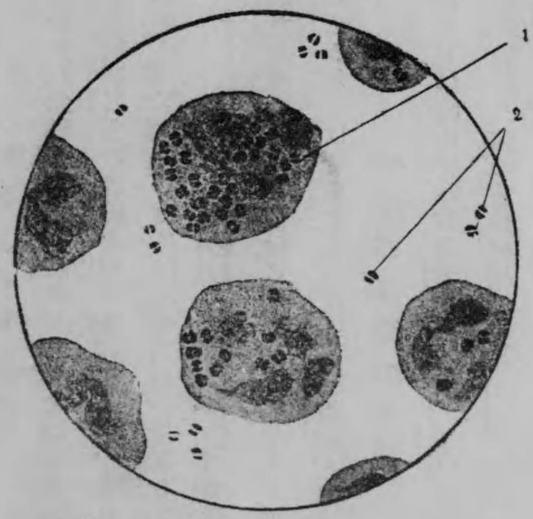
哺乳兒の急性疾患で、後來又不幸なる結果を來すものは分娩後第一週にして、已に一方或は双方の乳腺を侵す炎症である、本病は分娩後生理的に腫脹した乳腺を處理するに、不注意のため傳染せしめ、遂に化膿を起し乳腺を破壞するものである、處置としては、先づ疾患ある乳腺に無菌の油類を塗布し、重ねて硼酸にて濕せる綿又はガーゼで濕布せしむるときは疼痛を和くるに功あるものである、然し若し已に化膿せるときは切開をなさなければ治癒せない。

外陰部及膣の炎症

ともすれば小兒時代に看過し易く、且つ後來生殖器に不愉快なる結果を與ふるものは外陰部及膣の急性化膿性炎である、本病は已に幼兒に發見する事屢々で、侵された粘膜部位は强く發赤し、腫脹し、膿樣で黃色又は黃綠色の多量の分泌物を出すのである、而もその部には痒感あり、又尿通時には燒くが如き痛みあり、以前には本病は主として體質羸弱なるものに來ると唱へられしものであるが、西暦千八

百七十九年「ナイセル」の發見による特異なる痲菌で起るものたることが證明せられたのである。

第十三圖



かゝる幼兒に何故に痲菌の傳染せしやは一の疑問であるが、恐らく不潔にして、痲疾膿の附着せる手指を知らず〳〵の中に局部に觸接したためによるか、或は痲疾を有する父母と同衾して、其膿の附着せる褌又は腰卷と接觸したため傳染せるかである、其の他又時としては孤兒院、養育院、小兒科院などの同居人の中本疾患を有するものあるとき、洗濯道具又は沐浴を共にした時傳染するものであつて、稀れに錢湯などにて傳染することもある。

膣及外陰部炎を起す原因に痲菌の外に又蟯虫が肛門より出で會陰を通過し、膣及び子宮に匍行して、遂に化膿性炎症を起すことがある、これは蟯虫と共に運び去られた大腸桿菌により發病したものである、この時には多くは肛門の周圍及び會陰部に蟯虫を發見することを得るものである。

ジプテリー性膣炎とは急性傳染病殊に咽頭ジフテリー、猩紅熱、チブス等と共に來ること多きもので、從て此等の全身疾患の症狀にのみ注意をそがれて、膣炎の存することを看過することが多い、されど後來に至り上述の膣及子宮粘膜炎の結果は、遂に大陰唇や小陰唇の癒着を起し、月經血の排出を妨くることがある。

上述の疾患に罹るときは分泌物が外陰部に附着せるにより直に知ることが出來るのであつて、先づ外陰部を清潔にすることを忘れてはならぬ、而して日々弱性の腐蝕せざる程度の消毒液で膣を洗滌しなければならぬ。

外陰部及膣炎の看護

炎性強からざるものも、少なくとも一日に二回洗滌しなければならぬ、そして患兒の洗滌道具は一定し、決して海綿を用ゐてはならぬ、使用する綿は必ず消毒したものを用ふるをよしとす、膿の檢鏡的細菌檢査の結果淋菌を發見した時は必ず先づ患兒を隔離せしめ、學校は休學せしめ、又孤兒院などでは患者は他の小兒と同衾することを禁じ、殊に手指を屢々洗滌し、淋菌の眼に傳染することなき樣注意が肝要である、而して外陰部分泌物に淋菌なきを證明するに至り初めて種々の警戒を解く樣にしなければならぬ、又蟯虫により起つた膣炎であれば、先づ蟯虫驅除劑を與へ、清潔に保持するときは直に治癒するものである、時として上述の炎性はこれに伴ふ痛痒のため遂に手淫の原因となることあるにより注意しなければならぬ、要するに本病を起した時は直に醫師の診療を受け、悔を後來に殘してはならぬ。

發育期衛生

少女に如何にして發育現象を說明すべきやは頗る注意を要することで、若し一歩を誤るときは、從來なかりし月經が初潮せしため徒に驚異の念に滿たされ、愧づべからざるを愧づる結果遂に隱匿するに至り、自然の相談人である母に說明を求むることを避ける結果、不適當なる他人に之を求むることがある、而してかくの如き時處女は性慾の感念に危まるゝことあり、注意を要することである、尤も青年の如く性慾に蹈み迷ふと云ふが如きことは處女には稀有なることなれど、又絕無なりと云ふことは出來ぬ、故にかくの如き機會をさくるに勉むることは將に世の敎養者の務むべき義務である。

性敎育

故に母親は、其子女に人類の必ず經過すべきこと、及月經とは單に成熟せる徵候に過ぎないこと、且つなるべく人類に例を取らず、植物や、下等動物の雌雄の區別及蕃殖の狀態を明かにし、自ら理解せしむるに務めなければならぬ、そして其の間決して野卑なる言葉や、事例を用ひてはならぬ、近時漸く醫師によりこの問題を聞かんとし、例へば獨逸では「ヘルーングフォル」に於ては女學校の上級生に女敎員より性慾的の說明をきく代りに醫師により講演を聽くことゝし「ブレスラウ」で

も其範を採用して居る、而し人によりては矢張り醫師より説明することは不可とし教師より説明した方が可なりと唱へておる。

清潔

肉體上の衛生としては專ら清潔にすることである、即ち外陰部を清潔にすれば以て外部より內生殖器中に腐敗又は炎性を起すが如き細菌の進入を防ぐことが出來るので、詳しく言へば一方に清潔を保ち腐敗及び分解の發生を防ぎ（例へば外陰部に附着乾燥せる月經血による敗腐及び分解を防ぎ）他方不必要にて誤まりたる處置を禁ずることである、例へば膣洗滌を行ひて種々なる有害の細菌を深部に移行せしむるが如き似而非行爲をなさゞるをよしとす、世人誤まつて膣洗滌をさへなせば生殖器疾患を豫防し得ると考へ、或は膣洗滌により自宅療養をなし得と思へるものあれど大なる誤解であつて、健全なる處女には膣洗滌は不必要なるのみならず、却つて腐敗又は炎性を起す細菌の侵入を導く動機となるものである、愼しむべきことで、生殖器疾患を有するものと雖も膣洗滌は醫師に諮つて後爲すべきものである。

入浴及身體摩擦

日々冷浴或は冷水摩擦に慣れた少女は毎朝起床時之れを行ふを宜しとするのである、而して其溫度は列氏十六度以下であつてはならず、且つ三分乃至五分以上入浴してはならぬ、もし浴の溫度低ければ從つて時間も短少しなくてはならぬ、摩擦或は按摩後には輕度の體操或は大氣中で運動して溫熱の感を感ずる程度に至らしめなければならぬ、而してかくの如きものにありても一週一回は必ず溫浴に入つて身體を清潔にするを要するのである、かくの如くするときは身體は漸次强壯となり、又從つて肉體美を增進せしむることが出來るものである、されど貧血で顏容靑き少女は寧ろ冷浴を禁ずるをよしとす、ナゼなればこれらのものは入浴するや、顏色益々靑くなり、寒冷のためおのづから身體戰き、强く按摩するも運動するも、或は臥床するも少しも溫熱を感ぜざるものである、又時として貧血にあらざれども冷浴又は摩擦を嫌忌するものがある、斯くの如きものは漸次水浴の溫度を下降せしめて慣れしむべきで、又少女八歲頃から夏期酷暑時より水泳敎練を受けしむる時は、漸次冷寒

に堪へて快樂を覺へ、筋肉の運動により心臟の鼓動は高くなり、身體溫暖を覺ゆるに至るものである、殊に水泳を初秋まで持續する時は、其効著しきものである、然れども冷水浴は決して强制すべきものでなく、殊に月華開けるものでは月經前二日乃至三日より冷水浴を中止しなければならぬ、若し月經中冷水に浴するときは下腹部の充血を制止し、或は月經の閉止又は月經に痙攣性下腹部疼痛を起すことがある、假令月經後に於ても猶下腹部の充血存するときは列氏二十七度位の微溫湯に浴し、次ぎて冷水浴に復歸する樣にしなければならぬ。

入浴時などに外陰部を摩擦するとき海綿を用ふるは宜しくない、必ず大なるフランネル布片を用ふべきである、而して若し分泌物多き時は其の度び毎にフランネルを煮沸して後用ふべきである、小兒にありては外陰部を摩擦する時過度にしてはならぬ、これ手淫をなすの機會を與ふる事があるからである。

手淫

此の墮落せる惡習慣乃ち手淫は、時として已に小兒時代に認むることがある、況んや處女などには餘程蔓延して居ると見なければならぬ事實がある、實に多くの頑固なる貧血病及び神經衰弱症はこれに原因すること多く、又時として手淫のため處女の膣及び子宮頸管加答兒を起すことがある、これ膣内に送入する手指及び異物に附着せる炎性細菌が内部に移送せらるゝによるか、又は屢々繰り返さるる充血に基づくためである、而してこれを起し易き機會は學校又は寄宿舍等に於ける模倣であつて、發育期に忘想を惹き起さしむるが如きは慎しむべきことである、殊に性慾を聯想せしむるが如き演劇や舞踏に出入せざる樣にし、子女の小説の耽讀は大に嚴禁するを要するものである、世の母親殊に都會にある母親などは演劇や舞踏より生ずる弊害を考慮すること肝要にして、徒に子女を伴ひてこれに趣くが如きは大なる罪惡なりと考へなければならぬ、一旦この惡習慣に捕はるゝときは根絶する爲めに大なる苦心を要するもので困難なものである。

これを豫防するためには子女の監督を嚴にし、且つ合理的の生活法を守らしめなければならぬ、卽ち食物は輕くして、刺戟せざるものを用ひ、身體運動後の疲勞、

大小便の通利等に注意し、殊に就床時には尿通をなさしめ、食物を禁じ、過熱の毛布團を避け、醒覺せば直に起床せしめなければならぬ、且つ冷水にて全身を摩擦するときは更に妙である、又稍々年長じたる處女では、母親の動作やその心象は、時として惡結果を來すことあるにより注意を怠つてはならぬ。

體操及遊戯

體操は現今物理的教育の主なるもので、少女の發育に對して必要なるは玆に贅言を要するまでもないことである、その如何なる樣式及方法によるやは本論の問題外であつて主として其教師の指導によるべきものである、而して小女にありては一時間毎又は二時間毎には必ず十分間は體操又は遊戯をなさしめなければならぬ、而して氣候佳良なる季節では運動場に於て、冬季又は天候あしき時は窓を解放した雨天體操場に於て行ふべきである、嘗て「ホーフア」博士は學校時代の脊椎彎曲につき、大に時論を喚び起したが、此等の注意は又遊戯殊に游泳、競走、テニス等にも拂はなければならぬ、乘馬及自轉車は健全なる婦人又は處女には容さるべきものであれど、下腹臟器に充血を起したる時、又は起さんとする時、心臟の鼓動を感ずる時等は中止するを要する、又總て體操或は遊戯の過度に渉るを防ぐは無論のことで、例へば自轉車遊戯に於て、遂にこれに耽溺し、或は良記錄を得んがため却つて過勞し、その結果心臟肥大又は肺疾患を起すが如き危險は避けなければならぬ、近時漸く盛んならんとする登山の如きも、屢々攀登することは大に注意を要することである、殊に發育期のもので貧血せるもの、顏面蒼白なるもの等は、運動を奬勵するとき、大なる注意をなさなければならぬ、卽ち斯くの如きものには、一擧に過劇なる運動をなさしむることなく、速に來る疲勞の感と身體無力の感とに堪ゆることに慣れしめんがため、徐々に時間を延長し、漸次に豫定の時間まで繼續し得る樣に指導せなければならぬ、且つ成るべく野外に屢々長時間運動することを務めしむるがよろしい、されども此等の注意及び增血劑等を服用するも、尙、顏面蒼白の度減ぜず、却つて漸次食慾の減少を來し、益々衰弱を加ふることがある、此等のものは寧ろ長時休息を必要とするものであつて、先づ四週乃至六週間或は夫れ以上靜臥せしめ、其

の間食餌療法を嚴守せしめ、漸次營養狀態を佳良ならしめて、然る後先づマッサージにより他動的運動に慣れしめ、次ぎて漸次注意して自動的に筋肉働作をなさしむる樣に導かなければならぬ。

飲食物

發育期に於ては身長及び體重に比し、多量の消化し易く、且つ滋養多きものを與ふべきは勿論であつて、主として牛乳、鶏卵、野菜、果實、肉類等を與へ、强き茶及び珈琲、ビール、酒などは不可である、「シラーデル」は月經中窒素平衡を保持するに要する一日量の食餌は二千〇十三乃至二千〇七十六カロリーにて充分なりと言ふて獻立表を次の如く例示してゐる。

一五〇瓦	白子肉
一〇〇瓦	バタ
一四〇瓦	白パン
一五〇瓦	灰色パン
八〇瓦	鶏卵
六〇〇瓦	珈琲
六〇〇瓦	スープ
五六〇瓦	セルテル水
二〇〇瓦	食鹽

常習性便秘

食物攝生法に關聯して、意すべきことは規則正しき便通である、婦人に最も屢々見る常習性便秘は多くは小兒時代よりあるもので、これ一は母親がその子女の小兒時代に便通の規則正しき作用なることを等閑に附したるに基くと、他の一は處女の年頃ともなれば學校又は集會などにあるとき大小便を制壓するがため益々便秘の習慣を作るためである、されども飜て此等の不注意のため、如何に全生涯苦しまなければならぬかを思ふ時には豫め充分の注意を要すべきことである、實に處女にすら屢々見る子宮位置の異常殊に子宮後屈は多くは常習性便秘の結果來ることは、已

に「シュルッエ」の證明せる所である。故に幼年時より日々規則正しく、且つ同時間に便通ある樣に慣れしめ、決して便意を催ふしたとき之れを忍耐せしめざる樣論すべきである、而して若し便秘あるものは先づ食餌療法を試み、効なき時始めて藥劑を用ふべく、決して初めより藥餌に親しむべからざるものである、卽ち先づ飲料を多くし、特に空腹時一杯の良水を飲用し、且つ野菜、果實、牛乳、林檎、酒等を與へ、身體の運動例へば體操、自轉車練習等をなさしむべきである、但し下劑及び灌腸はなるべく避ける樣にしなければならぬ、之れ直に習慣となり、又漸次多量を用ひざれば奏効せざる樣になるからである、特に注意すべきは月經前日頃よりは特に便秘を除くことである、然らざれば月經時に一般狀態の異和例へば惡心、食慾不振、頭痛等を來し、時として月經時の痙攣性下腹痛をさへ起すことがある。

發育期の睡眠

小兒期及發育期の睡眠は充分なるを必要とするのであつて、さらば幾何時間を必要とすべきやは各個人々々の健康狀態又は氣候等にも關係せなければならぬが、先づ吾人の經驗によるときは少年學生時代には十乃至十一時間、壯年となるに及び猶八、九時間の睡眠は必要のものである、故に發育期の少女では午後九時に就寢せしめて、朝七時に起床せしむるを宜敷とするのである、學校の始業時間を殊に夏時に午前七時などとし、爲めに少女をして午前六時或は五時に起床せしむるが如きことは寧ろ健康に害あることで、寧ろ夏時に於ては却つて長時間睡眠せしむるを要するものである。

少女修學時間

授業時間は少女十二、三歲の發育期に於ては五月より九月まで午前八時より十一時までを理想とし、十二時より長きことは不可である、されど時として學校衞生殊に婦人につきては醫師は教師との間に相反對する意見を有する事がある、卽ち教師は婦人に對する社會的要求に從つて、教授科目の增加及教授時間延長の必要を唱へ、醫師は身體發達の見地より婦人精神の重荷を以て有害なることだとし、婦人の主なる職務を母とし、主婦として論ぜんとしてゐる、實に學校及び家庭に於ける今日の

教育が少女に對する肉體的及精神的健康狀態に害毒を及ぼさゞるや否やの疑問は猶種々の統計により一致しない所である。

發育期及破瓜期に於ける身體發育の狀態

カイ博士は「ストックホルム」の小兒科學會で、瑞典國一萬五千の少年及び三千の少女で詳密なる計量的研究をなした結果、少女では十歳までは破瓜期卽ち十五歳の終りまでのものに比し、其の身長及び體重の增加率少なく、而して身長の增加は十七歳で終止し、此れに反し體重は以後數年間著しく增加し、二十歳にて肉體的發育完成すと云つてゐる。

「メーリング、ハンゼン」の日々計量した結果による時は、小兒の發育は種々の季節により異なることを知るもので、卽ち氏は一年を大凡そ三期に大別して次ぎのことを發表してゐる、第一期は冬季卽ち十一月の終りより初春に至る季節であつて、發育の狀態は比較的靜止してゐて身長の增加は甚だ僅かである、第二期は全春季より初夏の候までの間で、此の時季は身長の增加は甚だ多ゐけれども體重の增加することなきものであ〻、第三期卽ち晩夏より秋季に至る間は身體の發育著しく、殊に體重の增加は驚くべきものだと言つてゐる、且つこれらの發育狀態は獨り小兒期のみならず、破瓜期に於ても同率で發育するものだと曰つてゐる。

學校衛生上の注意

有理的の學校衛生は已に說きたるが如く、其發育時季の異なるに從ひ、又其年代の差により、敎授目の增減及び種々の季節に從ふ休暇などに注意せなければならぬ、春機發動期直前及び其の初めには、少女はなるべく精神的及び肉體的に平靜なるを必要とするもので、又生活力旺盛と認めらるゝ十七歳より二十歳に至る時機でも、勞働時間の强大なるを望むべからざるものである、これ女子は十八歳後のものでも身體發育殆んど完成せる少年に比較すべきものでないからである、故に處女では二十歳後になつて、初めて充分なる肉體的及び精神的努力を望むべきものである、若し一朝發育時期の衛生に注意せないときは、終生苦惱の淵に沈まなければならないのである、カイ博士は瑞典の高等女學校の疾病統計によつて、春機發動期前著しく

發展狀態を害するが如きことあるときは、恢復すること甚だ困難なりと言つてゐる、卽ちこゝ時期の攝生を怠つた爲めに六十一%以上は疾病となり、中三十六%は顏面蒼白となり常習性頭痛を訴ふるに至り、十%以上は子宮後屈を來たし、五%は腺病性となつたと警告してをる、獨逸の學校醫も亦これを是認し、且つ以上の症狀の外春期發動機の衛生よろしからざるがため呼吸促迫、難聽、齒痛等を起すことがあると言つてゐる、而して人々により多少の差異はあれども、新生涯に入るべき年齡は少なくとも十八歲若しくは二十歲以上で、肉體上及び精神上共に充分發達した後でなければならない。

衣服

婦人の廣帶は歐米の「コルセット」の如き害はないものであるが、無論緊縛を避けなければならぬ、所が實際を見るときには、廣帶を結んだときなどは、呼吸も困難に、頭部逆上の苦しみを受けておるものが多い、これは呼吸機や、及び循環器を壓迫するためである、頸卷は腦に充血を起し易く、眩暈、頭痛等を起し易きものであるから、用ゐてはならぬ、腰卷は婦人の下腹臟器保溫のため及び淸潔を保持するために必要のものであるけれど、冬季數枚を重用して空氣の流通を妨ぐるが如きは不可である、洋裝せんとする婦人は「コルセット」を用ふるに當つては餘程の注意を要するのである、これ「コルセット」に就きては歐米の學者已に幾多論爭せる所であるからである、幸にして我國も近時大に洋裝の流行を見る樣になつたのであるが「コルセット」を用ふるものは少ない樣である、靴下は洋裝せない人にも用ふる人が多いけれども、其紐緊きに過ぐるときは、遂に下肢の血行障害を起し、書尿の怒張を見ることあるにより注意を要する、最もよきは靴下吊りを用ひて下腹に保持するにある、學校でも、家庭に於てでも、机を用ふる時は、其机及椅子は體格に適合したものを用ひ、殊に光線透射の點に注意せなければならぬ、此等の點の注意不充分なるときは、遂に後來脊椎後彎症や、殊に吾人の憂ふる骨盤の變形を見ることがある、本邦の足袋及び手袋も徒らに外形を裝はんがため緊縛してはならぬ、これ血行障害を來たすからである。

衛生に實行するに就きての二大缺點

凡そ子女教育に際して母親の陷り易き二大缺點がある、一は注意缺乏なると、他の一は注意の過分なるとである、共に不可なることであつて、前者の弊は無經驗なる女子をして遂に疾病に陷らしめ、後者は徒に子女をして杞憂せしめ、其の極ヒステリーに陷らしむるものである。

故に第一の月經に當りては最も中庸を選びて、驚愕せる處女をして理解せしむる樣にせなければならぬ、卽ち月經は全く自然のもので、何等嫌惡すべきものでないことを諭し、且つ例へば月經時に風邪を病み、又は身體の過勞をなすときは惡結果をもたらすものなることを告げなければならぬ。

月經來潮時の教訓

實に月經は生理的であつて、何等異常として認むべきものでないのにも關はらず、一方より考ふる時は殆んど見るべからざる程度に於て疾病の根原となりつゝあるを悟らなければならない、ナゼなれば子宮腟を蔽ふ粘膜が、假令一小部分であつても、其の部の細胞は創傷を形成しておるのである、換言すれば病原菌の侵入に對して抵抗力減弱してゐる、この際若し病原菌が外部より侵入し來たと假定したならば、病原菌は月經時下腹臟器の充血により其發育は催進せられ、且つ一方腟分泌液の酸性反應＝腟分泌液の酸性なることが、自家防禦の一機能であつて、これあるがため外部より侵入せんとする病原菌は殺菌せらるゝものである、殊に姙娠時にこの作用著し＝は饒多の流出する粘液と血液との爲め中和せられ、又は却つてアルカリ性となつて自家防禦力は消失しておる、而して從來酸性液にては發育せられなかつた病原菌が茲に發育の可能力を得ることゝなり、其毒力を發展して、月經時充血のため粗鬆となれる腟、子宮、ラッパ管の炎症を惹き起すに至るものである、之れに依つて見るときは月經時には殊に衛生法を守るの必要なるを悟らなければならぬ。

月經時の衛生

月經時の衛生として、第一に必要なることは清潔である、悲ひ哉月經に關しては種々の迷信淵蔓し、或はこの時期の洗滌は有害で、更に出血を增加し、新に出血を

起さしむるものだとし、或はこの時期に於ける全身浴を奬勵し、ために不慮の疾病を來すことがある、兩者共に不可で、月經時には外陰部及び其周圍は排出せらるゝ出血の量に從ひ不潔となるものであるから、必ず一日二回又は三回煮沸した溫水及び石鹼で清潔にしなければならぬ、實に外陰部に附着し乾燥した血液は、此の部の皮脂腺や汗腺が、月經の爲め一層增量するもので、此等の分泌物は互に相混和し、甚だ速に腐敗分解し、特に脂肪過多のものであれば、著熱の季節には會陰部及び股部の皺襞等の皮膚はこれがために刺戟せられて、遂に皮膚は剝傷し、或は皮膚の發疹を起すことさへある、且つ時として經血の腐敗が內方膣內にまで連續するときは、遂に膣及子宮粘膜の炎性を起すことさへあるもので、已に結婚せるものであれば、月經時の清潔法不充分なるがために、膣及び子宮粘膜の炎症を起すこと屢々である、然るに月經時の膣洗滌は必要なものでなきのみならず、却つて害毒を及ぼすもので、更に月經時の全身浴も亦禁ずべきものである、人或は清潔の意義を誤解して毎日入浴するものがあるけれども、凡そ月經時には子宮口は一指頭大に開大し、偶々外部よりの進入を容易にするの狀態である、故に此の時に當つて全身浴をなしたと假定すれば、不潔で且つ細菌を含有する浴水が多少膣內に進入するとせなければならぬ、其結果は炎症を起すに至ることは無論である、況んや月經時入浴に際し、己れの手指を深く膣內に挿入して、洗滌するが如きことあるときは其の結果は恐るべき事とせなければならぬ、又月經前にこれを催進せんがために熱水洗滌、又は全身浴をなすものがある、これも下腹部に過度の充血を惹き起すもので有害のことである、然れども月經終りたる後には清潔にせんがため、全身の溫浴をなすことは甚だ至當のことである、月經時には身體の清潔を保持せんがために、排泄せらるゝ血液を吸收するため月經帶を用ふるをよしとするのである、而し月經帶は下腹運動に際し、便利で且つ除去し易きものを撰ばなければならぬ、座臥進退する時、股部を摩擦するが如きものはあしゝ、又俗間に用ふる綿花球を膣內に深く挿入するが如きは最もあしゝ、殊に處女などにありては之れがために處女膜を破潰するものであり、且つ之れを挿入するに當り、知らず〳〵、手淫を行ふの機會を與ふることがあるゆ

へ、餘程母親などの注意すべきことである。

月經帶

最も簡單なるは三乃至四仙迷長さの消毒又はサルチル酸綿花を以て局所を壓抵し、尙これを保持するにガーゼ帶などを用ふるをよろしとするのである、而して兩股間にて丁字形にして、其前後を小帶にて固定せしめばそれでよろしいのである、出血量多き時は一日二乃至三回交換し、一旦用ゐたものは直に燒却するがよろしい、市賣せるゴム製の月經帶は餘りに外陰部をしめ過ぎ、殊に夏時などは汗や月經血とが緊縛せる狹き部分にてむされて、臭き事限りなきものである、又月經時には腰卷は餘り窮窟なるものを用ひてはならぬ、これ婦人及び少女共に月經時には溫熱の影響に感じ易きものであるからである。

月經時不注意によりて起る障害

病原菌病氣の原因となる細菌

およそ月經時には寒冒にかゝる時殊に下半身を浸濡せしむるが如きことは病原菌の侵入に對し、身體組織の抵抗力を低減するもので、例へば旅中降雨に際會するが如きことある時は、遂に子宮粘膜の急性炎症を起し、月經は急に閉止し、下腹部に猛烈なる痙攣性疼痛を起すことがある、其他强烈なる精神感動も、亦血管を擴張し、又は收縮する神經（血管運動神經）により、月經の經過に影響を及ぼすもので、例へば警愕の度强き時には不意に月經閉止することがある、又時として早期に來潮し或は强盛となることあるが如き例もある、又便秘の癖あるものは月經前には養生につとめ、或は必要なる時は浣腸又は緩和な下劑により便通を圖るのがよろしい、これ腸內に鬱積する大便により、或はこれより生ずる瓦斯により月經時にかゝり易き胃腸障害、頭痛等を增し、又は下腹の充血を昂進するからである、强下劑は出血を大ならしむる傾向があるから月經時には用ひない方がよろしい。

痙攣性疼痛　ひきつけるような痛み

月經時の運動

其の他激烈なる身體の運動例へば舞踏、競走、テニス、自轉車、乘馬、登山、長時間の直立、重荷の提擧等凡て下腹に充血を强からしむる運動は避くるを要する、又月經時には獨唱或は聲音を業とするものは中止するを賢策とす、之れ音調に障

害を起し易いからである。

月經時の勞働保護法

今日の社會的關係では、未だ月經時に於ける婦人の勞働を全く停止せしむることが出來ぬ、けれども吾人は衛生的見地から、否な必要とあらば勞働保護法律により、少なくとも勞働を輕減せしむる必要を唱導しなければならぬ、既に戰前「ブロイセン」では此種の法律が制定せられ、獨逸の工場監督官も漸くこの問題に注目せんとする傾きがあつた、即ち婦人科醫に主として婦人の衛生を害するものを調査せしめ、これに對する豫防法を設定せんとしておつたのである。

精神の過勞

月經時に過度勞働の不可なるが如く、又精神を過勞せしむることも有害である、實に從來規則正しく、且つ疼痛なかりし女教師が、試驗等の身神過勞の結果、激烈なる月經障害及び神經系統に障害を起すことは屢々吾人の見る所の實例である、故に女學校等にて已に春期發動機に達する上級生には、この點を顧慮し教師自ら斟酌所置するを要する、尤も教師が處女の個人個人の廻避必要時なるや否やを鑑別せんことは困難なことであるけれども、女教師などは、其不快なる顏容により大凡そこれを知るを得るものである。

されども衛生を過度に思ひ過ごし、異常なき月經時にありても、尙絕對的安靜を守るが如きは或ば不可な事で、殊に發育時の少女にありては有害なことである、然れども若し月經に異常を來たした時、例へば疼痛を起した時、或は多大の出血ある際には靜かに横臥するは勿論のことである。

婦人の職業問題

子女の教育上漸く人の注意を引かんとするは婦人の職業問題である、殊に生活難瀰漫して女子の獨立生活を企つるもの漸く多からんとする當今などに於ては殊にそうである、勿論女子教育の第一義は將來の良妻賢母主義でなければならぬ、されど若し職業を得んとするときは身體發育の程度に應じて精神上の教育を施し、活潑なる精神動作を起さしむるに走る春機發動期後、早くとも十七歳以上より初むべ

きは既に前述した通りである、而して個人に就き其の能力を顧慮して其職業を撰擇せしめなければならぬ。

月經の早期或は晩期來潮

月經障害の第一は早期又は晩期の月經初潮である、月經の早期來潮は、時として年猶若き少女に生殖器早期成熟と共に來ることなれども、精神上の發育は多くは少女の年代に相當するものである、又羸弱なるもの、或は發育遲延せる少女にては、時として月經が二十歳後となつて、初めて來潮することがある、俗間に月經猶來らざるがため、肉體的及び精神的に發育遲延せるなど稱するものあれど、こは原因と結果とを誤まれる僻論である、又月經遲延せる時、種々の賣藥或は浴治、マッサージ治療法等を講ずるものあれども、何れも其効著しきものでない、寧ろ一般の全身狀態を强壯にして、營養を昂進せしむるときは來潮するものである。

代償性月經

代償性月經とは稀有なものとせられておるもので、子宮より出血する代償として、月經の期待せらるべき日、卽ち規則正しき間隔を以て鼻腔、肺臟、腸管、膀胱、口唇、皮膚、眼窩、齒齦等より出血するものであつて、就中鼻腔よりするものが最も多い、されども亦この場合にも原因結果を過まることがある、例へば殆んど四週每に强く鼻出血を起す少女ありと假定するに、これ子宮出血をなさんとすれど鼻出血のため貧血となり、月經（子宮出血）來らずと稱するが如き言ひ分である、又肺結核にて時々喀血し、爲めに月經來潮せざるものあれど、この際の喀血は代償性月經ではない。

無月經

若し月經全く缺如せるものある時は、是れ通常生殖器の發育不充分なるに基因するもので、この時には多くは該少女は精神的にも、肉體的にも發育遲延せるものである、卽ち內外の兩生殖器は尙甚た早期の發育階級に止まり、時として腟或は子宮及び卵巢を缺如せることさへあり、或は子宮に腔間なく、單に索狀のものとして殘れることがある、されども最も多きは子宮及び卵巢が月經初潮前に至るまで、

初生兒或は少女の如き形狀及び大きさを有するためなることがある、かくの如きものには、骨盤も亦其の形狀、大小が兒態に止まり、凡ての發育狀態は全く小兒に類似せるものあれど、之れに反し生殖器の發育狀態が兒態に止まることは、體格大にして、營養佳良なるものにも見ることあるものである、若し月經無きを見ば、先づ其少女が規則正しき月經樣疼痛及び月經障害を有するや否やを知ることを必要とするので、若し上の症狀あるときは、之れ成熟せる卵子を有する卵巢機能の存するを知るのであり、從て向後月經の來ることある希望を有するものである、これに反し、一定の間隔を有する月經樣疼痛なき時は、此れ卵巢の全く缺如せるためなるか、或は少なくとも其發育不充分なるか、又は卵巢機能なきを推定し得べきである。

無月經の原因

若し月經は來潮せないが、規則正しく反覆する疼痛あり、しかも月數を重ぬるに從ひ、其の度增加し、恰も陣痛樣の性質を帶び、且つ下腹障害を伴ふときは、月經は存在すれど、經血が生殖管の癒着のため、停留するものなることを考ふるを得べく、實にかくの如きことは屢々見るもので、例へば處女膜が全く閉鎖せる時、又は膣或は子宮頸管等に癒着あるときに見るものである、かくの如き癒着ある時は、月經血は漸次其量を增し、膣、子宮を擴大し、遂に輸卵管までも大なる血囊に變ぜしむることがあり、延ひては早急に手術をなさざる時は輸卵管破裂して、其內容を腹腔に漏らし、ために腹膜炎を起して死することすらあるのである、故に破瓜期となつても月經なく、之れに反し疼痛は規則正しく反覆し來り、しかも漸次下腹部を增すときは速かに醫師の診察を乞ふべきである。

血囊　血液を充たせる囊

從來規則正しく來潮せる月經の閉止は第一姙娠を思ふべきで、其他授乳中又は更年期にも閉止することあれど、これらは凡て生理的のことである、されども亦疾患によつて月經の閉止することあるもので、卽ち全身の疾患としては、例へば衰弱せるもの、榮養不良なるもの、重症神經病者等で、又局部原因としては生殖器の疾患及變形等を數へなければならぬ。

猶詳しく一般全身疾患として指を屈するときはリユマチス病、チブス、コレラ、

糖尿病　尿中糖を見る新陳代謝の異常ある病

甲狀腺肥大し種々の神經症狀を併せる病

バセドー病

猩紅熱等の如き急性熱性病の時にも月經が來潮しないことがある。殊にチブスでは恢復期になつても閉止してゐる、慢性病中で、第一に數ふべきものは、結核症及び萎黃病である、後者にありては數ヶ月間も月經閉止することあるのみならず、時々大出血を來すことさへあるのである、然れども先づ生殖器成熟時に至るも尙月經の來らざることある時は、肺結核發病の初期なるべしと想像するをよしとするのである、故に此の時代となつても月經なきものは、假令咳嗽、喀痰の有無にかゝわらず、羸瘦、脫力の感ある時は直に醫診を受け、獨り物理的のみならず、細菌的檢査をも受くるをよろしとすることがある、其他糖尿病、腎臟病、バセドー病、精神病等も亦閉經を見ることがある、營養狀態より云へば大出血の後、モルフキン中毒症、脂肪過多症、生活方法及び營養の急激なる變化をなした時、例へば田舍より學生となり、又は女中奉公をなすため上京したものは月經數ヶ月間も閉止することあるは其の實例である、又精神興奮により無月經となることもある、例へば火事、鐵道事故、死報等の驚愕のため月經閉止することあるが如きである、又餘り長く連續的に授乳をなす時は遂に月經は治すべからざる程度に閉止を來すことがある、此の時には通常局所的障害（例へば子宮及び卵巢の早期萎縮等）を來すことがある。

内膜搔把過度　内膜炎等にてソーハ手術をなし其の過度となつたとき

局所的變化として尙述ぶべきは例へば重篤な產褥熱後又は腐蝕劑過用のため、或は內膜搔把過度のため子宮の粘膜及筋纖維までも强く變化せしめた時、或は產褥疾患などの後、廣汎なる兩側卵巢炎及び骨盤腹膜炎のため瘢痕萎縮をなせる時、或は卵巢の膿胞の消滅せる時、卵巢を切除した時等にも月經は閉止するものである。

されども上述の如き原因を認むることを得ず、長時月經の閉止せるものがある、かくの如きときには內分泌の異常なりと見ざるべからざるものである。

無月經の處置

此等の處置は總て醫師の診療によらなければならぬのは勿論で、殊に全身體格上の原因を、適當なる時に發見し、且つ適當なる營養的、物理的處置をなした時には都合よく、直に其等の障害を除き得ることがある、殊に一時的月經の閉止ある時、之れを長く連續せしめない樣勉めなければならぬ。

月經痛

月經痛は一種の獨立した疾病と稱すべからざるもので、實に種々の全身或は局所的疾患の時に來る一の徴候たるに過ぎない事が多いのである、されども通例婦人の最も苦痛とする徴候の一つであることは否定することが出來ぬものである。

凡そ月經痛とは子宮筋肉の收縮により子宮の内容、例へば月經時に血液を液狀或は凝固樣狀態の下に排出せんとする時に起る疼痛である、通例月經痛を分ちて三大別とす、一は器械的、二は炎性、三は神經性である。

神經性月經痛

神經性月經痛は、婦人にヒステリー及び神經衰弱が廣く瀰漫せるが如く、又屢々見る所である、實に此等のものは婦人生殖器に何等の病的變化を認めざるを以て特徴とするものであつて、凡そ肉體上及精神上健全なる婦人は、月經時の子宮筋肉收縮による神經刺戟を全く感ぜざるか、或は單に下腹部に僅少なる不快の感及牽引の感として痛感するに止まるものなれども、ヒステリー性婦人では、衰弱せる神經中樞機が過度に感動し、單一なる收縮をも亦激痛として感覺するに至るものである、又ヒステリー性にあらざる婦人でも、子宮神經の異常に興奮せるもの、或は子宮粘膜に來る刺戟の異常に昂上せる時、例へば月經血流出の障害せられたる時などには、強激にして且つ疼痛性の子宮收縮を起すことあるものである、最も後者の例の如きは神經性のものと器械的のものとの中間のものである。

器械的月經痛

器械的月經痛とは、生殖器管の或る何れかに病的變化ある時例へば位置の異常、狹窄或は閉鎖等があつて、月經血の流出の妨害せられて起るものを云ふのである。およそ血液が子宮内に停留するときは、子宮に對して異常の如く刺擊し、從つて子宮筋肉は強く收縮し、血塊を排出せんと努力する狀態となり、恰も陣痛の如き疼痛を起すものである、而して器械的月經痛の特徴は、月經前已に痛感を起すことである、之れ月經前に子宮粘膜は、その充血により強く腫脹し、狹小なる子宮腔を充たすことを得ざるためである、實に疼痛性子宮收縮はその刺擊のために起るものであ

る、されども既に經血し、子宮粘膜の腫脹去るときには、茲に子宮腔狹小のため痛感なきに至るものである、最も前述せる處女膜の全閉鎖の如き、或は生殖器管の閉鎖ある場合には、月經血は各月經毎に、益々澁滯し、從つて月經痛も愈々强烈となり且つ陣痛樣疼痛となる、其他內或は外子宮口に於ける先天的又は後天的狹窄あるものでは、子宮口を環狀に圍繞せる筋肉の陣痛樣收縮を來し、又腫瘍（例へばポリープ）或は子宮位置の異常ある時は、排出せらるゝ月經血が排泄管を通過し難く、爲めに子宮の收縮乃ち疼痛を來たすのである。

時として、斯くの如き器械的障害に、疾病ある神經系統加はるときは、月經痛の器械的型に、加ふるに神經性型を混ずるに至るものである。

炎性月經痛

生殖器及び其の近接臟器の炎衝性變化ある時、卽ち子宮殊にその粘膜の炎衝、又は輸卵管、卵巢、骨盤腹膜、乃至は結締織又は膀胱腸管（殊に虫樣突起）などの炎衝ある時は、月經時に其の充血のため感受性激烈となり、子宮の收縮により起る牽引の感は强盛となり、爲めに月經痛を起すことがある、加之若しこれに神經性及び器械的の障害加はるときは、隨分苦痛あるものである、炎衝性月經痛に屬するものに、所謂膜樣月經と稱するものがある、寧ろ稀れなるもので、膜樣のものが全體或は小片又は細屑となつて、强烈なる疼痛の後排出せらるゝものである、これを顯微鏡下に見る時は、明かに子宮粘膜の慢性炎衝で、粘膜の上層が相連接して擧上せられ、以て排出せられたものである、又所謂中間疼痛と稱して輕度の疼痛を伴ふて兩月經間に血液及粘液の排出することがある、これも多くは子宮粘膜の慢性炎衝の結果である、然れども此等の多くの月經時疼痛障害は衞生に意を注げば、月經直前又は月經中にこれを豫防し停止することが出來るのである。

月經痛の處置

月經痛の處置は醫師のなすべきことで、殊にその原因を索むることを要するものである、若し單に疼痛を柔ぐる目的に徒にモルフイン、阿片等の痲睡藥によらんとするときは、病原たる下腹疾患は治せざるのみならず、一方恐るべきモルフイン

中毒に陥ることがある、實に只醫師のみ生殖管の如何なる部位に閉鎖又は狹窄存し、以て經血の流出を障礙するやを知り得るものである、而して若し之れを發見した時は速に自由に流出せしむる道程を造るべきである、無論炎衝性のものであれば消炎法によつて、これを除かなければならず、神經性月經痛又は其原因疑はしきものであれば、常に神經系統の處置をなさなければならぬ、神經性のものには食餌的及び理學的療法、全身摩擦、體操、水浴療法等を試みなければならぬ、その他患者の轉地療養も効がある、又肉體的及ひ精神的の勞作及び休養を有理的に轉換する樣注意すべきである。

月經過多

月經過多とは、出血のため全身狀態の恢復あしく、且つ餘り長く、例へば六日乃至七日以上に至るも出血の持續するものを云ふのである、およそ通常の月經であれば、出血するも殆んどこれがために衰弱を來すと云ふ樣なことはなきものであるに係はらず、獨り月經過多のものにありては月經中のみならず、その以後にでも衰弱し、爲めに心悸亢進、無力等に陥ることさへあるのである。加之次ぎの月經時に至るまで衰弱の恢復し難きものが多い、又健康なる婦人の月經は漸々に出血し、一度强盛となるや、再び徐々に消失するものであるけれども、月經過多のものは、出血急に來り、且つ初めより甚だ强烈のもので、しかも時來りて止むことあるも、又急に大出血を反覆し、二週日も持續して出血することがある、血液は凝固し、屢々小塊となつて居る、之れに反し健常の經血は凝固せらるゝことなきものである。

月經過多の原因

月經過多の原因は一は生殖器の疾患で來り、他は全身疾患のために來るものである、月經過多の原因となる局所的疾患を擧ぐれは、最も屢々なるは子宮粘膜の炎症及び增殖で、其の他ポリープ、筋腫、更年期月經、子宮癌腫、輸卵管及び卵巢の慢性炎性疾患、惡性卵巢癌等である、子宮位置の異常殊に子宮後屈、及び子宮轉も亦等しく著しき子宮出血を起すものである。全身疾患に屬するものでは第一位にあるものは萎黃病である、「ヴキルショー」は若年の萎黃病に疾めるものは、こ

更年期月經　年老にて月經なくなる頃の月經

子宮轉　子宮腔が反て外方に出る疾患

萎黃病　惡性の貧血病

絞窄肝　西洋などでコルセットで強くくびるため肝臓のくびれてなるもの

の種の出血強くして、且つ長く持續するものであると言つてゐる、又多く觀る所のものに全く精神的なりと認めらるべき試驗準備のため、又は肉體的過勞と認めらるべき例へば手淫癖あるものなどには月經過多を來たすものである、其の他腎臓・肝臓を疾める婦人、殊に膽石で慢性の黄疸を來せるもの、絞窄肝などのものにも月經過多を來たすことがある、急性傳染病中麻疹、猩紅熱、痘瘡、殊にインフルエンザなども屢々月經過多を來たす事がある、けれども此等は、必然的のものではない、茲に再び注意すべきことは子宮粘膜の急性炎衝で出血を伴ふものあることである、又所謂更年期出血は甚だ饒多で、長く持續するものである、されども更年期出血と稱するものには精査せなければ誤診することがある、例へば慢性子宮内膜炎である、其の他ポリープ或は筋腫、稀れに子宮癌の初期である事がある、俗間に更年期出血は放置しておいても自然に治するものであると稱し、後來再び恢復し難き後悔を殘すことがあるから注意せなければならぬ、されど生殖器疾患のために出血するものなりや、更年期となり生殖機能消失のため出血するものなりやは醫師の診察によるより外はない、されど又假令更年期出血であつても、五十歳以上のもので大出血をなす時は、遂に婦人をして衰弱せしめ、殊に心臓筋肉の變化を起すことがある。

月經過多の處置

月經過多の處置としては勿論全身及局所的原因により各々其れに相當する處置をなさなければならぬ、例へば若年の萎黄病のある處女には肉體的及び精神的安靜を命じ、食餌や空氣に意を注ぐ事は、藥餌、浴治療法と共に必要なることである、およそ原因の何たるを問はず、大出血ある時は靜臥、氷奄法、輕き食餌を與ふることは第一條件である、便秘は忌むべきことで之れを除くために、カスカラなどの緩下劑を用ふるか、浣腸をなすもよい、貧血著しく心臓衰弱、痙攣等の重症あるものは、已に治癒の期を失せること多いものである。

婦人の不姙

月經の障害あるときは又不姙を伴ふこと多きもので、勿論結婚後十年にして初めて姙娠するものなきにあらずと雖ども、通常結婚して三年を經過するも尚姙娠せな

いときは、之れを第一次不姙症と稱するものである、およそ不姙症の原因は夫婦何れかに存することは明かなことであるが、然し古來不姙を以て盡く婦人に罪を歸せしは至當のことではない「ネッゲラート」による時は不姙の原因は六十%は男子にありと言つておる位である、最もこれも確實なことではない樣に思ふけれども少なくとも男子の不姙の原因に與ること多きは斷言することを得るのである。

統計の敎ふる所によれば全夫婦の十乃至十五%は不姙なりと云ふ、而してその最も多き原因は夫婦間殊に男子の過去の生殖器疾患である、さればとも亦生殖器疾患なくとも男子にありては生殖不能のものがある、例へば糖尿病、神經病などの如きこれである、故に不姙の原因を探究するの際には女子を診査すると等しく必ず男子の檢査を忽諸にしてはならない。

不具及疾患による不姙

若し婦人生殖器の不具なるがため、交接、受胎、或は姙娠を妨ぐるの原因ある時は不姙となるや無論である、これに屬する疾患としては生殖器の各部卽ち膣口より初まり、子宮口、子宮、ラッパ管、卵巢、骨盤、腹膜、結締織に至る各部位に於ける發育不完又は疾患並びに神經系統の疾患である、されども又全身疾患、例へばチブス、コレラ、猩紅熱、糖尿病、慢性腎臟炎、高度の貧血、脂肪過多症、神經病等も亦不姙の原因となることあるものである。

疾患なき不姙

以上は卽ち疾患或は先天的不具に因る所の不姙であれども、亦何等の疾患と稱すべきものなきにかゝわらず、往々不姙なる事がある、今順を序ふて左に述ぶべし。

一、氣候　氣候の差により姙娠の多寡を見ることは姙娠が春秋に多く、夏冬に少なく、殊に大寒中は甚だ稀れなることにより之れを知ることが出來る、之れを動物につきて見るも鳩が暖かき巢にある時は、一年に八回まで雛を育つるも、寒き巢にある時は孵化せしむること少なきに依つても知る事が出來る、又人類に於ても寒地にて子なき人が、温暖なる地方に移住した時姙娠することがある、之れに反して暖

地で屢々姙娠したものが、偶々寒地に移つたため更に姙娠せざるものあるが如きである。

二、住居　試みに金魚を飼養するに當り、徒に飼料及び清水に腐心すると雖も、狹隘なる瓶の中に放つ時には、決して繁殖するものでなく、或る佛蘭西の動物學者は鷄を狹小な籠の中に飼養し、次ぎに邸内一定の場所を限つて幾分の自由を與へ、其の次ぎには眞の自由を與へたに、其産す卵の比は二、四、六であつたと云ふことである、人に於ても矢張りソーデあつて、空氣の流通あしく、日光の透徹充分でなく、且つ不潔狹小な家庭に住めるものは姙娠すること甚だ少なく、又囚監人は交接することあるも受胎し難きもこの例である。

三、飲食物　滋養佳良な食料を攝取するものは一般に生殖力强きものであつて、之れを動物について見ても犬は一年に六乃至十四の狗兒を得るけれども、同種類である狼は五乃至六、狐は四乃至五兒を得るに過ぎないのである、又山猫は一年に四乃至五疋を生むと雖も、家猫は十乃至十八疋を分娩し、其の他猪は四疋乃至十疋を育つるに反し豚は十七以上を養育するはこの間の消息を語るものである。

四、運動、更に之れを動物試驗によつて見るに、雌雄の二犬を飼養する時、空氣、日光、温度、飲食物等悉く善良ならしめて、之れに拘はらず鐵鎖を以て拘禁し、運動を不能ならしめたるに、遂に兩犬は生殖力もなく、從つて子を産むことなかりしが、之れに反し其の犬を全く自由ならしめたるに、再び多くの子を得た例がある。

五、腦力、腦力を多く使用するものは、使用すること少なきものに比して、姙娠すること少なきは、古來より多くの學者、發明家に屢々見る所のものであつて、加之その兒女が所謂豚兒たること多ひのである。

六、年齡、女子は二十歲より二十五歲までに結婚したもの最も早く子を擧ぐるもので、多くは結婚後滿二年で第一子を擧ぐ、然れども十五歲未滿又は四十歲以上にて結婚するものは姙娠すること少なきものである。

七、血族結婚、「ダーウキン」は同胞互に相婚嫁するときは、遂に其人種は滅亡す

と云つてゐる、實に血族は其縁近き程あしく、遠き程善きもので、血族結婚のものには子無きこと多きものである。

八、過房、賣春婦の子なき最大の原因は過房にあるは、勿論のことであるけれども、之等の極端なるものは除外しても、普通家庭の婦人も夫婦相愛の情濃やかに過ぎるものは不姙のものが多い、之れに反し夫婦相別れて旅行した後、姙娠すること多きは人々の認むる所である、玆を以て子無き人は特に夫婦別有の眞義を味ふべきである。

されど婦人不姙の多くの原因中其何れに基因するやは醫師の診察によりて、初めて明かなものである。

不姙の原因等を前述よりも今少し平易に、且つ詳しく述べた一篇を追加す。

不姙の悲しみ

ミルは曰く婚姻は社會を構成する基なりと、げにや兒を產まざる婦人は不幸のものなりと、之れを古き書物に探ねましても舊約全書中にラケル已に兒を產せず、其妹レアに兒多きを羨やみて、夫ヤコブに向ひて、我れに子を與へずんば我死なんと、言ふたと云ふ事である、又バルラスがクリメイ漫遊記中にチルカシイの貴族は其女が一兒を擧ぐるに及びて、始めて嫁奩を理むと記しております、又アンダマンの婦人は己が孕めるとき他より入り來れる人ある毎に腹部を示して誇ると言ふ事であります、甚だしきに至つては猶太や土其古、乃至は支那に於ては子なき妻は離婚して可なりとさへ放言しておるのでありますが、無論斯くの如き事は、有り得ない暴言ではあるが未開の蠻人や、古昔の人には隨分子を熱望するの餘り悲慘の事をやつておつたのであります。

斯程までに切望せるにナゼ子なきもの、卽ち不姙症と云ふ姙まずの婦人がある乎、之れ余が說明して姙まずの婦人を姙むの人の手引にもせんと企つる所以である。

絕對的不姙症と比較的不姙症

凡そ不姙症は別ちて二つとすることを得るのである、一は年老いて身を終るまでドウしても子のなきもの之れを絕對的不姙症と呼び、第二は結婚後滿三ケ年を經過

するも姙娠せざるもの之れを比較的不姙症と云ふのである、何を以て比較的不姙症と云ふかと申しますれば、元來結婚後第一兒を擧ぐるまでの年月を申せば、余が嘗て統計で調べた所では、第一兒は結婚後多くは滿三年内に出産しておるのでありまして、百分率で申しますれば八五％以上になつておるのであります、即ち換言すれば十中八、九は滿三年内に子を産むのであります、其以上の年月では極めて僅少であるのである、故に滿三年以上を經過するも子を産まざるものは、何れにか故障のあるもので、之れを比較的不姙症と名づけるものである、勿論其れ以上の年月にて兒を産まないと斷言は出來ないのであり、結婚後十五年も或は其れ以上にて姙娠するものもありますが、其れ等は極めて稀なる事であるので、先つ比較的不姙症だとして不當ではないのであります、外國でも「ダンカン」はエデヰンブルヒ地方にて調べました所では、結婚後十七ヶ月位で姙娠したもの最も多く、其の三分の二は結婚後二年間に姙娠しておるのであります。

不姙症の割合

されば不姙症とはドノ位世間にあるかと申しますれば、楠田氏による時は略二十四、九％なりと言ふ事であります、獨逸の「キッシ」の統計によりますれば八人餘につき一人の不姙者ありと言ひます、其他色々の人の統計に就きても大凡そ五から八％の間であります。

不姙の原因

かく不娠者は割合多く存在するものであるが、其原因につきても既に古くより其時代時代の智識の程度により種々説明しておつたのであります。

印度及アラビヤ、支那の所説

古昔印度に於て當時有名なる著ズルスタに受胎は月經期を以て最も容易なる時とし、其時には母胎は恰も蓮花の煦々たる日光を受けて蕾を開くが如く口を開けりと、從つて此の期にあらざる時には受胎し難きを脱いて居るのである、亞剌比亞に於てもマイモニデスの著書に屢々不姙症の事を説ぬて居るのでありまして、況んや後の世に出でたる舊約全書や、紀元後となつては數限りなく文見る人の注意する所であ

ります、近き所の支那では昔でも北齊の大夫清澄は早婚は不姙の原因たること多く、子を希ふほどのものは宜しく血を養ひ、時を俟ちて婚嫁すべしなどと說き、婁英も不姙を治するには先づ經水を調へ、依つて其原因を審かにし、藥を採るべしと言つて居るのであります、斯くの如く人文發達の時より已に此の事につきては諸人の研究もあつたのであるが、先つ近年の所說によりましては、之れを三つに區別することが出來るのである。

近時の所說

一、發芽不能（卵の發育不能）なる場合

二、精蟲と卵との觸接障害ある場合

三、子宮內にて受胎した卵が孵化發育し得ざる場合

これらの原因あるときには婦人は不姙となるものである。

卵の發育不能による不姙

一、發芽不能即ち卵の發育不能のため不姙の原因をなすもの。

これを別ちて永久性及び一時性の二つに區別するを得るのであつて、永久性のものとは例へば卵巢の缺如せるもの、先天性萎縮などのものを言ひ、一時性のものとは例へば卵巢炎のため一時不姙の原因となるが如きものでありまして、其他卵巢囊腫だとか、糖尿病、アルコール中毒、精神病ある際などは此の部類に屬する原因である、又脂肪過多症も此の列に入るもので、鷄が脂肪多き期節には產卵少なく、養鷄家が產卵を欲する時腹部を水中に入れて、脂肪の附着を少なくして目的を達するが如きは人の多く見る所であります「キッシ」は脂肪過多症のもの二一五例中無月經のもの四九、月經過少のもの一一六例を擧げ、更に二一五例の脂肪過多症の中四八例の不姙のものを見たる事を告げて居るのである、滋養不充分のものも亦一時性不姙症の原因となり得るもので、例へば動物の中で同種屬に屬する犬、狼、狐で比較して見るに食物豐富にして營養よき犬は一年に六乃至一四の兒を生むに比べて、狼は五乃至六兒、狐は四乃至五兒を生むに過ぎないのである、又山猫と家猫とを比するときは前者は四乃至五兒を產するに對し、後者では一〇乃至一八兒を產するのであ

る、更に今一例を加ふる時は猪は四乃至一〇兒を産するに比し、豚は一七兒の多くを産するのである、誰れか營養の過不足が産兒の多寡に關係なしと言ひ得るでしやう、又囚監せられたる人は其自由の人よりも其當時は又一時性に不姙の原因となるものである、此等は精神上及び肉體上の苦惱が此れに影響するものであるが、事實囚監せられたる婦人が自由となりて以來多くの兒を産することは屢々見る所である、此れを動物に實驗するに二つの雌犬を飼養し、空氣、日光、温度、食物等悉く同狀態ならしめ一は鐵鎖を以て拘禁し、運動を不能ならしめ、他は自由に運動せしむる時は其生殖力に於て兩犬に於て著しき差違を來たすものである、其他寒暑の差も亦姙不姙に關係するもので、今鳩につきて見るときに、暖かき巣にあるものは一年に八回も雛を得れど、寒冷なる巣にあるものは遂に孵化すること少なきに依つても之れを知るを得るものである・血族配偶も亦不姙の原因となるもので「ダーヴキン」などは同胞相婚嫁するときは遂に其種屬は亡ぶとさへ言つておるのである。

この項に附言しておかなければならないのは婦人の芽の發育不能ではないが、男子の精蟲の異常である、卽ち精蟲の欠除及精蟲死亡のことである、前者の精蟲缺除症とは射出せられた精液中に受胎に必要なる精蟲を缺除せる狀態を云ふのでありまして、其の原因に二種あります、一は睪丸が其機能を營まざる場合でありまして、他は精路の閉塞せられたるがため分泌物中に精蟲を含有せざるものであります、後者の精蟲死亡症とは精液中に死亡せる少數の精蟲の含有せらるゝ狀態を云ふのであります。

精路
精蟲の通過する道

實に臨床上女子に於て不姙症を來さしむべき原因を發見し得ざるときに、配偶者たる夫の精液を檢する時は、夫の約半數には異常を認めざるも、五分の一に於ては姙孕力非常に減退し、姙娠の見込少なきものを見、約三分の一には絶對的に不姙症の原因を有するものがあります。

精虫と卵との接觸障害

二、精蟲と卵との觸接障害ありて不姙の原因となれるもの。

凡そ交接時の生理的現象を考ふるに、其の際バルトリン腺は狹膣筋に壓せられて

分泌物を出し、陰核は勃起して陰莖を押壓しておるのである、而して腟壁は蠕動的收縮によりて精蟲を子宮に近づかしむるに勉めて居る、且つ子宮は腹壓のために骨盤に低下し、子宮口は圓形となり、子宮頸部の腺よりは又分泌物腟内に排泄せられて、精蟲の運動を容易ならしむる働きをなし、更に垂下せる粘液によつて精蟲の子宮頸部進入に便ならしめて居るのである、勿論喇叭管の内にも此の際には口を開ぬて精蟲の進入し來るを待つておるのである、斯くの如きを以て上述の作用に反對するが如き障害は不娠の原因となるや明かな事であります。

即ち此等の障害を盡く擧ぐるは、其の煩に堪えざる所でありますが、其の著しき例を說けば、

子宮口の狹窄は、不姙の婦人に屢々見るものでありまして、其の狹窄の度著しきは遂に精蟲の進入を、困難ならしむるものである、又頸管加答兒があつて分泌物多く、且つ分泌物の性狀をも變化せるものに至りては、前者と等しく精蟲の進入を困難ならしむるのみならず、分泌物の酸性となれるものは精蟲を死滅せしめて、不姙の原因となることがある。

喇叭管炎が不姙の原因たることは最も多く臨床家の見る所でありまして、之れ受胎即ち卵と精蟲との會合が喇叭管内にて行はるゝものであるから、喇叭管に炎性又は狹窄、屈曲などの障害あるとき姙孕し難きは明かな事である。

子宮發育不全も亦姙孕し難きもので、これ盆栽樹の花さけども、實り難きと其の理を一つにするのである。

子宮位置の異常、即ち子宮後屈あるものは正規位置なる前屈に比し、甚だしく姙孕し難きものであつて、其他子宮内黴症や、子宮下垂も亦同じ結果を來すものである。

子宮筋腫も亦不姙症の原因たる事多きもので「ウキンケル」は四一五例の筋腫患者中一三四例即ち二四、三%の不姙症のものある事を證明して居るのであります以て如何に不姙の原因となるかを知る事が出來ます。

其他腟の閉鎖せる事や、腟の缺損せる時處女膜の閉鎖せる時、精蟲と卵とが觸接

せず、不姙となる事は説明する迄もないことである。

腟分泌物（俗に云ふ白帯下）の、精蟲に對する影響は前述した通りであるが、元來子宮内膜や子宮頸部より排泄する分泌物はアルカリ性で、腟分泌液も上部に於ては又アルカリ性なるを健康の狀態とするのである、ツマリ其等の分泌物は精蟲の生活活動に至便となれるものであります、所が若し子宮内膜や子宮頸管乃至は腟部に炎性あるときは、分泌液は直に酸性となるのである、ツマリ酸性の分泌液は直に精蟲を死滅せしむるものであるから、卽ち自から不姙の處置をなして居ると云ふ結果となるのである、「レ、ウイ」は健康なるものゝ分泌液中には交接後二十六時間精蟲活動せるも、之れに反し不姙のものゝ分泌液にては已に五時間内に於て活動力を消失せりと言つてゐます。

快美缺乏症は又不姙に關係する事多きもの、如く、「キッシ」は不姙症四〇例中十二例は本障害を有して居つたと云ふ事であります、勿論睡眠中若しくは麻醉中の交接によるも姙娠することあるにより、之れを絶對的に云ふ事を得ざるは無論のことであります。

淫事の過度も亦不姙の原因たることがあります、例へば賣春婦等に姙娠するものは比較的少なき例の如きものであります、之れは婦人の體内に精蟲に反對する體液生じて、精蟲を死滅せしむるからであると説明する人があります。

受胎した卵が孵化し得ざる場合

三、子宮内にて受胎した卵が孵化發育し得ざる場合。

子宮内膜炎あるものは、假令精蟲と卵とが會合卽ち受胎して喇叭管を下降して、子宮腟内に來ることあるも姙娠し難きもので、臨床上屢々見るところの實例であります。

子宮周圍炎や子宮腹膜炎あるものも、血液循環不良なるため不姙の原因となるものである。

其他子宮癌や子宮筋腫あるものも亦姙娠し難きもので已に前述せるが如きものである。

不姙症原因の統計を擧くるときは左の如し。

二五三例の不姙症中（楠田氏ニヨル）

骨盤腹膜炎及子宮周圍炎（ラツパ管炎共）	八九例
子宮組織の變化	七二例
體質異常	一九例
子宮口狹窄及子宮位置異常	四九例
生殖器發育不全	四例
快美缺乏症	三例
卵巣囊腫	七例
慢性ラツパ管炎	五例
子宮筋腫	一例
膣痙、膣脱、膜性月經困難症、精蟲缺乏症	各一例

産兒制限

近頃産兒制限と云ふ字を使用して可否、相論爭して居るのであるが、左に醫學上より見たる新マルザス論を述ぶることゝす。

産兒制限とは何ぞや

産兒制限とは、已に姙娠したる胎兒を成熟せざるに先だち、姙娠を中絶せしむるを云ふのであつて、又姙娠せざる樣避姙の方法を講ずるも、此の類に入るものである。

我國の生産率

産兒制限の御話をするに當りまして、先づ第一に我國の人口に就て考慮致したいと思ふのであります、最近我國の二十年此方の生産率を通覽致しますするに、明治四十四年迄は段々に增加して居るのでありますが、第一表にも示してあるやうに、明治四十四年から段々に少し宛であるが、減少の傾向を呈して居るのであります、をへば四十四年には千人に就て——表は各年に於ける所の出産率を示したのであります　三四、一‰それからして大正元年には三三、四‰と云ふやうな具合に年經う

るに從つて少し宛であるが、漸次減少の傾向を呈して居るのであります、之を先進國である所の英國とか、或は佛蘭西、獨逸の同じ千人に對する所の生産率と比較して見まするに、英國に於て千九百六年には二七、〇‰の出産率ありしものが、年を閲するに從つて漸次減少して居りまして、千九百十二年には二四、〇‰佛蘭西に於きましても、千九百六年二〇、五‰の出産率ありしものが、漸次減少して、千九百十二年には一九、〇‰と云ふ出産率になつて居る、獨逸でも矢張三三、一‰の生産率が減少して二八、三‰と云ふ生産率に減少して居るのであります、即ち是に由つて見ますると云ふと、英國或は佛蘭西、獨逸に於ても生産率が漸次減少して居ると云ふ事を見るのであります、且つ之により知る事は我國に於ける所の出産率よりは遙に大なる所の減少を來して居る、加之我國に於ては僅に四十四年からして、其の減少の率が表はれて居りまするが、外國に於てはずつと以前からして減少して居ると云ふ事を知るのであります、此の減少と云ふものは何うして來るのでありませうか、之が吾人の注意を惹く第一であります、無論、動物でも下等動物は生殖力が強く、高等の動物になるに從つて生殖力は減少するのでありまして、例へば原生物アメーバと云ふやうなものが非常に生殖力が殖えるに拘らず、牛とか、馬とかは段々少くなるが如く、或は文明人は野蠻人よりは生産率が少い、さう云ふやうな事があるが、併しながら同じ英國なら英國、佛蘭西なら佛蘭西で、生産率が漸々減少して居る事は、何等か原因して居るのではなかろうか、或は近頃流行する所の産兒を多少とも制限すると云ふやうな結果ではあるまいかと云ふ事に疑を置かなければならぬ。

第一表

明治四十四年	（一九一一）	千人につき生産の割合	三四、一
大正　元　年	（一九一二）	同	三三、四
大正　二　年	（一九一三）	同	三三、三
大正　三　年	（一九一四）	同	三三、八
大正　四　年	（一九一五）	同	三三、二
大正　五　年	（一九一六）	同	三二、九
大正　六　年	（一九一七）	同	三二、七

第二表　人口千人ニツキ生産ノ割合

	英	佛	獨
一九〇六年	二七〇	二〇、	三三、一
一九〇、年	二六、三	一九、七	三二、二
一九〇八年	二六、六	二〇、一	三二、〇
一九〇九年	二五、七	一九、五	三一、〇
一九一〇年	二五、〇	一九、六	二九、八
一九一一年	二四、四	一八、七	二八、六
一九一二年	二四、〇	一九、〇	二八、三

第三表　人口千人ニツキ死亡ノ割合

	英	佛	獨	日
一九〇六年	一五、七	一九、九	一八、二	二〇、〇
一九〇七年	一五、五	二〇、二	一八、〇	二一、〇
一九〇八年	一五、三	一八、九	一八、〇	二〇、九
一九〇九年	一五、〇	一九、一	一七、一	二一、九
一九一〇年	一四、〇	一七、八	一六、二	二一、二
一九一一年	一四、八	一九、六	一七、三	二〇、四
一九一二年	一三、八	一七、五	一五、六	二〇、〇

第四表

	英	佛	獨	日
一九〇六年	一二、七	〇、六	一四、九	九、一
一九〇七年	一〇、八	〇、五(減)	一四、二	一二、二
一九〇八年	一一、三	一、二	一四、〇	一二、八
一九〇九年	一〇、七	〇、四	一三、九	一二、〇
一九一〇年	一一、〇	一、八	一三、六	一二、八
一九一一年	九、六	〇、九	一一、三	一三、七
一九一二年	一〇、二	一、五	一二、七	一三、四

死亡率

更に死亡率を見まする時に、矢張千人に對する所の各年の死亡率でありまするが英國は、千九百六年には、一五、七‰でありしものが、千九百十二年には漸次率を減じて一三、八‰となつて居る、佛蘭西も矢張減少して居る、或は獨逸も矢張減少して居る、併し我が日本に於ては、英、佛、獨に於て見る事の出來ない位死亡率が

年を經るに從つて、少しの減少をも來たさゞるのみならず同じ率に上つて居ると云ふ事であります、我國衛生狀態が何う云ふ都合でありますか、洵に困つた事であります。

人口增加率

是に由つて出產率と、それから各年に於ける死亡率を比較して、千人に對する所の各年の人口增加率を見て見ますると云ふと、英國に於きましても、人口は增加するに違ひない、併しながら人口の增加率と云ふものは、漸次減少して居るのであります、或は佛蘭西に於ては增加率が、是は非常に少くて千九百七年とか、千九百十一年には却つて人口が減つて居る、人口の增加率が減少して居ると云ふ結果になつて居るのであります、獨逸に於ても段々に減少して居る、獨り日本に於ては、千九百十二年迄は漸次增加致して居るのであります、實際日本の人口の增加數はどの位であるかと申しますると云ふと略一ヶ年に六七十萬人殖えて居ると云ふ事になるのであります、それで神戸の人口が七十萬あると假定しますと云ふと、神戸市位の町が毎年我國に一つ宛出來て居ると云ふ結果になるのであります、昔から我國に天の益人と云ふ言葉があるし、或は生めよ、殖えよ、地に滿てよと云ふ言葉がありますが、我國に於ては、生めよ、殖えよ、さうして地に滿てよと云ふ狀態になつて居るのであります、明治五年に三千三百萬、私達が小さい時に三千餘萬と云ふ歌がありました、それが明治四十年には四千萬、大正五年には五千五百萬と云ふ數になつて居るのであります、人口は斯くの如く增加致して居りまするが、我國の土地は增加する事はない事は明かな事實であります。

人口の密度

それで人口の密度はどの位であるかと云ふ事を見ますると云ふと一平方里に二千二百三十九人と云ふ大分澤山の人數になるのであります、世界に於ても人口の密度の大なる事は、白耳義、或は和蘭に次いで居りますが、白耳義は總面積に比して其の耕す所の土地が二分の一あるのに反して、我が日本に於ては僅に六分の一しかないと云ふ事になつて居るのであります、是れに由つて之を觀ますると云ふと、或は

我國に於ては人口密度に於て、世界一であるかも分らないのであります、さうして我國の面積は增加しない。

我國の未開墾地

我國に於て未だ開墾すべき土地が七十七萬町歩あると云ふ事でありますが、毎年六七拾萬の人口が增加すると云ふと、此人口を養ふに要する所の土地が三萬九千町歩要すると云ふ事になるのであります、此の大事な、取つて置きの未開墾地も二十年足らずでなくなつてしまうと云ふ事になるのであります、斯くの如き我國の狀態でありますが故に、斯う云ふ點からして、或は經濟上或は社會問題と云ふ事とくつつけ、或は近頃流行る婦人解放と云ふ事をくつつけ、我國に於ても漸次產兒制限と云ふことを聞くやうになつたのであります、併しながら先にお話したやうに、明治四十四年以來我國に於ける出產率は、漸次減じて居るのであります、尙死亡率は歐洲先進國に比して高率なる死亡率を有して毫も減少して居ないと云ふ事實がありますが故に、我國に於て極端なる所の產兒制限と云ふ事をなしたならば、國家として實に危險なる事が生じはしないかと思ふのであります、佛蘭西に於ては、此人口の減少に就て・從來非常に政府及び其當路の人の苦慮を重ねつゝあつたのでありますが、殊に戰爭に於ては、痛切に、其の事を感じて居る樣なことでありまするが故に、我國に於ても餘程注意しなければならない事だと思ふのであります。

私は玆に申しまするのは、經濟上とか、或は社會上の立脚地から御話しすると云ふ事でなく　殊に學問上より言へば、此等は何うも適應の標準が確然たるものでないかの如く見えますし、私は純醫學上に立脚致しまして、例へば姙娠して居る所の婦人が將に死に瀕せんとしつゝある所の哀れな所の母體を救ふが爲に、或は子孫の健全幸福を增進せんが爲に、又は罪なくして遺傳に苦しんで居る者を未然に防がんが爲に、醫學的見地からして受胎を防く方が宜しいと云ふやうな事を、お話し致さうと思ふのであります、强ゐて申しまするとと云ふと、醫學上の見地からして新マルサス主義を認むるものであります。

マルザス論

然らば新マルザス論と云ふものは何んなものであるかと申しますれば、其の源をマルザス論に發して居るのでありまして、マルザス論は西暦千七百九十八年、我が寛政十年、英人マルザスの主張したる所のものでありまして、氏の論旨とする所は主として人口の問題に起つて居るのでありまして食物の増加する割合と、人口の増加する割合とは、そこに非常なる所の相違がある、即ち食物の増加の二、四、八と云ふやうな等差級數的に増加するに拘らず、人口の増加は二、四、八、一六と云ふやうな等比級數に増加するのである、從つて結局人類は食物に苦しまねばならぬと云ふことが初めの氏の立脚點でありまして、人口の増加は防がねばならないと說いて居る、其の方法を二種類に分ちまして、第一は死亡率はドン〳〵多くする方が宜しい、戰爭がある方が宜しい、殺人がある方が宜しい、第二は出產率を少くする、其の方法としては、結婚を延期する、若しくば獨身生活を送るのが宜しいと云ふやうな事を申すのでありまする、即ち妻子を養ふ所の者が養ふ資力がなくして結婚すると云ふ事は、甚だ無責任な事である、であるからして經濟的準備の出來る迄は結婚を延期し、若し何時迄も其資力がなかつたらなば何時迄も獨身するが宜しいと云ふ事を說いて居つたのでありまする、所が後來是は種々の學者に依つて反駁せられたのであります。

新マルサス論

併して千八百二十二年「フランシス、プレース」が新マルザス主義を提唱致したのでありまして、それが新マルザス論と人に持てはやされて居るのであります、是は人口を少なくすると云ふ事は、舊マルザス論と同一共通なる點でありますが、併しながら其論旨は舊マルザス論者と反對でありまして、結婚を延期したり、或は獨身生活を送るべしと云ふ樣な事は、極力反對致して居りまして、寧ろ成るべく早く結婚せよと云ふことを勸めて居るのであります、併しながら結婚を早くしても、經濟上に考慮する間は、出產を延期せよと云ふやうな事を申して居るのであります、約して極く一言にして申しますと云ふと、舊マルザス論は結婚の延期を主張し、新マルザス論は出產の延期を唱へて居るのであります、さうして新マルザス論の論者

は實際的の條件として九つを擧げて居るのでありますが、其一つは家族の生活上の安意、經濟上の問題でありまして、餘り澤山子供があつては何うも皆困るからと云ふので、家族の生活上の安意、第二は小兒生活の保障、それからして第三は家の財産上の格式保持、それから第四には、父の其の子に就いての名譽心、第五には、少數の子供に對する親の愛の集中と云ふやうな問題、第六は、婦人に餘り子が澤山あると云ふと、顏なんかゞいかなくなる、だからして婦人の體の餘り可笑しくならないやうな美容保持のため、第七は婦人の社交上に大變困るから、其の社交慾の滿足、第八奢侈追及流行慾の滿足、第九は、婦人の自尊心と云ふやうな斯う云ふ所謂婦人の解放の點からして、其條件を選び出したものでありまする、然れども、斯の如き以上の目的に依つて受胎を豫防するとか或は墮胎をすると云ふ事は、是は斷じて宥すべからざる事と思ふのであります、これを公許する時は延いて私通があるとか、淫賣が殖えるとか、風俗壞亂等を招來致しまして、勿論、國家としてさう云ふ事は許すことの出來ないものであります、又た斯う云ふ事は私の專門外でありまして、兎や角申すのではありませぬ、然し若し醫學上姙娠するとき或は姙娠を保續するときは、延ひて母の身體を失ひ、小供を損ふと云ふことが豫知せらるゝ場合には、姙娠を避け或は姙娠を中絶せしめなければならぬ、而して之れ知らず知らずの中にマルザス論を行ひ、優生學を實行する事になるのであります、優生學とは、優秀なる所の兩親を選んで優秀なる子孫を造ると云ふ一つの學説でありまして、例へて申しますと云ふと、植物でも密柑の種子の少いのを、或は全くないのを造り出すとか、馬はシャボテンが好きであるが、刺が澤山ある爲に好きなシャボテンも食べられない、故にシャボテンの刺の無いのを造り出すと云ふやうに優秀なる方向に進化せしむべき事を、研究する學説でありますが、さう云ふ事をも合せて行ふ結果になるのであります。

醫學上より新マルサスを實行する疾患

さう云ふ横道の事は止めまして、然らば如何なる病氣に受胎の豫防したら宜いかと云ふ事をお話致さうと思ふのであります、第一に結核の病氣であります、結核の

結核コッホの結核菌によると總ての病患を云ふ

病氣にも種々ありますが、人口に膾炙して居る肺結核であります、肺結核は非常に多い病氣でありますし、且つ我が國は結核國と言はれて居る程の病氣であります、さうしてこれが人を犯す所の率は甚だ多く、或る人は九十五パーセントも、或は之れ以上も犯されて居ると云ふやうな事を云つて居るが故に、結核患者に悉く受胎の防止を行へば、悉くの人にやらなければならぬのでありますが、私が今申すのは、無論斯くの如き人の受胎の防止を勸むるのではありませぬ、一般に治つて居るとか、停止して居るとか、さうして營養の甚だ佳良なるもの、さう云ふものに對しては、姙娠とか、分娩とか、乃至は產褥と云ふやうなものは餘り大なる所の危機を與ふる所の價値はありませぬ、しかしながら活動性のもの、例へば噴火山が火を吐いて居る、さうして音が聞へると云ふやうに、活動して居る熱がある、或は胸を聽けばラッセルがある、進行性のものであると云ふやうなものには、まだ著しく增惡しない時、或は姙娠が十分に進まない三ヶ月位以前のものに姙娠の中絕、例へば姙娠しないやうにするとか、姙娠したら流產すると云ふやうにすると云ふ事は、其の母體の一母親の健康を回復すると云ふ事に對して、大なる効力のあるものであります、尙其の產兒に於てもさう云ふ病氣の者が生れても結核其者は遺傳する事はないが、併し生れた所の子供は結核に對し弱き素因を有して居る者であるが故に母體を救ふ爲に、或は其の將に生れんとする所の虛弱なる者の爲に、又た國家の爲に必要なる事でありまする、最早咳は澤山出る、喀痰が澤山出る、所謂二期三期になつて居る所の結核の人に姙娠の中絕を行つても良くする程の好結果も得られないのであります、成るべく姙娠の進まない中に、或は寢汗が出るとか、或は體重が此頃は能く減ると云ふやうに、多少人から見て體の具合が惡いと云ふやうな時に行ふと云ふと、大變に効力のあるものである、無論結核の大分進んだ時に於ても、もう三ヶ月を過ぎて五ヶ月とか、七ヶ月になつて居つても、其儘姙娠の末期に至らしむるよりは、人口中絕をした方が宜しい、併しながら豫期する程の好結果は出來ないと云ふ事になるのでありますし、其外喉頭結核、腸結核と云ふものに對しては無論速に人工の中絕を行はなければならぬ。

惡阻　雄娠篇に詳述す

それからして第二には、惡阻、つはりは姙娠して誰でも殆ど四十パーセント乃至五十パーセントはこれにかゝるもので、卽ち何うも體が具合が惡い、ムカックと云ふやうな事が起りますが、それが段々昂進する、さうして食物を見てもムカック、或は脈搏が多くなると云ふやうな時には、將に惡阻として病氣が進んで居るのでありまして、それを放つて置くと云ふと、其婦人は死を免れぬのであります、それで惡阻の十パーセントから、十二パーセントは死すべきものゝあると云ふやうな事を云つて居る位で、ッハリであるから放つて置くと云ふやうな事から、段々と深い谷底に落ちて行くと云ふ狀態でありまするが故に、無論是等は姙娠の中絶を行つて母體を助けなければならぬのであります、最早精神が朦朧となりまして、恰度春霞の如く、或は夏徑畔を行く時に、モヤが徑を蔽うて居るやうに、或は妄語を言ふと云ふやうな時に於ては如何に努力をしても、其母體は片脚を棺桶に突込んで居ると云ふやうな有樣でありまするが故に、斯樣な時は其時期、最早遲くなつて居るのであります。

第三は腎臟の病氣、是も急性のものもありますし、慢性のものもありまするが、急性のものでありまして、暫くは其傾向を見なければならないのでありますが、既に腎臟に異常を起してお腹や、胸の中なんかに、水が溜つて來るとか、或は其腎臟炎のため網膜の中に出血をして一朝にして見えなくなると云ふやうな場合がありまし、さう云ふやうな場合には、人工中絶を行うて、母體を助けなければならない、或は慢性の腎臟炎はそれが再發して母體を危くする場合には、無論人工の中絶を行はなければならぬのであります、其の外母體の心臟病であります、同じ跛者なら跛者でありましても、跛者で道を歩く事が出來る―、山を登る事が出來るが、併し跛者は脚が一つしかない、其の片脚を失へば最早や道を歩く事が出來ない、山を登る事が出來ない、之れと等しく心臟病でありまして平衡卽ち調節を取つて居るときは宜敷いのでありますが、若し調節を失つておるときには姙娠せる母體の危險を救ふが爲に人工中絶を行はなければならぬ、其外神經病、精神病は遺傳する病氣でありまして、是は遺傳の病氣であるやうになつて居りますが、斯う云ふやうなものは母

體を救ふが爲に、或は生れる所の子供を救ふがために己を得ずして受胎防止、或は人工の姙娠中絶を行はなければならない一つであります、例へば具體的に申しますと云ふと、癲癇の病氣がある、或はダンスを踊るやうな病氣がある、手足の恰好を舞踏のやうに動かすからして、舞踏病と云つて居る、さう云ふ精神病には受胎を防止しなければならぬ一つであります、それからバセドウ病と云ふて、咽喉の所が非常に大きくなつて目が飛び出し、脈が多くなつて大變苦しい病氣があります、さう云ふ病氣も亦姙娠するといけないのです、或は貧血の中で惡性貧血、段々貧血が強くなる、さうして母の身を危くする、それで姙娠を豫防しなければならぬ、或は受胎を豫防しなければならぬと云ふ事になるのであります、それからして癩病、癩病も何うも是も色々遺傳病とか遺傳病でないとか云ふ說もありますが、癩病の場合にも於ても矢張遺傳病防止の一つとして、受胎を防止し、人工的姙娠の中絶を行ふと云ふ病氣なのであります、それからして、黴毒、是も矢張其病氣の一つであります、それからして、血友病是も遺傳の最も著しき一つでありますが、怪我をしましても血が止まらない、誰でも出血は止まるものでありますが、此血友病になりますと云ふと一寸怪我した時でも止まらない、其結果死ぬると云ふ事になります、遺傳の恐るべき所の病氣であるが故に新マルザス論を行ふ、脚氣も產後に大變惡くなる、それからして、日本に於ては少いが、骨盤の狹窄、凡そ骨格の病氣は、日本に於ては割合に少いのでありますが、外國に於ては隨分澤山あります、色々畸形がありまして、おいどが大きくて、分娩するのに大變都合の好い女が、之が醫學上から見て別嬪でありますが、此の骨盤が小さくて眞の產道を通つて出ないと云ふやうな不幸なる者に於ては、人工的に早期に出すとか、或は受胎を防止する事にしなければならぬ、或は子宮が後へ行儀が惡くて後方に寢て、姙娠しても、通常の位置に復らないと云ふやうな場合がある、乃ち所謂後屈子宮の箝頓と稱するものがある、かう云ふ時には恐るべき結果を來し母體の生命を危くするが故に、此病氣に對しても、母の危險を救ふ爲に、新マルザス論を行はなければならぬ一つであります、まだ〳〵數へると澤山ありますが、さう云ふやうなものに對しては受胎を豫防するのみなら

ず、場合に依つては、今申しましたやうに姙娠の末期迄も置く事が出來なく、中途にして姙娠の中絶をしなければならないことがある、如何に受胎を防止するかと云ふやうな事は、是は確實なる方法としては手術的にするより外ないのであつて、色々藥とか、交接時の方法とか言ふて居りますけれども確實なるものは、手術的に男の睪丸を取つて仕舞ふか、或は女子の喇叭管を取つて仕舞ふか、何故喇叭管を取るかと云ふと、子供の生れるのは喇叭管で精蟲と、婦人の卵とが一緒になつて受胎すると云ふのであります、それで喇叭管を取ると云ふと、子供が出來ないのであります、それであるからして、完全なる受胎の防止としては喇叭管を取る、或は去勢術を行ふ、或はエッキス光線とか、ラジウムとかに依つて去勢をする外は完全なものがないのであります、其外の方法は唯萬一を僥倖にするに過ぎぬのであります。

斯くの如く受胎防止と云ひ、子供や母の生命救濟の爲、卽ち特種なる病氣、殊に遺傳病防止の爲に斯う云ふ新マルザス論を行ふと云ふ事は必要なるに拘らず非難をなす人がないでもありませぬ、其一つ二つを申しますと、第一手段自身が反自然的のものであると、斯う申す人がありますが、然れども是等は觀察の仕方に依つては反自然的ではなく、寧ろ自然的なりと云ふを得るのであります、卽ち受胎の防止をしなければならぬと云ふ事は人智の產物でありまして、人智の進歩の結果であります、人智の發達は之れ卽ち自然的のものであります、第二縱し其の手段が反自然的のものであると致しましても、他方に其目的を承認すると云ふ事になりましたならば、其反自然的のものも亦承認しなければならぬのは、明なる事であります、卽ち遺傳病撲滅と云ふ事は、社會上正當なる所の事である、それであるが故に受胎を豫防する、或は墮胎をすると云ふ事でありましたならば、恰度雷が自然的に落ちて人を傷ける、或は財を瑕つける、是は自然でありますが、或は避雷針を立て、未然に防ぐと云ふ事が人智の進歩の結果であるが如きものであります、さう云ふ事でありますからして、人智の進歩の結果さう云ふ事になつたと云ふ事は、寧ろ文明進歩の傲りとしなければならぬのであります。

第三にさう云ふ手段と云ふものは道義に反するものである、受胎豫防をなすと云

ふ事は、性交の結果を欲せざるが故に道義上の原則に反すると云ふ事を云ふ人があります、併しながら此目的が承認せられまして、遺傳病が社會上不良なものであると云ふて、新マルザス論を行ふ事になりますならば其新マルザス論者こそ、却つて性交の結果を考慮し　其れより不良の結果生ぜず、良好の結果の生ぜん事を欲するものなりと答ふることを得ますし、此論者こそ却つて道義的に行動して居るものだと云ふ事が出來ると斯う信ずる事が出來るものであります。

第四に受胎豫防と云ふものは、段々後の人間となるべき者を、なくなす事になりますが故に、是は殺人に等しい、是は反道義的のものであると申す人がありまするが、併し精虫は個性を有してない者でありますからして、殺人なんかの謗を受けるものでない事は明なるものであります。

尙第五番に斯くの如き方法は健康に反する所のものであると云ふ事を言つて、非難を與ふる所の者がありまするが、併しながら今日の醫學は長足の進歩を致しまして如何に受胎を防止する所の術を施しても、或は人工的に姙娠の中絶的の手術を致しましても、何等人命に危害を與ふる所のものではありませぬ。

要するに私が今迄お話致しました所の事柄は産兒制限それ自身は、或は我國の現狀として、兎に角我國の狀態として、人口は非常に過剩になりつゝある、之を如何にして制限しなければならぬかと云ふ事を研究しなければならぬ問題でありますが、併しながら、唯經濟上とか婦人解放と云ふ事に依つて、産兒制限をすると云ふ事は、反對するものであります。然しながら之が醫學上母體の爲又た是れから生れる所の子孫の爲に、受胎を禁じなければならぬ、人工的に姙娠の中絶をせざるべからざるものあるを說くのでありまして、其目的の結果として來る新マルザス論を認むるものであります。

生殖力

凡そ夫婦間幾人の兒女を得るを以て有理とするやと云ふに、無論日本の婦人と、西洋の婦人とは民族や、體質や、生活狀態が異なつて居るから一樣には行かぬのであるが、「ヘガール」は婦人生殖力旺盛な時代を二十歲より四十歲までとし、各分

娩間隔時を二年半とする時は、二十年間に大凡そ八兒を得べしと云つて居る、「ダンカン」は婦人生殖力の全時代を通じて、通常十人の子女を擧くることを得べしと云つてゐる、されども大凡そ全姙娠間は大陽曆の九ヶ月を要し、更に九ヶ月乃至十二ヶ月を新生兒の哺乳に要すとし、其後六ヶ月より九ヶ月間は婦人の恢復に要する時日だとし、此等を通算するときは、次ぎの姙娠を來たすまでには必ず二年半の期間を要することが出來る、且つ生殖力は、夫婦の年齢及び健康に關係し、其他職業、住所、社會的關係等で左右せらるゝものである、從つて各人一律に論ずべからざるものである、今其關係による統計を左に示す。

されども一般に勞働社會では常に子女の多きに苦んでおる、蓋し身體の健全な結果にもよるべしと雖も、亦不遠慮に性慾力强く、酒類を暴飲し、住室缺乏等も亦與つて大なる力あるべしと思はる。

母親の年齢と姙娠との關係

母親の年齢と、分娩をした數の多寡を試みに獨逸の伯林で調査されたところを引用すると、次のやうな關係になつてゐる。

母親の年齢	分娩時の數
十五歳以下	九人
十六歳から二十歳	二千二百四十八人
二十一歳から二十五歳	一萬四千百九十四人
二十六歳から三十歳	一萬五千八百二十人
三十一歳から三十五歳	一萬九百九十人
三十六歳から四十五歳	千八百二十九人
四十六歳から五十歳	百三十八人
五十歳以上	四人

卽ち二十歳から三十歳までの婦人が一ばんよく出產することになつて居る、珍らしいことには五十歳以上の年をとつた老婦人で四人も出產してゐることである。

次にベーク氏の調査した所に依れば、伯林では平均百人中四人〇八の割合で出產

することになつて居るが、更に之を出産した數の多少を表に依つて調べて見ると。

出産した子供の數	出産した母親の數
一人	一萬二千三百二十七人
二人	一萬百三十七人
三人	六千七百二十一人
四人	四千六百六十七人
五人	三千五十七人
六人	千九百八十六人
七人	千三百六十七人
八人	九百六十九人
九人	六百十二人
十人	四百三十七人
十一人	二百五十五人
十二人	百九十六人
十三人	百二十六人
十四人	八十人
十五人	四十二人
十六人	二十九人
十七人	十一人
十八人	八人
十九人	五人
二十人	五人

この表に依つて見ると、一人から二人まで子供を生んだ婦人が一ばん多く、次は順々に少なくなつて居る、更に之を千人に就ての比率を出して見ると、一人から四人まで子供を生んだ婦人は、千人中に七十八人四〇三パーセントとなり、五人から十人まで子供を生んだ婦人は、千人に就て十九人五一九パーセントとなり、十一人

から二十人まで子供を生んだ婦人は、千人中二人〇四五パーセントとなる、尚例外として二十九人子供を生んだ婦人が一人ある、日本では一人で二十九人も子供を生んだ婦人は一寸例がないかも知れないが、たゞ〳〵其の生殖力の旺盛なことに驚くのである、産兒制限などと云ふ議論を立ててゐるサンガー夫人に、こんな話を聽せたら吃驚して眼を廻して倒れるかも知れない。

今度は結婚してから、始めてお産をするのに如何程の年月を要するか、之を更に言葉を換へて云へば結婚してから何年目に子供を持つやうになるかと云ふことを、私が以前京都大學で千百十六人の婦人に就て調べたところに依ると。

結婚後十ヶ月目内に子供を儲けた婦人		九十七人
同　十一ヶ月より十五ヶ月以内		三百四十三人
同　十六ヶ月より滿二年以内		三百十一人
同　滿二年より滿三年以内		百七十一人
同　滿三年より五年以内		百十七人
同　滿五年以上		七十七人

であつて、百人の中約七十人までは結婚後二年以内に第一子を得たことになつて居り、滿三年以内に第一子を得た婦人は、百人中八十五人で、殆ど十中八九人までは、三年以内に初生兒を儲ける婦人が多いことになつてゐる、從つて三年も經つてなほ子供の出來ない婦人は、妊娠の可能性が甚だ少いといはなければならぬ。

次に同じく千百十六人の婦人で、結婚後始めて出産した年の順を調べて見ると。

結婚後　一年	二百六十九人	同　二年　四百九十二人
同　三年	百七十一人	同　四年　七十一人
同　五年	四十六人	同　六年　三十人
同　七年	十五人	同　八年　八人
同　九年	六人	同　十年　四人
同　十一年	三人	同　十二年　一人

之れに依つて見ると、結婚後一年を經てお産をする婦人が一ばん多くて、爾後年

を經るに從つて其の數を減じて居る、更に結婚した年齢と、始めてお產した婦人との關係を調べて見ると、之も千百十六人の婦人に就て調べた所によると、

結婚年齢		
十五歳より廿歳まで（六百八十一人）	四十一人	十ケ月内
結婚年齢	三年内	十五ケ月内
十五歳より廿歳まで（六百八十一人）	百十人	百七十六人
結婚年齢	十ケ月内	八十一人
廿一歳より廿五歳まで（三百九人）	四十一人	八十八人
結婚年齢	三年内	五年内
廿一歳より廿五歳まで（三百九人）	四十五人	二十七人
結婚年齢	十ケ月内	十五ケ月内
廿六歳より卅二歳まで（七十四人）	五人	十八人
結婚年齢	三年内	五年内

結婚年齢		
十五歳より廿歳まで（六百八十一人）	四十一人	二年内
結婚年齢	三年内	五年以上
十五歳より廿歳まで（六百八十一人）	百十人	六十五人
結婚年齢	十ケ月内	二年内
廿一歳より廿五歳まで（三百九人）	四十一人	九十六人
結婚年齢	三年内	五年以上
廿一歳より廿五歳まで（三百九人）	四十五人	十二人
結婚年齢	十ケ月内	二年内
廿六歳より卅二歳まで（七十四人）	五人	九人
結婚年齢	三年内	五年以上

廿六歳より卅二歳まで（七十四人）	四人	三人	一人

つまりこの表に依つて見ると、二十一歳より二十五歳までに結婚したものは其の他のものに比し第一子を擧ぐるに最も短かき間隔であり、且つ最も多く小供を持つてゐる事になつて居る、これと反對に餘り遲く結婚する時は、子供の生れる數がグッと減ってゐることが解る。

それから今一つは、最初の子供が生れてから、次の子供の生れるまでの間隔は、何の位の年月を要してゐるかと云ふことを調べて見るときは、即ち結婚後の年月を以て示すと、

生兒數	一	二	三	四	五	六	七	八	九
年月	三、六	三、四八	六、七八	七、八三	九、八八	一二、四三	一三、三一	一四、一一	一六、八一

この表の觀方を說明すると、最初の子供の生れたのが、結婚してから、十二ケ月七八、二人目の子供が結婚してから三十四ケ月四八、三人目が五十六ケ月七八と云ふ風に見るのである、つまり結婚してから九人目の子供を生むまでに、百六十六ケ

月八二――卽ち十三年九ヶ月を要したことになるのであつて、この子供を生んだ出産年月を九人に割當た平均年月の間隔は、次ぎから次の子供を生むまでに十九ヶ月二五を要したことになつて居る。

更年期の衛生

月經の生理で、已に月經の閉止或は終息による局所的、或は全身症狀の一般を述べた、殊に婦人の多數に於ては、更年期に入つたとて、直に生殖作用が消失するものでない、されど四十五乃至五十歳に至り、その更年期に入らんとする時は、月經は著しく不規則となり、或は直に微少となり、或は直に激增し、時として又間歇時短縮する等のことがある、且つ體力、能力、食慾、睡眠、情調に變化を起し、脂肪過多のため體型を害するものである、この時代には斯く全身障害を起すのみならず、屢々惡性腫瘍（子宮、乳腺、卵巢等の癌）の發生することがあるにより、人々は危險期と稱して最も警戒すべき時期としておるのである、故に若し、この期に月經激增するが、或は早期に來潮するか、且つ屢々反覆せらるゝ出血などある時直に醫診を受くべきである、更年期出血なりと考へし間に、既に子宮癌の初期なることは事實甚だ多いことである、又若しこの時代の婦人で、長く已に月經閉止しておつたにかゝわらず、再び不意に出血なしたる時は、之れをもつて月經の再來潮なりと考ふることなく、先づ出血の初めに於て直に惡性腫瘍の發生なりと考ふるが宜しい、かくの如き更年期後の出血を以て、月經の再來潮なりと考へ、永く手を下すことなく、衰弱するに至り、初めて失血及び惡臭、白帶下、疼痛等の苦痛を以て、醫に諮るも已に遲く、あたら死を待つに過ぎざる事がある。

斯くの如きことは又乳腺癌にも見ることがある、最も乳腺に結節或は硬結生ずることあるも、亦無害のことも多いのであるが、されど更年期になつて初めて生じ、又は以前より存在せしもの急に生長し、疼痛をさへ加ふるに至れば、直ちに醫診を受けて切除することを躊躇してはならぬ。

妄想姙娠

時として月經の閉止と共に下腹部に緊滿の感、溫熱の感、及び乳腺の輕度な腫脹

を來たすことがある、されど之れに加ふるに、若し下腹部腹圍の增加、（恰も脂肪過多或はこの時代に屢々見る如く腸內瓦斯のための鼓腸のため）を來たす時は、遂に姙娠なりと誤解することがある、此等の妄想は、若し腫脹したる乳腺より、一、二滴の液體を分泌し、或は壓出した時は、益々其の感を深ふするに至るものである、此等の婦人は五ヶ月以上となれば、胎兒運動をも自覺することがある、されども事實こは神經過敏の結果、消化の際の生理的蠕動を自覺するに過ぎざること多く、若し適當なる時期に於て、醫師之れが蒙を啓くにあらざれば、遂に分娩に對する準備を具へ、姙娠末期を算へて陣痛樣疼痛を起すことがある、されども亦かくの如き婦人は、その妄想たるを知るや、遂に憂鬱症となることがある、時として又若く、且つ生殖作用旺んなる頃の婦人でも、かくの如き妄想を見ることがある、而し此等の婦人は多くはヒステリー性のもので、姙娠を熱望せるもの、若しくは姙娠を恐怖せるものに來るものである。

上述の種々の更年期障害は、肉體的及び精神的養生により、多少之れを除くことを得るもので、卽ち生活法及び營養を調和し、殊に過食を避け、一定の規則正しき勞働を嚴守し、其他休養と運動とを適時に交替し、食物消化に注意し、精神的及び肉體的に强き刺戟劑（濃厚なる茶又は珈琲、酒類）を遠ざけ、溫浴、冷水摩擦、水浴治療法等により皮膚の養生に注意し、若し不快なる徵候あるときは、直に醫診を受けて、危憂を消散せしめ、或は早期に治療の道を講ずべきである。

更年期に於ける脂肪過多症

更年期に於ては、著しき脂肪の沈着を見ることがある、卽ち皮下組織、腹部臟器、又は時として心臟などに脂の沈着を見ることがある、而して脂肪過多あるときは、一方では心臟の作用を妨げ喘息樣の障害を起し、肝臟の腫脹、消化不良等を起すことがある、他方では又身體肥大のため、精神及び肉體的遲鈍を來し、爲めに憂鬱となることがある、注意すべきことは、婦人が其美を衒はんが爲め、脂肪過多のため身體の肥大せるを隱蔽せんと務め、强ひて身體を緊搏する等のことをなすべからざることである、これがため種々の恐るべき障害を起すことがある。

脂肪除去法

過多の脂肪を除去せんと志さば、第一該婦人は大なる決心と忍耐とを要するもので、先づ液體を極少量とし、澱粉、及び脂肪を排斥し、窒素含有物を不充分にして、故意に飢餓せしめなければならぬ、又斯くの如き婦人は務めて旅行をなし、蒸汽浴に浴し、自轉車に乘り、一時間以上テニス、或は水泳をなし、又は徒歩競爭などをなし、肉體的努力を持續するときは偉功を奏することがある、されども時として、之れがため貧血、神經過敏、心臟衰弱などを起す危險があるから、注意を要する。

およそ中庸を得ることは、又本治療法にも必要なることとなるや無論のことで、貧血でなく、心臟健常なる脂肪過多の婦人であれば、通常更年期には血壓昂進し、或は一時的鬱血の感を來し易きものである、此等の人は醫師の身體精診の結果、郊外で相當の運動をなし、或はマッサージ、體操等を溫泉浴と併用し、或は興奮し易き體質であれば、冷泉を用ひ、或は注意周到にして水治療法を行ふを要することがある、されど又貧血にして脂肪過多の人であれば、心臟の機能及び脈搏弱り、時々結滯して、卒倒を起すことあれば、かくの如き人には、寧ろ强烈にして增血力ある食餌を選び、精神上及び肉體上の休養をなし、總ての努力及び興奮を嚴禁し、高地に轉地するが宜しき事がある。

脂肪除去の藥劑は、種々あれどこれ丈けにて偉功を奏するものはない。

月經閉止したとて、直に生殖器は完全なる退行機能に達したものと云ふべからず、六十歳で初めて全く萎縮し去るものである、卽ちその年齡に到れば生殖器は再び小兒狀態に復歸するものである、從つてこの時に至つて腫瘍或は炎性を起した時は、直に醫診を乞はなければ、大事となるものである。

第四章　婦人病一般の豫防及養生

本章を述べんには、勢ひ婦人病の概念を說かなければならぬ、されど凡百の婦人病を述べんは本書の目的でない、玆を以て最も一般に知られた疾病を選びて概說し、併せて其豫防法及び養生法の一般を述べんとするのである。

婦人病直接の原因

婦人疾病の原因となり、且つ直接に障害を惹き起すものを大別して八つとする、第一は身體の過度の勞働、第二產後の不養生、第三生殖器の不潔殊に月經時の不攝生、第四有害の生活法、第五房事過度、第六交接より來る傳染、第七手淫の結果、第八一般の疾病殊に腫瘍である。

若年の勞働過度

十四歲乃至十六歲の發育時に於ける過度の勞働、殊に營養不充分で睡眠不足せる時は、全身の重症(例へば結核、惡性貧血等)を起すのみならず、又身體の發育を阻害して、長く小兒期に止まらしめ、從て狹窄骨盤や又は生殖器の發育不全等を來たすものである、實に月經の全く來潮せないこと、或は甚だ遲延せること、又は甚だ貧弱で且つ不規則に來潮すること、若しくは不姙なること等は早期に身體の過勞の結果なることが多いのである。

春期發動期の過勞

春機發動期卽ち生殖器成熟期で、筋肉殊に下肢及び骨盤の過勞長く連續するときは、從來健全であつたものでも、漸次骨盤內臟器の鬱血を來たし、慢性の腫脹、子宮の炎衝、及び加答兒を惹き起すことがある。

產褥時の勞働

產褥中未だ全く復舊せない子宮で、且つ大きく、重き時、しかも結締織、腹膜皺襞、腟、會陰等にて固定せるこれらのものが弛緩してゐる時、特に會陰破裂あつて、其作用を充分にすることを得ざる時、これらの時身體の大なる働作をなすこと

子宮下垂
子宮後垂
子宮後轉
これらは總て後述す

ある時は、腟及び子宮の下垂或ひは飜轉、子宮後屈及び後轉を來たす事がある、且つ子宮及び腟の位置異常は、膀胱及び直腸の充盈により、又腹壁及び腹膜の弛緩により一層其の成立を容易ならしむるものである。

子宮位置異常あるもの産褥時の注意

俗間に子宮後屈又は下垂を患ふるものも、新に姙娠する時は自然に治癒するものなりと說くものあれど、決してさることなく、多くは再び産褥時となつて子宮は位置の異常を來たすものである、而して産褥時之れを豫防せんには、殊に分娩及び産褥時の消毒的介助を嚴にして發熱を防ぎ、骨盤腹膜及び骨盤結締織等の炎衝を防ぎて、其瘢痕萎縮により位置の異常を起すことなからしめ、會陰や腟、及び子宮口裂傷の存在するときは直に縫合せなければならぬ、加之なるべく初生兒に自ら授乳せしめ、排尿及排便に注意し、下腹部には少なくとも四週間腹帶をなし、殊に甚だしき脂肪腹又は懸垂腹である時は一層强く腹帶を纏絡せしめなければならぬ、しかして大凡そ六週後になつたならば生殖器の復古作用及び位置の關係を確むるため醫診を乞ふべきで、若しこの時已に生殖器の後屈を認めたならば、先づ初めに子宮環（一名ペッサリウム）を以て正位に復せしむる樣試むべきである。

最もペッサリウムは數ヶ月に渉り、之れを施さなければ効果なく、一方では生殖器臓器の復古作用を促進せしむるため食餌的及び藥餌的療養をなし、子宮の固定を强固にし、以て正位に歸らしむるに勉めなければならぬ、されども若し以前より著しき會陰及び骨盤底の龜裂があり、爲めに腟口廣く、弛緩し、前腟壁の大部下垂し、且つ膀胱や直腸の一部まで懸垂せるが如き時には、子宮環を挿入するも恢復せらるゝこと難い、又年を老いるに從ひ、常に腟壁の大部又は子宮をも下垂することがある、これらの時にも亦子宮環を以て成効せしむることは出來ない、およそ子宮環を挿入するときは腟分泌物は多くなり、且つ分泌物は容易に分解し又は腟の炎衝を起し易きものであるから、之れを豫防するため、日に數回洗滌せなければならぬ、而して三乃至六ヶ月間は常に醫診により、子宮の正しく整復せるや否やを檢し、且つ時々交換するをよろしとするのである、されどこれ等の處置は極めて人工的で、且

つ不充分の方法であるから、寧ろ容易で、且つ何等の危險を伴はざる手術（腟會陰整形術、腟下垂整形手術、子宮後屈手術等）を行ふを優れる方法とするのである。

發育時、月經時及び產褥時中身體の過勞をなす時に、種々障害を與ふるものなることは前に述べた通りである、されど少しの滑轉、或は僅微の墜落、衝突等は必ずしも生殖器の健康を害するものではない、甞て輕度の墜落後數日にして子宮出血あつた人が、直に墜落を以て其原因なりと誤信しておつたのであるが、事實子宮口より腟口に懸垂せるポリープよりの出血であつたと言ふ滑稽事すらあるのである。

有害の生活法

婦人疾患の多くの原因となる有害の生活法としては第一にモルフキン中毒を數へなければならぬ、されど幸に我國では歐米に比しこの中毒が少ない、この中毒にかゝれるものは高度の月經閉止を伴ふものである、其の他神經を害する濃厚なる珈琲、茶、酒類、煙草（ニコチン）も有害であつて、就中不適當な衣服を用ふるは最もあしき結果を招くものである、例へば歐米婦人の用ふるコルセットの如く、我國でも廣帶を緊搏するは婦人の衛生に有害なるものである。

房事過度も亦婦人病の原因たる事は已に前述せるか如きものである。

腟炎より漸次上部に移行して子宮、喇叭管、骨盤腹膜、骨盤結締織等を侵かす原因中、ペッサリウムを不適當なる方法に使用して起ることがある、又徒らに坊間販賣する腟球を腟内に挿入して之れが原因となることがある、又月經中腟内に挿入した綿花が、週餘に渉り殘留して、疾病の原因たることがある。

交接により來る傳染

交接による傳染の豫防は、男子をして公德心を起さしめ、自制的に警戒するを以て第一とするのであつて、他方傳染源たる娼妓を取締るは公衆衛生の必ず行はなければならぬ事である、されど其私娼より來るものは、之れを取締ること困難である、男子既に感染した後は專ら自己の良心の取締りに賴るより外はない。

交接により傳染すべき疾患は主として、梅毒及び淋病である、之れを總稱して花柳病と云ふ、これ花柳の巷に出入するものの罹る疾患なるを以て其名ある所以であ

る、故に其病菌始めは娼婦の生殖器にあり、遂に男子の家庭を侵すものである。

以下極めて簡單に婦人の罹り易き生殖器病に就きて、其概念を說き、併せて其衞生法及處置を述べんとするのである。

生殖器結核

婦人生殖器の結核は、全身結核の一部たること多く、其他又有名なる「コッホ」の發見による結核菌が腸管壁を通過して腹膜に達し、輸卵管、及び其他の部を侵して起ることもあり、又稀れに結核菌が外界より直接輸送せらるゝことがある、例へば結核を有する夫と交接したる時、又は醫師或は產婆等が不潔なる手指にて診察し、爲めに結核菌を侵入せしむることがある、又產褥中に急性生殖器結核を起すことがある、此等のときには腟、子宮、輸卵管、卵巢、腹膜等を侵し、遂に重篤なる局所及び全身症狀を起すことがある。

結核の診斷は無論醫師のなすべきことで、其の確證は、臨床的徵候と各臟器及び排泄物（帶下、膿汁）中に「ヴキルシャウ」により詳述せられた結核か、或は「コッホ」により發見せられた結核菌を證認することである、殊に結核の素因を有するもの、肺結核病者或は幼時腺病質たりしものなどに帶下、下腹部の疼痛、月經障害及び月經の不規則、日晡熱、羸瘦衰弱著しきことなど存する時は生殖器結核であらざるかを疑ふて可なる位である。

生殖器結核の豫防としては結核を有するものと結婚せざることである、而して若し夫婦の中、何れか結核に侵された際には、なるべく交接を避くるをよろしとす、既に結核にあらざるやを疑ふものは無論醫師の診察を受くべきものなれど、產褥中などには、結核を有する醫師、又は產婆にて自らの抵抗著く低下せるときなどにて見得るが如き外部の結核竈は、早期に除去する時は永久に治癒することがある、殊に營養佳良で肺結核を病まざるものに於ては、殊にそうである。

婦人の神經病

婦人生殖器に特有なる神經性病的現象は、甚だ廣く蔓延せるものであつて、從

つて多數の患者にあつては、其等の徵候が主訴となり、却つて生殖器の徵候が等閑にせらるること多ひ樣である、而して婦人病と稱するものは、其成立が生殖器の特別なる狀態及び其機能に關係すること多く、從つて生殖生涯の各期卽ち發育、成熟及び更年期を通じて發するものである、最も神經性の遺傳あるものや、精神の過勞或は早熟等のものでは、既に小兒期に著しく、神經過敏となれるものもある、又老年期に達したものや、甚だしきは總ての刺戟を消失せる頃にも、上述の如き容態を見る事がある。

從來臟器に何等認むべき解剖的變化なきもので、苦痛を訴ふる徵候ある時は、之れ等の種々の神經性障害をヒステリーなる總稱で包含せしめて、子宮より發生する刺戟による神經現象だとしておつたのである、已に昔「ヒポクラテス」はヒステリーの各型を詳說し、殊に有名なヒステリー球卽ち恰も固形物或は球形のものが、停留して　咽頭及び頸部を咬窄するの感を起さしむることとなるを說述してゐる、然るに今日に於てはヒステリーは獨り女子のみでなく男子及び小兒にも存在し且つ神經系統の病的變化あるものとせられ、余程ヒステリーの解釋を異にするに至つたのである、而して其說明に至つては多種多樣であるが、今日猶婦人生殖器に特有なる神經性障害だとし、神經系統の此等の現象を、婦人生殖器の疾患を發足點とし、この刺戟源より神經系を沿ふて體內種々の臟器（例之咽頭、胃、心臟、眼等）に傳達するものなりと說明せる學者（主として婦人科醫）があり、之れに反して他の學者（多くは神經科醫）は生殖器疾患は毫も神經障害を惹き起すものでなく、只各婦人は生殖器及び其機能を感覺に於て、或は多く之れを認め、或は毫も之れを認めないことがあり、從つて前者に於ては、遠隔せる部位に感ずる障害をも、故意に生殖器疾患と連絡せしむるに過ぎないものであると說いてゐる。

要するに各學者はヒステリー性のものを以て、一の條理整然たる疾病とせず、徒らに苦痛を叫び、不條理に苦しむものだと言ふ點は一致せる處である、されど之れを治癒するに當り、神經性ヒステリー徵候と共に生殖器疾患存するときは、局所的と同時に全身的療法を行ふときには、兩症狀は共に直ちに消失するものなること

は、吾人の經驗により常に見る所である、されども已に時日を經過すること久しく、且つ神經症狀獨立せるが如き觀あるときは、生殖器疾患の除去のみを以て、功を奏せないことも經驗上明かなことである。

今神經病を「フロインド」に從ひ三大別とする時は、交感神經叢、腦、脊髓の三系統に別つことが出來る、而して上の三系統にてヒステリー症狀を述ぶれば下の如きものである。

交感神經系に屬するもの

交感神經系統では、第一胃腸の規則正しき神經性疼痛である、卽ち胃の臟器的疾患たるを證し得ざるものでは神經性胃痛であるとせなければならぬ、又運動障害では咽頭より肛門に達する間の消化管痙攣性收縮、咽頭及び食道筋肉の痙攣により起るヒステリー球などの如きものである、其他嘈囃、吃逆等も之れに屬するものである、興奮狀態にあるものでは殊に消化器腺の分泌障碍を起すもの最も多く、唾液增加、嘈囃、食慾缺乏などの如きである、臟器筋肉の麻痺を起すときは胃、腸等の膨大を來たすが如きことがある、兎に角交感神經のヒステリー徵候として數ふべきものは、胃痙攣、絞扼、嘔吐、咽頭痙攣、唾液流出、酸成生、食慾缺乏、鼓腸、神經性嗄聲、神經性咳嗽、神經性喘息、心鼓動の過速或は不規則、心痙攣等である、其他所謂痙攣尿と稱するもの、乃ち攣痙發作後、稀薄で水樣無色尿を多量分泌するもの、又之れに屬するものである。

脊髓神經系に屬するもの

脊髓神經系統より發する症狀としては、普通脊柱の一定部位より初まり、其疼痛は神經系統を傳ふて軀幹の半球を包圍し、頸神經痛、肋間神經痛、座骨神經痛等を起す、又關節神經痛を起し、爲めに眞の關節病と誤まることさへある、月經直前、及び月經中の乳腺痛及び尾骶骨痛も亦之れに屬するものである、およそ感覺神經の刺戟現象に次ぎて來るものは痲痺症狀であつて、卽ち身體各部位に於ける感覺消失、或は反對感覺等を起し、種々の部位、種々の度の痙攣を起し、遂に有名なるヒステリー性痲痺を來すことがある、時として、年尙若き一婦人が、腕掛け椅子に乘り廻

り、一歩も歩行し得ざりしもの、一旦不意に起りたる精神大感動或は醫師の暗示により、急に再び歩行し得ることある實例は人々の見る所のものである。

腦神經系に屬するもの

腦神經系統のヒステリー症狀としては、痙攣性顔面神經痛、半頭痛、種々の頭痛、視覺、聽覺、臭覺等の反對感覺、特異的食慾、笑或は啼泣痙攣、全身不快の感、不眠、惡夢、興奮、知方の減少、幻覺等之れに屬するもので、此等の徴候增進するときは、遂に全く腦病と區別し難くなることがある。

實に上述の徴候に加ふるに婦人科的症狀例へば月經障害、帶下、骨盤臟器內の疼痛、膀胱の障害等あるときは玆に所謂婦人病、血の道病となるものである。

ヒステリーの素因は既に小兒時代に存するもので、殊に遺傳、精神過勞、早期春情催起、惡性貧血、腺病質なるものは、これに罹り易きものである、卽ち發育時代に達するや、昂進せる興奮は益〻刺戟せらるゝもので、遺傳性あるものなどは婚嫁期となるも、結婚せざるを理想とするのである、これ其子孫を顧慮すること又一の大なる理由である、然るに妊娠するや、神經性婦人病は治癒すべしとの主意により婚姻せしむるか如きは、一種の誤解に基くもので、古來ヒステリーは生殖慾不充分なるがため、換言すれば兒女を得ざるがため起るものとせられしためである、されども事實妊娠するや、其の神經症狀は治癒せざるのみならず、興奮せる神經系統をして、益〻增惡せしむるものである、例へば遂に妊娠性精神病となり、或は妊娠性舞踏病、妊娠性癲癇をさへ起すことがある。

梅毒

梅毒は「シャウデン」の發見による一種特異の黴菌「スピロペータ、パリダ」より發する疾病でありまして、主として交接により傳染するものである、俗に梅毒淋毒及び軟性下疳を花柳病と云ふのであつて、此等は婦人が放逸な夫と結婚した時發するもので、婦人が自己の品行によりて、發病すると云ふ事は殆んど絶無である、顧みれば生命の源流に毒を注ぐ者は唯々此病のみと云つて宜しい、愛の甘き泉を毒して、苦ましむる者亦此病あるのみである、實に人の種子を其成らんとするに殺し、

又窃に其種子の中に伏して害毒を後裔に及ぼすものである、和樂幸福なるべき家庭團欒の圏内に闖入して、子を親に奪ひ、最も神聖平和なるべき、人倫の紐を寸斷するのである、誠に痛心に堪へざる所である、而かも吾人の經驗による時は、本病の蔓延は年と共に甚しからんとしてゐる、將に憂國の子女の戒心すべきことである。

徵候　俗に本症の經過を別ちて三つとし、第一期は傳染後七日乃至二週間で、局部に一の小なる潰瘍を生ずる期間を云ふのであつて、潰瘍の部は甚だ硬く、その太さは米粒乃至指頭大に達する、而して鼠蹊腺は無痛に腫大して居る、第二期は六週乃至八週の間を云ひ、病毒全身に蔓延し、鼠蹊部の淋巴腺のみならず、頸部、腋窩等の淋巴腺も亦腫張する、而して頭髪は脱毛し、皮膚には銅赤色の薔薇疹を生じ、嗄聲、頭痛、骨痛、筋痛、關節痛等存す、要するに此期は皮膚及び粘膜の變化であつて、傳染せしむべき危險最も著しい、實に他人に傳染せしむる許りでなく、又其子孫にも遺傳するものである、若しその子女梅毒を遺傳するときは、多くは流産又は早産をなして、姙娠の中絶せらるゝことが多い、通常慣習性流早産とて、數度引續き流、早産をなすものは多くは梅毒を疾めるものである、假令嘗て梅毒にかゝりたることなしと自認するものでも血液檢査（ワッセルマン反應）をなすときは、多くは梅毒を證明するものである、第三期は病膏肓に入りたる時期を云ふものであつて、體内各臓器の組織を侵すのである、殊に腦脊髄を襲ふときは、種々の精神、神經病を起すものである。

養生　不幸にして夫が梅毒を有し、配偶者又之れに罹つた時には、速に醫療を乞はなければならぬ、耻醜の結果、種々俗間の賣藥又は迷信により、治療の期を失するもの甚だ多き事實がある、殊に慣習性流、早産のものは醫治により、速にその惡癖を除き、以後健全なる子孫を生産せしむることは、甚だ屢々吾人の經驗する所である、若し梅毒にかゝりたる儘、子女を分娩した時は必ず母親自ら授乳せしめなければならぬ、他の健全な乳母の乳汁を與ふるも、生育するものでない、却て乳兒の梅毒を乳母に傳染せしむる害がある、一家内に該患者ありたるときは食器、手拭等を嚴重に區別して決して混同せしめてはならぬ、歐洲の或る國では梅毒に罹つた時

は、假令病患癒ゆとも、四、五年間は結婚せないと云ふ事である、最も推奨に足ることである。

淋疾

淋疾も亦、殆んど總て交接によりて傳染する疾患で、西暦一千八百七十九年「ナイセル」により發見せられた、特有なる淋菌により起るものである、而して淋菌は、婦人にありては腟、子宮などの生殖器を侵すこと、尿道、膀胱等の泌尿器を侵すことの二様がある。

若し子宮内膜や腟が淋菌に侵さるゝときは、著しく帶下を増加し、且つ其の色は無色乳様又は綠黄色の粘液を分泌する、而かも其量多きため陰部は常に濕潤し、子宮口及び腟の粘膜は腐蝕して赤色を呈し、腟の表面は粗造で顆粒狀をなしてゐる。

淋菌が泌尿器乃ち尿道乃至膀胱を侵かすときは所謂尿道加答兒又は膀胱加答兒を起す。

尿道加答兒、膀胱加答兒

およそ膀胱加答兒、又は尿道加答兒は、俗にショウカチ病と稱し、主として淋菌により發する疾患である、其他葡萄狀球菌、連鎖狀球菌、大腸桿菌、結核菌などで膀胱加答兒を起すことあるも、淋菌よりは寧ろ稀れなる事である。

徵候　淋毒を有するものと交接した後、二、三日で尿道少しく痒く、遂に排尿時に疼痛を覺へ、尿遺殘の感を起し、尿意頻數、時として膿或は血液を漏し、病重き時は全身傳染を起し、發熱し、又屢々各關節炎を起すことがある。

養生　淋毒性のもので、殊に膿の出づるものなる時は、排尿後に、手など充分に洗滌し、眼に附着せしむるが如きことあつてはならぬ、從つて手拭、洗面器等も各別にするを必要とする、又交接を禁じ、小兒と同衾してはならぬ、これ小兒殊に女兒等に傳染せしめ、外陰部腟炎等を起さしむることあるからである、總て本病にかゝりたる時は絶對的安靜を要し、若し血液出づる時は膀胱部に氷嚢法を施し、飲食物は刺戟性の辛さ物、酸き物、酒等を禁じ、又脂肪に富みたるものを避けて、淡泊

のものを撰ばねばならぬ、本病の如きは養生不良なるため、數月、或は數年病苦に惱む者であるから、病の初期に於て特に注意を要する、勿論醫療を要するや明かである。

喇叭管、卵巣炎

喇叭管炎は喇叭管の炎症で、卵巣炎は卵巣の炎性疾患である、されど各別々に來ることは少なく、多くは共に侵されて子宮附屬器炎となれることが多い、本病も亦婦人に多き疾患である。

原因　淋病の黴菌によること最も多く、十中八、九盡く然りと云つてよい位である、而して他の一部の原因をなすものは連鎖狀球菌、大腸桿菌、結核菌等により來るものである、兎に角最も多きは淋毒を有する夫より傳染するものである、けれども其他營養不良のもの、喇叭管位置異常、傳染病、殊に月經時の不攝生のため本症を起すものも亦少なしとせない。

徵候　本病にも種々の病型がある、一律を以て說明することを得ざるものであるが、急性のものでは發熱三十八度より時として四十度に達することがある、下腹部には劇痛を訴へ、惡心、嘔吐を催ふし、食慾不進となり、頭痛、眩暈を來たすこと珍らしくない、且つ便通、利尿時にも疼痛を感じ、全身症狀甚だあしし、幸ひにして醫療効を奏して急性時代を經過しても、慢性となり、下腹部の鈍痛、月經時の障害、兩下肢牽引の感等を殘留し、數月、數年に涉りて、病苦に慨くことがある、殊に不快なる結果は不姙となり、一家團欒の樂しみを享くることを得ざる點である。

養生　急性時には嚴重に平臥を守り、下腹部に氷囊を貼し、勉めて精神の安慰を計り、消化し易く、營養多き食物、殊に發熱時には流動食例へば牛乳、粥、スープ等を選み、解熱の後には豆腐、鱈、鰈、小鯛、細挫牛肉の如きものを食さしむ、刺戟性の飲食物、例へば酒類、辛き物、脂肪に富める魚肉を避けなければならぬ、交接は獨り急性時に有害なる許りでなく、慢性に移行せる時にもあしし、又慢性時となるも汽車殊に電車に乘るは甚だ有害である、時として之れがため再び急性となることがある、慢性時になれば主として熱氣浴等をなさしめ、又時として壓迫療法をな

すことがある、されども病苦數年間も去らざるときは、開腹術を受けて、此等の病弊を除去せざるべからざることがある、兎に角速に醫師の診療を受けなければ、自然に治癒することはない、凡そ婦人の疾病に侵さるゝや、其通弊として、迷信に陷り易く、ために病の經過を不良にし、或は死することがあるから、注意せなければならぬ。

骨盤腹膜炎、子宮周圍蜂窩織炎

骨盤腹膜炎、子宮周圍蜂窩織炎等は各別に來ることあれど、又併發することもある、されども其症狀は類似して、素人で鑑別し難く、其養生法も共通のこと多きにより、併せ述ぶることとした。

原因、産後に來ること多く、寒冒などより引續き本病を起すこともある、其他喇叭管炎・盲腸炎、肛門周圍炎、骨盤カリエス等より傳達し來ることもある、特種の黴菌としては淋菌、結核菌である。

徵候、其急性のものは前述の子宮附屬器炎と等しく、或は夫れ以上重症の外觀を呈する、乃ち發熱强く、疼痛激しく、惡心、嘔吐を起し、腹部は膨滿して腹膜炎に似たる症狀を呈するにより、專門外の醫師よりは一般腹膜炎、又は盲腸炎などとして處置せらるゝことが多い、又婦人で盲腸炎と稱せらるゝものゝ中には、子宮附屬器炎又は本症が誤診せられて居ることも決して珍らしきことではないのである。

養生、前子宮附屬器炎の章にて述べしと等しき養生法をなさしむるを要す、只速かに專門醫の診療を乞ふことを忘れてはならぬ。

手術を要すべき婦人病

以下手術をなさなければ治療せぬ疾患及び手術を受くるものゝ心得べき事項を述べる。

手術の意義

凡そ手術とは人體に向つて傷害を與ふるもので、若し普通一般の人が斯くの如き行爲をなしたと假定すれば、これ取りも直さず傷害の重罪を犯すのである、然しながら醫師が人命救護のために敢て人體にメスを揮ひ、鋏を擬す事ありとも、人敢て